
ゲーテンベルクの歌

カオリエンドウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グーテンベルクの歌

【Nコード】

N1788E

【作者名】

カオリエンドウ

【あらすじ】

紫の瞳を持つ一人の少女と男の偶然の出会い。その出会いは、想像もつかない未来へと繋がっていた。少女は滅びたはずの一族の生き残りだった……。これは、ある一族の歴史と運命に翻弄されながらも強く生きた者たちの物語。すれ違う想い、生きる意味、私たちは今、何ができるんだろう。【第2章：旅、更新中】

第一章 山奥の日常1（前書き）

第1章：出会い

登場人物たちの出会いと旅の始まりまでの物語。

第一章 山奥の日常1

輝く毎日。

幸せな日常。

それでも、どこか不安を感じていたのはなぜだったのだろう。

太陽の光がまぶしい。

新しい緑の風が土と若葉の匂いを運んでくれる。命のにおい。

私は木々からこぼれる朝の光の中、井戸に向かいながらそのにおいを思いつき吸い込んで、いつの間にか隣に現れたイブに向かって言った。

「ああー！おはよう。今日もいい天気ね、イブ！私、一年のうちでこの季節が一番好き！」

水を汲みながらいつも何かと側で世話を焼いてくれるイブに笑いかける。

「おはよう。サーシャ、今日、リラが咲いてるのを見つけたわ。もう夏よ」

イブは歌うように答える。少し暖かい風が髪をなでて私たちの間を通り過ぎてゆく。

「本当？リラが咲いたら、忙しくなるわ。今日からは毎日薬草取りね」

忙しくて楽しい季節の始まりを告げるリラの花。初夏から秋にかけて、森の中ではいろいろな種類の薬草が次々と顔を出す。森の中の一軒家で生活する私たちにとって町で薬草を売ることがお金を得

る唯一の手段だ。基本的に食べ物や薬は裏の畑で作ったり森で採ったり自給自足の生活だけど、やっぱり自分たちで作れないものは買えない。それにいざという時のためにお金が必要だ。

でも、それ以上に私は薬草を売るといふ仕事が好きなのだ。山で薬草を探して、それを摘んで帰り、乾燥させたり、必要であればいくつかの種類を混ぜ合わせたり。一人で全部をするのは大変だけど、大好きな自然の中でできて誰かに喜んでもらえる仕事。町には少ないけど私の薬草を待つてくれている人がいる。

「朝ごはんが終わったら、さっそく出かけましょ。……おばあちゃん！」

嬉しさのあまり早くご飯食べなくっちゃと、水が入った桶を抱えてドアを開けながら大声でおばあちゃんを呼んだ。円いテーブルの奥の小さな台所では起きていたらしいおばあちゃんが朝食の準備を始めようとしていた。

「そんな大きな声で呼ばなくても、ずっと聞こえてたわよ。あんなに大きな声で話しているんだもの」

おばあちゃんは台所から首を出して呆れたように笑いながら答える。「ごめんなさい……。でも、リラが咲いてたんですって！もう夏よ。これから忙しい季節が始まるわ」

水の入った桶を置きながら自分でも思わず大きな声を出したことに苦笑いして一応誤る。

「そうね……」

でも、おばあちゃんは私とは違って少し浮かない顔だった。

「サーシャ、あなたも分かっていると思うけど……、ここでの生活も今年が最後かもしれないわ。」

ああ、と思った。ここ数年、おばあちゃんは街に下りて暮らすことを真剣に考え始めていた。私だって本当は分かっているのだ。おばあちゃんの足腰が年々弱くなってきたこと。街に薬草を売り

に行ったり買出しに行ったりをいつの間にか私一人でやるようになってい
っていること。水汲みや薪割り、力仕事はすべて私が引き受けてい
ること。

そしてもし、私が森で一人残されるようなことになってしまったと
したら……。おばあちゃんは色んなことを心配している。

特に今も、私に苦勞をかけてるんじゃないかって心配してくれてい
る。

それは、分かっている。だけど……。

「おばあちゃん、私ここでの生活が好きよ。毎日が楽しいし大変だ
なんて思ったこともないわ」

「それはそうよ。あなたは若いもの。でも私は違うの。特に冬はつ
らいのよ。それにもしあなたがこの山奥でこれから一生一人で過ご
すことになったらと考えると夜も眠れないわ」

私は思わず笑ってしまった。

「一生一人だなんて。私にはイブたちがいるわ」

「サーシャ、笑い事じゃないの。イブは人間じゃないのよ。それに
他の人に存在を知られるわけにはいかないの。あなたももう18な
んだから。とつくにお嫁に行ってもおかしくない歳よ？」

そう。確かに18歳にもなると結婚していてもおかしくはない。

私は先月、町に下りたときいつも薬草を買ってくれるパン屋の娘、
ターニヤがお嫁に行くという事を聞いたことをふと思い出した。確
か16歳だったと思う。おじさんは「ちよいと早いけど、まあ相手
も知ってるやつだしな、問題ないよ」と嬉しそうに笑っていた。相
手は20歳の幼馴染だって言ってた。

……結婚かあ……。

私には想像もできない。幼馴染はましてや年の近い男の人の知り
合いもない。

それは……いつかは私だって。結婚して子どもがほしいとは思っ
けど……。

でもそれはいつの話？

うっん、誰と？まだ恋だったしたことないのに……。

と、そこまで考えが至ってふと我に返った。

違うってば！今はそういう話をしてるんじゃないの。

「お嫁に行くにしても相手がいないもの。それにわたしだって分か
ってるわ。本当に必要になったら街で暮らすから。でも今はまだ……
このままがいいの。心配しないで」

おばあちゃんはもう少し何か言いたそうだったけど、私はにっこ
り笑って「お野菜、洗ってくるわね」と言って野菜の入ったかごを
手に外に出た。

外に出ると相変わらずまぶしい光と緑の風が迎えてくれた。

いつもはこの初夏の一面の緑を見るだけで笑顔になれる。

私の一番好きな季節。

おばあちゃんに怒られた時も、今日みたいに意見がぶつかった時
も。

命にあふれる森を見ると、自分の悩みなんてなんてちっぽけなん
だらうって気持ちを軽くしてくれる。

でも今日はどうしてか、輝く緑を見て泣きたいような気持ちになっ
ている自分がいた。

第一章 山奥の日常1（後書き）

始まりました。『グーテンベルクの歌』

長い長い物語になる予定です。

第一章を読み終わらないと物語の全体は見えてこないかと思われるます。

4人の人物を中心とした成長と恋愛の冒険ファンタジー。

気長にお付き合いいただければ幸いです。

第一章 山奥の日常2

風は日々暖くなり、緑は日々深まってゆく。
でも、私の毎日は変わらない。

今日は湖で水浴びをした。水はもうだいぶ暖くなって入っても寒くはない。これも夏が好きな理由。家の中でお湯を沸かして体を拭くのは大変だし……。

夜、髪をとかしているとおばあちゃんが部屋にやってきた。

「今日は外で水浴びしたのね」

分かっているんだから、というように私を見る。

「……！ばれちゃった？だって外のほうが気持ちいいんだもの」

肩をすくめて笑ってみせる。

「いつまでも子供みたいなことしないの。誰かがいたらどうするの」

「……気をつけるわ」

私は素直に謝った。おばあちゃんは心配性なだけなのだ。「貸して」というと私からくしを取り上げ、髪をとかしてくれた。

なんだか嬉しくなって目の前の机の上にある乾燥中の薬草たちに向かって微笑む。

「あなたはどんどん母親に似てくるわね」

何かを思い出すような言い方だった。

「お母さん？私のお母さんも紫の瞳だったんでしょ？」

珍しいな、と私は思った。

おばあちゃんはお母さんの話をあまりしたがらない。私が知っているのは、少し遠くの街に出ていたお母さんは私を身ごもってこの家に帰ってきて、私を生んだ後すぐに病気で死んでしまったということだけ。今も、お父さんは誰なのか分からないまま。だから私には両親の記憶がない。

「そうよ、紫の瞳に綺麗な金髪だったわ。だからあなたの髪も茶に金が混じってるのね」

「お母さん、綺麗だった？」

「ええ、とても綺麗な人だったわ……」

おばあちゃんはそう言うとはっとした様子でくしを机に置いて「はい、お終い」と言った。

……やっぱり、あまり話したくないみたいだ……。

「ありがとう」

につこりお礼を言うと、おばあちゃんはいたずらっぽく笑う。

「でも、あなたもお母さんに負けないくらい綺麗よ、サーシャ」

……おばあちゃんったら。

私は笑い返しながらもう一度「ありがとう」と言った。

おやすみの挨拶をしておばあちゃんは下に戻っていった。

私はいつもするようにこっそりイブを呼び出した。

夜は寝るまでイブと話すのが習慣なのだ。イブとは物心ついたときからずっと一緒にいる。もし私にお母さんがいたらこんな感じなのかも知れないなと思う。他の精霊たちは呼ばないと出てこないけど、イブは私が必要なときは呼ばなくても出てきてくれる。ちよっと人間っぽい精霊だった。

おばあちゃんは私がイブと大っぴらに会話するのが好きじゃないみたいだった。直接言われたことはないけれど時々そう感じることもある。私にはイブが見えるけれど、おばあちゃんには見えないか

らだと思う。

うつん、他の誰にも見えないらしい。だから子供の頃まだ私自身精霊のことをよく分かっていなかった頃は一人で何もないところと会話する私を見て、おばあちゃんは本当に心配したみたい。今では私が街でうっかりイブと話をしてしまわないかとっても心配している。

だから最近はおばあちゃんの前でイブと話しをするのはやめたのだ。でもイブは私の大切な友達。イブのいない生活なんて考えられない。

「イブ……」

いつものように声をかけるとイブはすーっと私の側に現れた。静かな風が舞う。

「ねえ、お母さんも私みたいに精霊が見えたのかな？」

「さあ、どうかしら。私には分からないわ」

「でも前に私にイブが見えるのは紫の瞳だからだって言ったでしよう？だからお母さんにも見えたんじゃないかしら」

「ええ、おそらくそうね」

イブははつきりとは答えてくれなかった。

「はつきりは答えられないこと？」

精霊にも特別の決まり事があるらしい。前に、人間にあまり干渉しすぎて私たちの歴史を変えることは良くないんだって教えてくれた。

「いいえ、本当に知らない事なのよ。私もあなたのお母さんを見たことがあるわけじゃないもの。見たことがあれば分かったかもしれないけど」

「じゃあ、イブはどうして私と一緒にいるの？」

これはもう何度もした質問だった。

「それも私には分からないわ。私が知っているのは精霊が大昔に紫

の瞳の者と契約を結んだということだけよ。私はサーシャの側にいるようにって日の精霊に言われて来たの。他の皆も同じよ」

「どうして紫の瞳だったの？」

これも何度もした質問。

「さあ、それも分からないわ」

返ってきたのは同じ答えだった。私は苦笑した。

「分からないことばかりね。他の皆に聞いても同じ？」

「ええ、同じよ。だって知らないんだもの。きっともう知ってる精霊もいないんじゃないかしら」

「そう……」

いつもの質問にいつもの答え。

私は質問を諦めて休むことにした。髪をゆるく編み終わるとランプを吹き消し、立ち上がってベッドに向かう。

「おやすみ、イブ」

声をかけてベッドに入る。

「おやすみなさい。良い夢を」

イブは静かに答えると風と共に消えた。

ベッドの中で目を閉じて思う。

……私の毎日は分からないことばかりだ……。

第一章 日常の終わり1

太陽が昇る。

どんな一日でも、一日の始まりには、いつもと同じように太陽が昇る。

「おはよう、イブ。今日もいい天気ね！」

朝、起きたらすぐに外に出てイブにも朝のあいさつ。これが私の習慣だった。

「おはよう、今日は町に行くんでしょう？」イブが聞いてきた。「今日は暑くなりそうよ。」

私はそれにうなづく。

今日はやっと乾燥が終わった初夏の新しい薬草を持って町に下りる日だった。

「じゃあ急がないと！本当に暑くなる前に山を下りたいわ」

降り注ぐ陽射しの中、私は水を汲んで家に戻った。大急ぎで朝食と朝の仕事を終わると「そんなに急がなくても」と呆れるおばあちゃんを横目に、慌てて準備をした。

「だって、今日は暑くなるって！」

私はそう言いながら昨日小さな袋に分けてあった薬草を慎重にかばんに詰め込んだ。

「サーシャ、そんなに慌てて街で大声でイブと話さないように気を付けるのよ」

慌てる私の横でおばあちゃんは優雅にお茶を飲みながら言う。

……ちよつとは手伝ってくれたっていいじゃない。

「そんなことしないわ!」

私はもう、おばあちゃんの次の言葉を予想できるくらい何度も聞いていた。

「イブのこと、誰にも知られないように」でしょ。分かっているわ、大丈夫よ」

二人で顔を見合わせて笑い合う。

「でも、本当に気をつけて。あと教会に寄るのを忘れないでね」

真剣な表情でおばあちゃんはもう一度そう言った。

「うん、分かっている。行ってきます!」

私は返事と共にすっかりうなずいて外に出る。

緑が生い茂る木々の間からは雲一つない青空が覗いている。高い太陽。

思わずため息をついてしまう。

……ああ、本当になんて綺麗に晴れた日なんだろう。

私は戸口に立つおばあちゃんに手を振り、町に向かって山道を歩き出した。

山を降りるとすぐに教会の裏に出る。

古い教会は町から少し離れた丘の上に町を見下ろすように立っていた。

教会の横を通りかかる時、木々の間から牧師さんが正面に広がる庭に水をやっているのが見えた。

「おはようございます!」

私が教会の横に出て大声であいさつすると牧師さんは手を止めてこっちに向かって声を上げた。

「おはよう、サーシャ。久しぶりだね。今日は薬草を売りに？」

私は庭に近寄りながら答えた。

「はい。夏の薬草が取れましたので」

牧師さんは私とおばあちゃんが山で二人きりで住んでいるのを何かと心配してくれて時々様子を見に来てくれたりなんかもする。親切で穏やかな牧師さんは町の人からの信頼も厚い。

私は牧師さんに日頃のお礼を言ってから薬草を少し渡してその場を後にした。

第一章 日常の終わり2

日常はその最後まで日常のまま、突然に終わりを告げる。
突然の終わりを知るためにはどうすれば良かったの？

「おじさん！おひさしぶりです、こんにちは」

私がまず寄ったのは貸本屋のおじさんの所。

「やあ、サーシャ。そろそろ来る頃だと思ってたよ。元気にしてたかい？それにしても相変わらずの美人だねえ」

思わず笑ってしまう。おじさんが私のことを美人だというのは挨拶の代わりなのだ。

「ありがとう。私はすごく元気よ。おじさんは、腰の具合はどう？」

おじさんは重い本の上げ下ろしのせいで腰痛持ちだった。

「大分良くなってるよ。サーシャの薬草は良く効くって評判だよ」

「本当に？それは良かったわ。これ新しい薬草ね、これからの季節はエルダーの葉。今と同じで湿布にして使ってね」

エルダーを手渡す。お金を受け取った後は色々な話をした。これも町に下りて来るときの楽しみの一つ。最近の町での出来事を聞くのだ。

おじさんと別れてからも私は家々を回って薬草を届けた。久しぶりに会う人ばかりだからつい、話が長くなってしまふ。だからいつも街に下りる時は一日仕事になる。絶対に薬草を売るよりも立ち話

している時間のほうが長いはずだ。

夕方、薄暗くなる前に町を出て家に戻った。

森に入ったらいつものようにイブが現れる。私はさっき聞いたことをイブに話しながら家に急いだ。

「おばあちゃん、ただいま！」

ドアを開けて声をかける。

……あれ？おかしいな……。

いつもなら夕飯の支度をしている時間のはずなのに、かまどに火が入っていない。

「おばあちゃん？いないの？」

もう一度声をかけて台所を覗き込む。

おばあちゃんはいた。

台所の床に倒れて……。

……っ！！

一気に体中の体温が下がったような気がした。それなのに心臓はやけに激しく高鳴っている。

手に持っていたかばんが落ちる音で私は我に返った。口からついて出たのは悲鳴だった。

「おばあちゃん！！どうしたの、しっかりして！！」

おばあちゃんは返事をしなかった。

私は動かないおばあちゃんを必死にベッドまで運んだ。

待っててね、みんなを呼んでくるから。と声をかけたような気がする。でもそれも定かかどつかは分からない。頭の中は真っ白で何も考えられなかった。ただ早く、早く誰かを呼んで来なければ。それだけだった。それだけを思いながら私は必死で山を駆け下りた。

……でも本当は気づいていた……。

ベッドに運んだとき、おばあちゃんの体が冷たかったことに。おばあちゃんの魂はもう、おばあちゃんの体を離れてしまったんだってことに……。

私はそのまま教会へ駆け込み、何事かと驚く神父さんに蒼白な顔でおばあちゃんが、と訴えた。

その後の事はあまり覚えていない。

葬儀は町の知り合いと牧師さんの手で行なわれた。すべては私を置いて滞りなく進められたようだった。気が抜けてしまった私は茫然としている事しかできなかった。街の人たちの温かい励ましの言葉も、お悔やみの言葉も一つも頭に残らなかった。

まるでぽっかり開いた空間の中に落ちて、そこから出られなくなってしまうみたいだ。私の周りは半透明な膜で覆われて、日常はその膜の向こう側で進んでいた。

……もう、おばあちゃんがいらないなんて……。

あまりに突然すぎて全然実感がわかない。

涙なんて少しも出ない……。

それからしばらく、私は教会に泊めてもらった。

私がいよいよ自分を取り戻したのは葬儀から3、4日が過ぎてからだだった。

牧師さんは一人になってしまった私のことを本当に心配してくれて、このまま町に留まることを何度も勧めてくれた。でも私はとりあえず家に帰ることにした。家にはすべてを置いて来てしまっているから。

牧師さんと町の皆に感謝を述べて、私は一人、細い山道を戻った。

第一章 発見1

運命は思わぬところで動き出す。

その行き着く先は運命自身も知らぬままに。

一人きりの夜は静かで空っぽだった。

私は戻った家におばあちゃんがない事が信じられなかった。家の中を見回してみる。いつもおばあちゃんが座っていた椅子、使っていたブランケット……。今でもあらゆるところにおばあちゃんを感じられるのに。本人だけが、もういないなんて……。

……本当に、なんて静かな夜なんだろう。

私はこんなに静かな夜があるなんて知らなかった。聞こえるのは風で木の葉が擦れる音だけ。こんな夜に限って鳥も動物の声も聞けない。

そう、私はなにも分かっていなかったのだ。一人ぼっちの本当の意味。おばあちゃんが心配していたことの意味を。

もう心から私の心配をしてくれる人はいないんだ……。

「……うう……っ、おばあちゃん……」

私は一人きりの家で、初めて涙を流した。

昼はいつも通りに薬草を集める。しかし、泣きながら過ごす夜が溜まっていく。

なぜだか涙が枯れることはなかった。泣き続けて目が腫れても、頭が痛くなっても、涙は止まらない。私の涙腺は壊れてしまったみたいだった。そんな私を心配してかイブはずっと黙って側にいてくれた。

そしてそんな生活が一週間ほど続いた頃、私の目の前にイブとは別の精霊が現れた。

「ちよつと、あなたね、いい加減泣くのやめたら？このまましばらくでなくなっちゃうんじゃないの。ほんと、不細工な顔ね！見てられないわ」

不機嫌そうに体の前で腕を組んで眉をしかめている。

それは水の精霊、アクアだった。私が10歳の時に突然現れて、それから私の側にいる精霊。呼びもしないのに出てきたのはこれが初めてだった。言い方は悪いけど私を心配して出てきてくれたみたいだ。

「……アクア……」

涙でぐしゃぐしゃの顔を向けるとアクアは少し表情を和らげた。

「いい？サーシャ、人間はいつか絶対死ぬのよ。あなたのおばあちゃんは十分に長く生きたじゃないの。何を悲しむ事があるの。このままあなたがずっと泣いてたらおばあちゃんは心残りで生まれ変わる事もできないわ」

おばあちゃんはきつと今も私を心配してる。

目をつぶるとおばあちゃんの心配そうな顔がまぶたにちらついた。私はアクアの言葉で目が覚めたような気がした。

……そう、そうよね。

「このままずっと泣いてるわけにはいかないのよね……」

「そうよ、このまま泣いてもあなたが一人だつてことには変わりはないの。しっかりしなさい」

「……うん……。……ありがとう、アクア」

そう言つとアクアはちよつとほつとしたような顔をして「そうよ。分かればいいのよ、分かれば。ほんとに世話のかかる子ね」と言つてさつと消えてしまった。

……きつと私がこんな状態じゃおばあちゃんは喜ばない。

「このままじゃ駄目よね……？」

私がつぶやくと今まで何も言わなかったイブはにつこり笑つた。

次の日から私は泣くのをやめた。

悲しくなくなつたわけじゃない。虚しさが満たされたわけじゃない。でも私はもう十分に涙を流した。このまま悲しんでいてもどうしようもない。これからは一人ぼっちだ。ずっと泣いている事はできない。

私はどうしたらいいんだろう。町に下りて暮らしたらいいの？でもこのまま山で一人でいるのもきつと良くない。おばあちゃんが心配していた通り、ずっと一人になつてしまう……。

山を下りよう。

しばらく考えて私はそう決心した。これからは町で暮らそう。町で何をすればいいのかはまだ分からないけど……とりあえずは教会に置いてもらつて、そこから新しく始めよう……。

山を降りる事を決めた私は、まず家の整理に取り掛かつた。

家にはそんなにたくさん物があるわけじゃないけど。服とか生活に最低限必要な日用品、食器や台所用品に家具くらいだ。でもすべてを持っていくことはできない。特に家具は私一人だけではこ

から動かせない。それにどれもすごく古い。後で牧師さんに相談してみないと。

そんな事を思いながらおばあちゃんの部屋の古いタンスを整理していた時だった。

私はタンスの中に見たことのない小さな包みを見つけた。

それは大事そうにいつもは使われていなかった一番下の引き出しの奥にしまわれていた。

……何だろう？

手にとって包みを広げてみると中からは鈍い光を放つ金のネックレスと古い一枚の紙が現れた。

ネックレスは不思議な形をしていた。太陽の形をしたチャームの中に二つの星形の穴が開いている。おばあちゃんがこんなネックレスをしているのは見たことがない。

そしてそれと一緒にしまわれていた色があせてしまった紙。

これって……？

何気なく広げてみるとそこには流れるような美しい筆跡の細かい文字が並んでいた。

それは、母からの手紙だった。

第一章 発見2

どんな一日の始まりにも太陽は昇る。

でも、その太陽が持つ意味が同じ日は一日だってない。

『 ご親切にしていたのに、子供を置いたままここを出て行く私をお許してください。』

私はある者に追われているのです。

このままここにいれば親切なあなたにもきつとご迷惑が及ぶでしょう。

ですから、私は行かなければなりません。

この子には他の子とは違う不思議な力が備わっています。

その力は成長すれば分かるようになるはずです。

しかし、できればこの子をここで、普通の子供として育ててほしいのです。

そしてその力が他の者には絶対に知られないように。

この子の持つ力は必ず不幸を招きます。絶対に、絶対に誰にも知られないように。

子供の名はサーシャといいます。サーシャ・ティアイエル・グーテンベルク。

しかし、もし、あなたが自分の孫として育ててくださるのであれば、この子にグーテンベルクという名を告げないでほしいのです。

そして私がこの子の本当の母親であるという事も、私のことは死んだ、とお伝えください。

これが勝手なお願いであることは十分に承知しております。しかし、こうする事がこの子にとって最も幸福な生き方であると信じています。

どうか、どうかサーシャをよろしくお願いします。 ㇿ

この手紙は……何……？

手紙を読み終えた私はその思いがけない内容に手紙を握り締めたまましばらく呆然としていた。

……どうということ？

何かなんだか分からない。

私はその手紙が理解できるまで何度も繰り返し読み返した。

……これは、お母さんの置き手紙だわ……。

この手紙から私が分かる事はおばあちゃんは本当のおばあちゃんではなかったということだった。そしてお母さんはどこからか逃げてきて、この家に私を置いて行ってしまったということ。

今までのおばあちゃんの話は嘘だったの……。頭の中がすうっと冷えていくような感覚があった。

ずっと私に優しくしてくれていたおばあちゃんと私は血が繋がっていない……。

「じゃあ私の本当のお母さんは、誰？」

「私はこの家に置いていかれたの？」

「イブ……」

「風が舞う。」

「ねえ、これってどういう事なの？不思議な力って……精霊の力の事よね？」

「そうよ」

「イブは当然じゃないの、という顔をした。」

「じゃあ、このグーテンベルクって何？私の名前はサーシャ・テイアイエルだって言われて今まで生きてきたのよ。グーテンベルクが私の本当の家名？」

「ええ、おそらくそうよ」

「おそらくって！これも、はっきりとは言えない事なの！？」

「私は動揺して思わず大きな声を出していた。声を荒げた私にイブは少し困ったように言った。」

「その手紙があなたの本当の母親のもので、そこにあなたの名がグーテンベルクだと書いてあるならば、あなたはグーテンベルクだということよ」

「そう……。つまり、はっきりとは言えないって事なのね」

「要するにこれは重要な問題だということだった。イブが言葉を濁すのはいつも私の生まれに関わる事を聞いた時だったから。今までも肝心な事は教えてくれなかった。」

「おかあさんは私が生まれてすぐに死んだのではなかったの？」

「私を置いてどこに行ったの？」

「お父さんはいるの？」

「私の持つ力が必ず不幸を招くってどういうこと？」

「グーテンベルクが私の家名？」

この手紙は本物……？

答えが見つからないまま夜が更けていく。

……おばあちゃん……、どうしてこんな時に側にいてくれないの……。これはどういう事なの？ 答えを教えてください……。

また目頭が熱くなる。

頭の中では疑問ばかりが渦巻いて、爆発しそうだった。

朝方、ようやく眠りについた私は次の日もう一度冷静になって手紙を読み返した。

そして、結論を出した。この手紙はおそらく本物だろうと。

この家には私とおばあちゃんしか住んでいない。わざわざおばあちゃんがこんな嘘の手紙を書いておいて置くわけがない。

……それに……どっちにしても、もうこのままじゃいられない。

このまま、何も知らないまま、この手紙の内容に知らない振りをすることなんてできそうにはなかった。

……だって、自分の事だもの……。

私は今までずっと、疑問に目をつぶってきた。お母さんの事、精霊の力の事。私には知らない事が多すぎる。聞いてみても言葉を濁すおばあちゃんやイブにどこか不満を覚えながらも、今までは積極的に知ろうとしてこなかった。

けれど、自分の名前すら曖昧なまま、一生不満を抱えて生きていくのはもう嫌……。

そう、もしかしたらこれはいい機会なのかもしれない。

手紙が私に本当のこと知りなさいと言ってくれているような気がした。

心は決まった。とにかく調べてみよう。
町へ降りて、今、私ができる限りの事を……。

次の日、私は育った家に別れを告げて山を降りた。

第一章 発見2（後書き）

ここまで来てようやく一人目の登場人物のフルネームが発覚。
ストーリーのメインになる人物は4人います。
まだ、これから3人も……。。

第一章 町

出会いと別れは隣り合うもの。
私は迷いの中であなたと出逢った。

夏の強い日差しが和らぎ、日が傾きかけた頃。私は町の中心部にある小さな広場の片隅のベンチにぼんやりと座っていた。

しばらくは教会に置いてもらうことになった。でも、ずっと教会にお世話になるわけにもいかない。これから町でどうやって生活していくか、考えなければならぬ事はたくさんある。

午後の広場は和やかな雰囲気だった。穏やかな風が頬をなで、見つめる先では幼い子供たちが歓声を上げて走り回っている。夕食の準備にはまだ少し早い時間。母親たちも子供たちの側で家事の合間の談笑に花を咲かせていた。

私は町に出てきたはいいいけれど、何から始めればいいのか見当がつかなかった。

物知りの靴屋のおじいさんに聞いてみるとか、牧師さんに聞いてみるとかも考えた。でも、絶対に秘密にしてほしいと言っていた手紙の言葉を思い出すと精霊の力について聞く事もできないし、グーテンベルクという名前を出す事もためらってしまう。

……ああ、何かいい方法はないのかな。

大きく息をつく。考えてみればこんな小さな町でこっそり調べるなんて不可能だった。変な事を聞いてしまえばその噂はきつとすぐ

に広まる。

……大きな町に行くことができればいいのに。ううん、せめて精霊についての本が手に入れば……。

そこまで考えて、貸本屋の存在を思い出した。

……そうだわ、なんで思いつかなかったんだろう！

私は思わず立ち上がった。

貸本屋のおじさんなら自由に店の中を見せてもらえる。精霊についての本を置いてあるかは分からないけど。

貸本屋のある場所は教会からそれほど遠くはない町の山側だ。

……こんな中心にまで来る必要なかったんだわ。

悩みすぎていた自分に苦笑する。

やるべきことが見つかり急に気分が軽くなった私は、来るときに通り過ぎたはずの貸本屋に向かって歩き出した。

しばらくするといつもは気にならない人々のざわめきが気になった。

……なんだかいつもよりにぎやかなんじゃない……？

すると、突然叫び声が上がった。

「魔物だ！魔物が現れたぞ！」

「こっちに向かってる！」

「逃げる！でかいぞ！！」

つられて次々に悲鳴が上がる。

人々が一斉こちらへ向かって走り出すのが見えた。

魔物は山から下りてきたみたいだった。

山から下りて、そのまま真っすぐ街の中心地へ向かっているらしい。その魔物が建物の影から姿を現した。

……うわぁ、大きい！

思わず口をぽかんと開けて見上げてしまう。背丈は5Mほどもあるだろうか。岩のようにごつごつした茶褐色の肌をした巨人だった。歩きたびに頭や体から小石やこぶしくらいの大きさの岩のようなものをばらばら撒き散らしながら町の中心部に進んでくる。

珍しいわ、と私は思った。山に住んでいてもあんなに大きな魔物にはまずお目にかかれない。ここは比較的魔物の少ない安全な国なのだ

魔物は別に暴れているわけではないけれど、落ちてくる石や岩にあたれば怪我をしてしまう。それにこのまま町の中心に進んでくれば踏み潰される家も出てくるだろう。

私も逃げなくちゃ、と体の向きを変えた時、建物の影に女の子がうずくまっているのに気がついた。さっきまで人がまばらだった通りは逃げようとする人々の波と魔物の退治に向かう自警団の人の波とで大混雑していた。それぞれに必死な人々は女の子の存在に注意を払う余裕がないようだった。

私は慌てて駆け寄った。

「どうしたの、お母さんは？」

うずくまる女の子の側にしゃがんで声をかけると女の子はしゃくりあげながら答えた。

「……分らないの、っ……はぐれちゃったの……」

どこかで転んだようで足からは血が出ている。

「そう、大丈夫よ。きっとすぐ会えるわ、お名前は？」

「マギー」

「よし、マギー、しばらく私と一緒にいようね。とりあえずはここから離れましょう」

私はマギーに笑いかけてから抱き上げた。その時、歓声が聞こえ魔物から逃げようと動いていた人々の波が急に穏やかになった。

……なに……？

私もつられて歓声の先に目をやる。他の人も同じような反応だっ

た。中には魔物がいた方へ戻ろうとする人までいる。

「イスニア国軍だ！」

「国軍だ、国軍が来たぞ！」

「魔術師もいるぞ！」

誰かの叫ぶ声と同時に歓声上がりそれを聞いた人々のざわめきが広がった。そして人々は魔物のいる方へ進みだした。

……どうしてここに国軍がいるの？

私も気が付けば逃げるのを忘れて歓声の先に足を進めていた。

それは本当に国軍だった。しかも本当に魔術師の姿まであった。

……魔法！すごい……、本で読んだことしかない……！

私の知る限り、この小さな町に魔術師が来た事は一度もなかった。魔法を使えるのは限られたごく一部の人間だけなのだ。私は今の状況も忘れて初めて見る魔法に見とれてしまっていた。周りの人々も皆、同じような状態だ。

魔術師の攻撃で魔物はみるみるうちに弱っていった。

最後の大きな衝撃を受けてふらつく。悲鳴のような咆哮を上げると魔物は膝をついた。体からは岩がぼろぼろと崩れるようにこぼれ落ちる。人々はその様子に興奮の声を響かせた。誰もが、魔物の最後を確信した。

……嘘……っ！！

その時、魔物は倒れ込む直前に爆発を起こした。膝をついた後、上半身が大きな音を立ててはじけ飛んだのだ。初めはこすれるような小さな音が続き、次第に大きな爆発へ。はじけ飛んだ岩の塊が広範囲に広がり降ってくる。辺りは一気にパニックに陥った。

人々は再び一斉に街の中心部へ向かって走り出した。魔物と近い距離にいた兵士たちも魔物と距離をとろうと離れた。魔術師が空

に掲げた手からは光があふれ出し、広がっていく……。

混乱の中、私も逃げ出そうとした。するとその時、今までで最も大きな爆発音が響いた。振り返ると岩が四方に飛び散るのが見えた。

……ダメ……、このままじゃみんなが岩に当たってしまう……。

周りは逃げ惑う人々の悲鳴と喚声で混乱していた。

「岩が来るぞ！しゃがめ！」

「頭を守れ！」

「助けて！！！」

私はとっさにしゃがみ込み、イブを呼び出した。

「イブ！」

声は喧騒の中に吸い込まれた。

イブが現れる。すると同時に風が巻き起こり、周りに降り注ぐようにしていた岩々は再び空に吹き戻され、魔物の下半分だった岩の塊が散乱している所まで飛ばされた。

「……」

急に辺りに静けさが広がる。人々が恐る恐る頭を上げる中、私も抱え込んでいたマギーの無事を確認し、周りを見渡した。周りは町の人ばかりで不自然な風の正体には何の疑問も抱いていないようだった。人々は口々に助かった、魔術師のおかげだ、と喜び合っている。

……よかった。気づかれなかったみたい。

まだ空に浮かんだままこちらを見下ろすイブに目で合図を送る。

彼女はすーっと空に吸い込まれるように消えていった。

「あつ、ママだ！ママー！」

「マギー！ああ、無事でよかった！」

腕の中の女の子が叫んだ。母親が見つかったようだった。私はお礼を言って走り出した女の子に笑顔で手を振り返す。

ああ、なんだか少し寂しい気分。私も貸本屋は明日にして、今日はもう教会へ帰ろうかな。

そんな事を思ったとき、私は強い視線を感じたような気がしてふと魔術師たちがいる方へ目をやった。

「……………」

多くの兵士たちの中、真っ直ぐにこちらを見つめる馬に乗った男の人と視線がぶつかった。

……………何？……………もしかして、見られてた？

そう思って慌てて目を逸らす。

でも視線を外した瞬間に、私は彼から目を逸らしたことを後悔した。

第一章 町（後書き）

第一章 出会い1：ジェラルド

今でも時々思う。

もしあの時、彼女を追わなければ。

もしあの時、彼女に名を問いかねなければ。

彼女をこんな運命に巻き込むことはなかったのではないか。

彼女はもっと簡単に、普通の幸せを手に入れていたのではないかと。

魔物が町に侵入したという情報が入ったのは偶然だった。普段なら駆けつけられる範囲には、城から派遣されている、あまり優秀とはいえない国境警備隊と町で組織された自警団しかない。だが昨日は2年ごとに交代する国境警備隊の交代式があった。俺たち国軍は交代式と新しく派遣された部隊の激励に参加した後、たまたま、この国境に近い町に立ち寄っていたのだ。

このタイミングで街に下りてきた魔物は運が悪かったとしか言いようがない。岩の性質の魔物を剣で倒すとなればかなり手を焼く。普段の警備であれば町に大きな損害が出ただろう。しかし、魔物は国軍の魔術師によってあっという間に倒されることになった。

Ⅰ 岩が飛ばされた？

思わず自分の目を疑った。俺は突然の爆発と降ってくる岩に対して結界魔法を張り、自分とその周りの兵士を守るので精一杯だった。魔術師ではない俺はそれほど広い範囲に結界を張ることはできない。

最後の大きな爆発。偶然視線をやった先に落ちていく岩、その先で人々が屈み込むのが見えた。まるで時間が止まったかのようにゆっくり感じた。

あの岩に当たれば軽症程度では済まない。何とかしなければ思った瞬間、目に見えない大きな力が起こり、岩は巻き戻されるように空に押し上げられたのだ。

……今のは何だ……。

その風は明らかに一人の娘を守るかのように、娘のいる場所を中心に巻き起こった。

いや、違う。あれは風などという生易しいものではなかった。

大人の頭大ほどの岩を複数、空に押し戻すだけの力のある突風。そのような竜巻状の突風を一瞬にして起こすのは魔法以外にありえなかった。しかも高度な魔法だ。風を操る魔術師以外は使えないはずだった。

だが、今日、ここに風の魔術師はいないのだ。

あの娘が魔法を？

しかし呪文を唱えたようには見えなかったし、娘は岩に向かって手を向けることもしなかった。

……どうということだ……。

周りの兵士でその事に気づいた者はいない様子だった。頭のなかで考えているうちに、娘が抱えていた少女と別れて立ち去ろうとしているのが見えた。

その時、娘がふとこちらを向いた。

確かに視線が交わった。が、それはすぐにそらされた。

……このまま行かせるわけにはいかない。

俺はなぜかそう強く思った。理由は分からない。しかし目があつた瞬間、あの風はあの娘が起こしたものだ、という確信めいたものが生まれたのだ。

馬を娘のほうに向けると隣にいた大尉が聞いてきた。

「キーナン中佐、どちらへ？」

それには答えず、周りを見渡して声を張り上げた。幸い死人は出ていないようだった。

「怪我人の手当てが最優先だ！民の負傷者に手当の場所と道具の確保を！大尉、岩を片付けるために怪我人を除いた警備隊一部隊を残らせろ、お前が指揮を取れ。それ以外は先に城に戻してかまわない」

「了解しました」

すぐに大尉が代わって声を張り上げるのを後ろに聞きながら馬を急がせた。

「待て！その娘、少し話が聞きたい」

淡いグレーのワンピースを着た後姿に声をかけると娘はびくつと肩をこわばらせ、恐る恐るといった様子で振り向く。それと同時に呼び声に驚いた近くの関係のない者も何人が振り向いた。

「はい……、何でしょうか……？」

見上げる娘と再び目が合って驚く。

さっきは気が付かなかったが吸い込まれそうに大きな瞳は透き通った紫色だった。

美しい娘だ、と思った。

紫の瞳に白い肌、目を縁取る長い睫に花が咲いたような唇。
日の光で金に輝く薄い茶の髪……。俺たちはしばらく見つめ合っ
ていた。

「珍しい色をしているな。」

娘ははっとしたように目を伏せた。

「生まれつきです。」

警戒しているのがはつきりと感じ取れる硬い声。

「名はなんと言う？」

「サーシャ……。サーシャ・ティアイエルです。」

「……そうか。それで、魔法が使えるのか？」

まさか名前の次にいきなり確信を突かれるとは思わなかったのか。
娘は驚いたように目を丸くして言った。

「いいえ！魔法は使えません！」

今までで一番大きな声。動揺が手に取るように伝わってきた。

「では、何が使える？」

「え？」

「魔法は使えないんだろう？何が使えるんだ？」

口の端を片方だけ上げて目を細めて見下ろされると、娘は下を向
いて口ごもった。

「い、いえ、あの、そういう意味で言ったのではなくて……。私は
別に……。な、何も使っていません！」

……。嘘が下手な娘だ……。

その焦った様子に説得力は全くない。そう思いながら俺は自分の
確信を深めた。

そして、さつき紫の瞳を見た時に頭の片隅に浮かんだ名前を告げた。
それは本当にふと思いついただけだった。

この大陸の歴史を学んでいれば絶対に知っている一族の名前。

「まさかとは思うが、お前はグーテンベルクか？」

返ってくる答えが肯定であるはずなどなかったのだ。
しかし、驚いたように顔をあげた娘。

彼女の見開かれた目の中の紫が大きく揺れた。

それは肯定を意味していた。

第一章 出会い1：ジェラルド（後書き）

ついにサーシャ以外の主要人物登場。

名前はジェラルド・キーナン、イスニア国軍の中佐です。

第一章 出会い2

そう、これがすべての始まりだった。
これから続く、私たちの 長い、長い物語の始まり……。

グーテンベルク。

まさか初対面のこの男の人の口からこの名前を聞くとは思わなかった。

「どうして？……どうしてグーテンベルクという名前を？」

「お前は本当にグーテンベルクなのか？」

男の人は疑っているような怪訝そうな目を私に向ける。

グーテンベルクってそんなにも有名な名前なんだろうか。それにしてもどうして私がそうだって分かったの？

混乱の中、私は正直に答えてしまっていた。

「分かりません」

「分からない？どういうことだ」

「親を知らないんです。自分がどこで生まれたのかも知りません」

「この大陸の歴史を学んだことが？」

「いいえ、ありません」

……大陸の歴史……。歴史書を見たらグーテンベルクについて何か分かるんだわ……。

私はやっぱり明日は貸本屋に行つて調べてみようと思ひ切つた。

「ではなぜ、グーテンベルクの名を知っている」

その人は相変わらず訝しむような眼を私に向けていた。

それは、話すと長くなるんだけど……。

私はどう答えるべきか迷つていた。私自身、自分の家名が本当はグーテンベルクらしいと知つたのはたった5日前なのだ。それも母親らしい人の手紙に書いてあつたと言うだけ。まだ確信はない。私はなんて曖昧な存在なんだろう。自分の名前さえ、自分ではつきりと分らないなんて……。何故か虚しい気分になる。

答えようと思ひない私を見て男の人は質問を変えた。

「親を知らないと言つたな。今、一人で暮らしているのか？」

「いいえ、教会に住まわせていただいています」

その人は少し考えるような素振りを見せてから、逆らうことは許さないとつた断固とした口調で言つた。

「後でお前を迎えに行く、教会で待っている」

「……っ!!」

驚きすぎて声も出なかつた。私は口をぽかんと開けたままその人の顔を見上げる。

どうして急にそんな話に？ やっぱりさつきイブの力を使つたのがばれたの？

だから手紙はあれほど他の人に力を知られないようにと言つていたの？

「……ど、どうしてですか……」

この人は危険だわ……。私は出来ればこの人の前から逃げ出したと、気づけば足が無意識に一步下がり、腰が引けた状態で尋ねていた。

男の人は表情を全く変えなかつた。

「お前がグーテンベルクなら大変なことになる」

「……？」

私は言われたことの意味が分からなくて、何も言わずにその先を言ってくれるのを待つ姿勢でいた。するとその人は相変わらず無表情で、全く大変そうな素振りを見せないまま続けた。

「グーテンベルクは400年前に滅びた一族の名だ」

第一章 男1

慣れない相手、とまどう私。

あなたのすべてを理解できる日は来るの。

その人は私に驚きの言葉を告げるとどこへも行かないようにと念を押し、去っていった。

空は相変わらず抜けるような青だった。

私は爽やかな風が窓から入り込む教会の一室で、部屋の片隅に置かれたガーベラの鉢植えに水をやりながら、どうすべきか迷っていた。

待っていると言われた。

あの人は私をどうするつもりなんだろう。本当は待っていないで逃げ出した方がいいんじゃないの？でも、逃げるってどこに？

それにこのまま逃げ出したら力を使った事を認めるのと同じ事になる。だって、あの人は私がイブの力を使った事を見ていて、声をかけてきたに違いないもの。

それにしても……滅びたってどうということなの？

疑問は尽きそうになかった。

けれど、これはチャンスかもしれない。あの人はグーテンベルク一族について何か知っているみたいだったもの。もし運がよければ彼からグーテンベルクについての情報を得ることができる。

教会の部屋に閉じこもったまま外に出ようとしないうちに私を見て牧師さんは心配そうだった。申し訳ないとは思っているけど、相談する事もできない。

ぐるぐると考えて結局、私は彼が来るのを待つ事にした。とりあえず、話をしてみないと何も分からない。

……呆れた！

あの日から三日目の昼を迎えて、私は部屋で大きく息を吐いた。なんて事だろう。連絡もないまま三日も放っておかれるなんて。

これはもう忘れられたに違いなかった。私ばかり一人でこんなに悩んで、馬鹿みたいだ。

今日来なければ、明日こそは貸本屋に行って調べてみなきゃ……。

その日、雲の間から赤い西日が差し込む頃、私は馬のいななきを聞いたような気がして窓から下を見下ろした。

嘘っ！？もしかして、本当に来たの？

もう来ないものだと思いはじめていた分、実際に来られると動揺してしまう。

すると階段を駆け上がる音が聞こえ、牧師さんが慌てた様子で私の部屋の扉を開けた。

「サーシャ！国軍の方が君に会いたいと下に来てる。いったい何をしたんだい！？」

「え、えっと、何もしていないと思うんだけど……」

「とにかく、下りてきてくれ」

それは本当にあの日見た男の人だった。

「遅くなって悪かった」

全く悪く思っていないさそうなぶつきらばうな言い方。それに怖い顔。

……ああ、どうしよう……。

彼は私が今までに見たことのないタイプの人間だった。

牧師さんに案内された教会の一室で、私はお茶を飲む振りをしながら目の前に座っている男の人をこっそり観察していた。

……前に話した時はそんな余裕なかったもの。

その人はすごく背が高かった。今まで見た男の人の中でも間違いない一番だ。それに、なんだか全体的に大きな人だった。しっかりとした首に広い肩幅。こんな人、この町にはいない。

短く切られた漆黒の髪、整った形の眉、綺麗な色のブルーの瞳にすつきりと通った鼻筋。日に焼けた肌の色。でも、鋭い目つきと変わらない表情のせいで近寄りがたい雰囲気。

静かに紅茶を飲む男の人を見て、ああ、こんなふうな男の人と二人きりで話すのは生まれて初めてかもしれない、と場違いな事をぼんやり考えた。

……ダメよ、気をつけないと。

私は自分に言い聞かせた。きつと、この人は私がイブの力を使っていたのを見ている。だから私に声をかけてきたのだ。手紙にも何度も書いてあったように、精霊の力のことを知られるのは良くない。

「あの、どうして私がグーテンベルクだとおっしゃったのですか」私が恐る恐る切り出すと、その人は飲んでいた紅茶のカップを戻し、姿勢を伸ばして私に鋭い視線を向ける。

「その瞳だ。グーテンベルク一族は皆、紫の瞳を持っていたと言われている」

瞳の色。まさかそれで分かるなんて……。

私はあまりの分かりやすさに愕然とした。

町の人たちには珍しい色だと言われたことがある。でも、それだけだった。でも、紫の瞳の者がグーテンベルクなら、おかあさんもそうだったってことだ。

「それだけで、グーテンベルクだと分かるのですか？」

「さあな、はっきりした事は分からない。しかし、今まで歴史上、グーテンベルクと呼ばれる者は必ず紫の瞳を持っていたと聞く。逆に、紫の瞳を持っていてもグーテンベルクではなかった者がいたかどうかは知らないが」

「……」

「お前はなぜ、グーテンベルクを知っている？」

「え、えっと、母の手紙を」

鋭い眼差しを向けられた私は、精霊の存在以外は正直に話すことにした。精霊の力さえ知らなければ、それでいいと考えたのだ。それに、この人は私がグーテンベルクだと確信しているように見えた。今更彼の考えを変えさせるなんて私には不可能そうだった。

……だって、怖い……。

あの、すべてを見透かしてしまうような眼。

嘘をついて後でばれてしまった時のことを考えると今、正直に話してしまっただ方が絶対にいい。

何を考えているか分からない無表情、堂々とした威圧的な態度、私に逆らう気を起こさせなくする低い声……。

国軍の人ってみんなこんな人たちばかりなの？

すべて話し終えると、その人は言った。

「お前に王都へ来てもらいたい」

私は突然の申し出に唖然とした。

「え、でも……どうして……？」

「俺たちは知りたい。お前が本当にグーテンベルクの生き残りなのかどうか。もし、そうだとしたら400年間どこで何をしているのか。エルンならここよりも情報が多い。歴史書もたくさんある。この田舎にいるよりは、何かが見つかりやすいだろう。お前だって、知りたいだろう」

確かにそれは魅力的な提案だった。私だって、自分に関係のある事を知りたくないわけがない。ここにも限界があることは分かっている。でも……。

「私はこの街から出たことはありませんし……。王都に行くなんて、とても……」

「言っただろう、俺たちも知りたいんだ。力になろう、約束する。それに、王もお前と会いたいと言っている」

王が私に会う。

今まで山奥で過ごしていただけの私に？

これでは断ることなんてできないじゃない……。

内心呆れるが、彼の言うとおりだった。きっと王都に行った方がここにいるよりも知りたいことは見つかるはず。それに、きっと私はこのまま一人でいても何もできない。町に下りてきたはいいけど、何から調べればいいのか分からなくて困っていた所なのだ。

この人が手伝ってくれると言うのなら……。私は決心した。

「本当に……、お手伝いしてくださるのですか？」

「ああ、約束しよう」

彼は頷いた。

その後、その人は驚く牧師さんに事情を説明してくれた。

何をどう話したのか詳しい事情は秘密にしたまま、私がエルンに行くことをすんなり納得させてしまったのだった。

第一章 王都へ

明日は何を見るんだろう。

未来には何が待っているんだろう。

恐怖なんてまだ、知らなかった私。

出立の日の朝、教会の前には話を聞いた街のみんなが集まってくれていた。

パン屋のおじさん、おばさんにターニヤ、貸本屋のおじさん、薬草を買ってくれていた人たち。

そうだった。私にはこんなにもたくさん温かい人たちが、心配してくれる人たちがいる。一人ぼっちなんかじゃなかったんだ。

その事に気づき涙ぐみそうになるのをこらえて笑顔で手を振った。

「ありがとうございます。行ってきます！」

みんなは口々に別れの言葉をかけてくれた。

「元気でやるんだよ、サーシャ」

「早く戻っておいで！」

「帰ってくるのを待つてるからね！」

おばあちゃん……行ってきます。

深い緑で覆われた山に目を向けて心の中で祈る。どうか、今度ここに帰って来るときにはすべての疑問に答えが見つかっていますよ

うに……。おばあちゃん、私を見守っていてね。
育った山と街はあつという間に遠く、小さくなった。

エルンまでは馬での旅だった。私にとっては初めての乗馬。もちろん一人で乗られるわけもなく、何から何までその人のお世話になりっぱなしだった。

馬に引き上げてもらうところから降ろしてもらうところまで。とにかく、大変だった。

一日中馬で走り、夜は宿に泊まる。

慣れない旅に疲れて果てていた私は後ろで支えてくれていた彼との会話がないこともあまり気にならずに過ごせた。

それに私は旅の間中ずっとお尻が痛かった。馬に乗ることがこんなにも大変な事だなんて夢にも思わなかった。

……この人は何ともないんだろうか。

私は後ろを振り返った。

「あの、お尻は痛くありませんか」

「いや。……慣れてるからな」

複雑そうな表情……。

出会ってから初めて表情を変えた彼になんとか嬉しくなつて、私はそのままその話題を終えた。

町を出て6日後。ようやく着いたエルンは素晴らしい所だった。

真っ直ぐに続く大通りには見たことのない人ごみ、人々の服はあらゆる色で街を彩り明るいオレンジ色のレンガで統一された通りと建物に映えていた。

その人の間を縫って走る様々な形の馬車。通りの両側を取り囲む店、店。パン屋にお菓子屋に洋服店に靴屋。見渡す限り、人が入っていないお店なんてなかった。

客を呼び止める声、交し合う挨拶。建物の窓辺には小さな色とりどりの花の鉢植えが街を彩り、あふれる夏の陽射しを浴びて輝いてい

た。

横から伸びる細い路地には住宅が立ち並び、走り回る子供たちと生活が奏でる音、そこで暮らす人々の活気に満ちている。

見ているだけで自然と笑みがこぼれてしまう。なんて楽しそうな街なんだろう。

「わぁ……！すごいっ！人がこんなにいっぱい！」

「おい、あんまり乗り出すと落ちるぞ」

思わず馬から身を乗り出して声を上げた私の腰を彼はしっかり掴んだまま呆れたような顔をする。

「だって、こんなの見たことないんだもの……」

私はもごもと言いつつ訳しながら姿勢を元に戻した。

……ちよつと、子供っぽかったかな……。

でもお城を見た瞬間、さっきの反省も吹き飛んでしまった。初めてお城を目にしたときの驚きはきつと言葉では言い表せない。私は声も出せなかった。

……なんて美しいの……ここが、王の住むところ……。

城壁に囲まれてエルンの街を見下ろすように立つ城は空に吸い込まれそうなほどの高さだ。

……いったい何階建てなんだろう？

屋根は深い青色。一番高い塔の屋根にはイスニア国の紺と金の国旗が風にはためいていた。一点の曇りもない真っ白な壁。緑の木々に囲まれた城はまるで別世界の建物のよう。

整備された木立を駆け抜けて城壁の内側に入りさらに驚く。城の正面には広々とした庭園が広がっていた。左右対称に作られた庭園には様々な形にせん定された植木。花壇に咲く色とりどり花はすべて零れ落ちそうなほどの大輪の花。

ありのままの森の草木しか見た事がない私には衝撃的な眺めだった。庭園の奥では大きな噴水が太陽に反射し光をきらめかせながら水を噴き上げていた。

何もかもが豊かで大きく、私の想像を超えていた。

お城に入るとそのままある部屋に連れて行かれた。

「ここで待っている。どこへも行くなよ」

頷いてみせる。するとその人はすぐに部屋を出て行ってしまった。連れて来られた部屋を見渡すとそこはリビングのようだった。

全体的に茶系統の色でまとめられた荘厳な作り。すごく広い。おそらくこの部屋だけで森の家の台所とリビング……ううん、家の一階全部を合わせたよりもまだ広い。なのにリビングにはまだ4つも扉がついている。

お城ってなんてすごいところなんだろう、と改めて思う。

広いリビングの中央には落ち着いた緋色のソファがあった。置いてあるソファに恐る恐る座ってみる。座ると、体が大きく沈んだ。

……すごい、ふかふかだわ……。

「ふふっ……」

そのことがうれしくて顔がにやける。

……ああ、私、本当にお城に来ちゃったんだ……。

その実感をかみしめながらしばらく座っていると、急にどっと疲れたような気がして私は知らないうちに眠りに落ちていた。

第一章 王1：ジェラルド

歴史書。

それは人間が繰り返す過ちを語る書物。

俺たちはそこから何を学べるのか。

「キーナン中佐、ただいま戻りました」

「入れ」

ドアを開けると王はいつもどおり奥の椅子で、机に積み上げられた書類に埋もれて座っていた。

「待っていたぞ、キーナン。報告は本当だろうな？」

王はそう言いながら笑いを堪えた様子で目を細めて俺を見た。

「わざわざ嘘の報告はしません」

俺は苦笑する。

「それで、その娘はどうした？連れてきたんだろう？」

「今、私の部屋で待たせておりますが」

「なんだ、楽しみにしていたんだ。すぐに連れて来い！」

ずっと欲しかった玩具をもらう前の子どものような顔だ。

王は笑いながら言うとともに俺を急かすように付け加えた。

「お前の報告を受けてから書類をほったらかしてグーテンベルクの歴史を読み返したんだぞ。間違いだったらお前の仕事も増やすかな」

……まったく、この人らしい。

「間違いでないことを祈りますよ。すぐに連れて来ます」

部屋のドアを開けると娘が飛び上がった。こちらを向いた。

目の焦点がなんとなく定まっていな。

……寝てたのか？

慣れない旅で疲れているのだろう。

「王がすぐに会いたいそう。付いて来い」

「えっ、えっ？」

側に近寄って告げる。慌てた娘は荷物を抱えたまま立ち上がった。

「荷物は置いていけ。またこの部屋に戻る」

彼女が荷物を置いて付いて来ようとするのを確認し、俺は再び王の部屋に向かって部屋を出た。

「失礼します」

俺は娘を部屋に戻した後、休んでいるようにと告げて王の部屋に戻った。

その人は深刻な顔をして机の上の何かを見つめていた。

さっきはあれほど楽しみにしていたにも関わらず、娘を見ると一瞬目を見開いて俺の方を見て、それからいくつかの形式的な質問をしただけだった。

名を聞いて、今までどこで、どういう生活をしていたかを聞いて……しばらく城に留まるようにと告げただけ。王はどことなくわの空な様子で、娘と話をしたのは時間にしてほんの10分ほどだった。

娘を見た瞬間に興味を削がれたのか。

それとも、見た瞬間に間違いだと判断したのか。

俺は娘を部屋に送り届ける間もずっと王の様子が気にかかっていた。

「私は仕事を増やされるのでしょうか」

聞くと王は静かに首を横に振り、今まで熱心に見つめていた物を机から持ち上げて俺に手渡そうとした。古い本だ。

「グーテンベルクの歴史書で300年ほど前にまとめられた貴重なものだ。この絵を見てみる」

開いたままの本を受け取って目を落とす。

そのページには女の肖像画が描かれていた。

……なるほどな……。

これが先ほど一瞬言葉を失った理由か……。

確かに、先にこれを見ていれば無理もないだろうと俺は納得した。

穏やかな笑みを浮かべながらこちらを見つめる女の肖像画。

その女はけぶるような紫の瞳に長い琥珀色こはくの髪をしている。

「今の娘にそっくりだ。間違いない。彼女はグーテンベルクの生き残りだ」

『グーテンベルク王国 第一王女ジゼル・スペンサー・グーテンベルク』

肖像画の下にはそう書かれていた。

第一章 王2：ジェラルド

未知の感情が生まれる。

それに気づいたのはいつだったか。

すぐに受け入れてしまえば、どんなに楽だったか。

信じられないという様子で言った王は、俺に聞いてきた。

「これはどういことだ。お前は、どう思う？」

「……私は初めから彼女はグーテンベルクだという確信めいたものを感じていました。それに本人も否定はしていません。しかし、これではつきり確信しました。彼女はグーテンベルクの生き残りですよ」

「……信じられん……」

王は静かにため息をついて片手で目の上を押さえながら言う。

「400年前だぞ。400年も昔に滅びたはずの一族だ。本当にこんなことがあるのか」

「もしかしたらグーテンベルク一族はまだ滅んでいないのでは？ 400年前の大戦の折に一族はばらばらになったが、どこかで再び一つになり、身を隠して今でも細々と生き続けているのかもしれない」

「どうやって身を隠す？ この大陸に秘境の地などないぞ。一族で集まって暮らしていれば見つかるはずだ。……それに400年だ。グーテンベルクの血は他の者と混じりやすい。戦で生き残りが少なくなっていればとうの昔に混じってしまっているはずだが……」

「しかし、そうとしか考えられません。彼女は母親も紫の瞳だったらしいと言っていました。そしてどこからか逃げてきた、と。母親もグーテンベルクだったとすると、他にも生き残りがいるかも知れないと考える方が自然です。それもそんなに少ない数ではないはずです」

「そうだな……。それにどっちにしろあの娘はグーテンベルクだ。娘はお前が見張っている。あまり他の者に存在を知られるわけにはいかない。部屋からは出すな。近いうちにどうするか決めよう」

王はそう言つと、ああ、まさか本当にグーテンベルクだとは、と独り言のようにつぶやいた。

部屋に戻ると娘はソファで眠っていた。

……今度は起きなかったな……。

眠っている娘を見ながらぼんやりと思った。

帰り道を思い出すと笑いがこみ上げる。見るものすべてが珍しいらしく、ずっと目を丸くしてきよきよと周りを見渡していた。それにしても城の庭園にあんな反応をした娘は初めてだ。

この城の庭園は細やかな手入れが行き届き、美しい事で有名だ。

……機会があれば連れて行ってやろうか。

俺はそんなことを思う自分に驚き、それから気づいた。

……馬鹿な……。

他の貴族に見つからず庭園を散歩する方法なんてあるわけがない。俺がこんな娘を連れて歩いているのを見られた日には噂好きの貴族に一瞬で噂が広まる。

それを想像してしまい、思わずため息をついた。

娘を抱き上げて、ベッドに運ぶ。部屋には客室もついている。しばらくはここで我慢してもらうしかないだろう。

「……ん……、……」

ベッドに寝かせると彼女は枕の感触を確かめるように小さく身じろぎした。目を覚ます気配は全くない。よほど疲れていたらしい。額にかかる長い髪をそつと払い、その幼い寝顔を見ながら思う。

…… 18だと言っていたがまるで子供だな。

この姿を見る限りでは、この娘が不思議な力を使うとされていたグーテンベルクの生き残りだとは誰も信じないだろう。

俺は静かに戸を閉めて部屋を出た。

第一章 王2：ジェラルド（後書き）

次回は登場人物紹介です。

重要登場人物紹介&裏話（前書き）

登場人物紹介について、これまでにまだ出てきていない情報が一部含まれます。

ネタバレが嫌な方は読まないで下さい。
読まなくても、本編に影響はありません。

重要登場人物紹介&裏話

【重要登場人物紹介】

サーシャ・ティアイエル・グーテンベルク

18歳。日の当たり具合では金に輝くうすい茶色の髪。背は普通よりやや高め。白磁の肌、花の咲いたような唇、アーモンド形の切れ長の瞳は神秘的な紫。それをとりかこむ長いまつげ。化粧をしていなくても、誰が見ても納得の美人。本人はその事に気づいていない。言動や行動などを見るとどこか幼い印象。また、やや天然か。世間知らずだが、明るく真っ直ぐで、人を疑わない性格。薬学の知識がある。

ジェラルド・キナン

28歳。短髪の黒髪、蒼い瞳。目つきは鋭いが男らしく誠実そうな見た目。長身でがっしりした体型。基本的に真面目な性格で何事にも動じない頼りになる大人。

サーシャには無表情で何を考えているのか分らないと思われるが、実は女性の扱いが苦手なだけ。

それほど口数は多くなく、口より先に行動するタイプ。剣の実力はかなりのもので、魔法も魔術師ほどではないが高度の魔法を扱う。属性は水。

サーシャにつく精霊（性別はない）

風：イブ

見た目は女性っぽい。サーシャが物心付いたときには側にいた。母親のような存在。そのせいか他の精霊よりも人間らしく、何かとサーシャの心配をしている。

水：アクア

見た目は女性っぽい。10歳の時に突然現れてサーシャに力を貸すことを宣言。自信に溢れたやや高慢な性格。しかし、サーシャが何かと呼び出すのはイブであることは少々気にしているらしい。

王：イスニア国二代目王　オリバー・イスニア・ヴァレンシユタイン

30歳で王位を継ぎ、現在47歳。長く続いた争いの時代を治め、イスニアに安定をもたらした力のある男。しかし不安定な時代が長く続いたため、平和になった現在も戦争に対して常に強い警戒を続け、イスニアの平和を守る事に日々心を砕いている。
妻はロクサンヌ。子供は三人。

【設定裏話】

こういうの読むの好きなんです。それぞれの設定に作者の思いが込められてるんだなーと良く分かれるところが好き。

だから、私も書きます！いらねーよ、と言われようが書きます！！
ネタバレはしていません。……ええ、おそらく。

NO・1 タイトルについて

『グーテンベルクの歌』ですね。
なぜ、『グーテンベルク』か。

それは、もちろんこの物語で最も重要な名前だからです。

グーテンベルクにしようと思ったのはなんとなく、です。すみません、安易で。響きが好きなんです。

では、なぜ『歌』なのか。

これも本当にふと思いついたのですが……『ニーベルンゲンの歌』とか『ローランの歌』あたりにヒントを得たんだと思います。

これらは実在する古い叙事詩です。世界史を勉強した人なら聞いた事があるはず。

実は、この物語の後半には“ローラン”という物語の鍵を握る重要人物が登場するんです（え、これってネタバレ！？）。

このローランの名前を決めたときは『ローランの歌』のことを考えたわけではないんですけど、すべてのストーリー設定を決めて、さてタイトルをどうしようって思った時に『ローランの歌』が思い浮かんだんです。

で、偶然なことに『ローランの歌』もある一族が中心の話で、その一族に關係する英雄を称えるために作られた（かなり大雑把な説明ですが）。

これはぴったりだ。使っしかないでしょう、と思ったわけです。

タイトルを『グーテンベルクの歌』にしてから、なんとか叙事詩っぽくできないかな、とも考えました。

そこでグーテンベルクについて調べてみたんです。それまでは、確かドイツ人の印刷機発明した人にそんな名前の人がいたような……くらいの認識しかかったので。

するとその通り。その人は確かにいました。

しかもその人が印刷したもので最も有名なものは『四十二行聖書』。

42行！物語を42行で統一すれば叙事詩と呼べそう！思いつき
り使えそう！！

でも……無理！！

その時すでに第1章はほとんど物語が完成していました。試しに
1話、2話をカウントしてみると82行、80行……無理だ！！
もし全部を42行でそろえればえらい事になる！ってことで諦めま
した。

この物語を最後まで書き終えて、余力があれば考えてみる事にしま
す。

えと、ここまでで分かる事。それは、私が受験の時に世界史選択
だったという事。ではありません（いえ、実際そうなのですが）。

それはこの物語を作るにあたって、あらゆるところで世界史から
ヒントを得ているということです。

主に登場人物の名前はそうです。今はまだ登場人物は少ないのです
が、これから出てくる人物はほとんど、世界史上実際に存在した人
または事物から名前をいただいています。

イメージに合わせてちょこつと変えた名前とかもありますが、
それらも後々設定裏話で語っていただけたいいなと思います。

えー、長々と語りましたがここまで読んでくださった稀有な方、
もしいらつしゃったら本当にありがとうございます。

登場人物説明だけではあまりにも短いなと思って書いてみました。

物語はまだまだ序盤に過ぎません。

サーシャとジェラルドはこれからどうなっていくのか……。明日からは今までどおり毎日更新です。引き続きよろしくお願いします。

第一章 男2

初めての朝、初めての顔。

たくさんの初めてに出会いながら、私たちは生きていく。

そう、毎日は初めてのくり返し。

目が覚めるとそこは、広々とした豪華なベッドの上だった。

薄暗く、見慣れない景色に一瞬自分がどこにいるのか分からなくなり、次の瞬間、ああ、お城に来たのだったと思い出す。

このベッドもふわふわ……。そんなことを思っ、ふと気づいた。

あれ、わたしいつの間にベッドに来たの？

それにこの部屋はどこ？

すると、部屋がノックされる音が聞こえた。

「はい？」

「入るぞ」

入ってきたのはあの男の人。

「……おはようございます」

「よく寝てたな。もう昼だぞ、昼食を持ってきた」

相変わらず表情を変えないその人はカーテンを開けながら言った。
……もうお昼？厚いカーテン……。朝日が入って来なかった。だからこんな時間まで気づかなかったんだわ……。窓から差し込む強い日差しに目を細める。

頭はまだ完全に目覚めてはいないようだった。ここは、森の家と

は全然違う。これからはイブとも朝の挨拶ができないんだ……。私はそんなことをぼんやりと考えた。

彼に続いて部屋を出ると、そこは昨日のリビングだった。

……そっか、隣りの部屋だったんだ。

「このこと、その部屋は自由に使ってたかまわない」

とりあえず頷いて答える。それから私は昨日のお礼を言っておいた方がいいだろうと思った。きつと、ソファで寝てしまった私をベッドまで運んでくれたのは彼だ。

「あ、あの、重かったでしょう？運んでいただいて、ありがとうございまして」

「ああ」

返ってきたのはそっけない返事だけ。

「……………」

それを聞いて、やっぱり迷惑をかけてしまったんだと私は心の中で反省した。

でも、もうちょっと何か言ってくれてもいいのに。彼はあまり話すのが好きじゃないんだろうか。

リビングでの食事はとても静かだった。食器の擦れる音が響いて聞こえるくらいに。

……何を話せばいいの……。

淡々と食事をするその人を盗み見てこっそりため息をつく。

目の前にいるのに会話は全くない。二人きりのなんとなく気まずい食事。気をつけないと自分の吐く息の音まで聞こえてしまいそうだった。私には、今彼が何を考えているのなんて全然分からない。

「しばらくこの部屋にいてもらうことになった」

食事を終えた後、その人は唐突に切り出した。私は返事をしてから気づいた。

あ、そういえば。

恐る恐る見上げて聞いてみる。

「あ、あの、顔を洗いたいんですけど……どこに行けば……？」

「ああ、そうだった。……すまなかった。こっちだ」

「い、いえ！」

慌てて首を振る。

よ、よかった……。

驚いた事にリビングから続く扉の向こうには浴室と洗面所があった。赤銅色の鈍く光る蛇口に黒い大理石の洗面台。わざわざ家の外に出なくてもいいなんて……！

しかも、井戸じゃない。蛇口をひねるだけで水が出る。私には何もかもが珍しかった。

洗面所の使い方を教えてもらう間、私は目を輝かせて説明を聞いていた。

ふと、男の人の視線が注がれているのに気づき自分の頭上にある顔を見上げる。

「……風呂に入りたいか」

その人は私が見上げると視線をずらし、少し言いくそうに言う。お風呂。すぐく入りたい。旅の間は宿で体を拭くことしかできなかったのだ。それは切実な願いだった。

「はい」

それを聞くと、その人は浴槽に手をかざし何かを小さく唱えた。

……え、なに？

呪文が途切れた途端、彼の手のひらから水が溢れ出した。

……えっ……！！

水は勢いよく流れ続け浴槽を満たしていく。浴槽から溢れ出す前に、その人がかざしていた手を握ると水は止まった。

あまりに突然で、しかも目の前で見た魔法に私はあんどりと口を開けたまま固まっていた。

するとまた、その人は何かを小さく唱えた。

今度は手のひらに紅茶のカップほどの大きさの強烈な光の球が生まれた。そして、まぶしくて直視できないほどのそれを、ぽんつと浴槽に落とした。

「あっ！！」

私は思わず、声を上げ身を乗り出して覗き込んだ。光の球はしばらく水の中で揺らめいた後、次第に光を失っていった。すると、それと同時に水から白い湯気が立ち上った。

……すごい。こんなに簡単にお湯が沸くなんて……。

呆然としたままたつぷりと張られた湯をしばらく見つめていて、はつとした。

「あ、あの、ありがとうございます」

「いや、また入りたければ遠慮せずに言うといい」

わっ、笑った……？

男の人がほんのかすかに口元を緩め、空色の目を細めたのだ。それは初めて見たやさしい顔だった。

もしかしたら、そんなに怖い人じゃないのかも……。

につこり笑い返してみる。するとその人はすぐに表情を戻し私に背を向けた。

「……………」

今のは気のせい？

「ああ、まだ熱いから」

浴室を出たその人が思い出したように言いかけて振り返ったのと、私がお湯に手を突っ込んだのは同時だった。

……え、熱っ！？

慌てて手を引っ込める。

それを見た彼は今度ははっきりと呆れたような顔をした。

「入るのは冷めてからにしろ。あと、部屋からは出るなよ」

まるで子供に言い聞かせるように言うと、そのまま部屋を出て行

つ
た。

第一章 娘1：ジェラルド

過去を知ったとき、その瞳は何を思ったか。
どんな未来を見つめていたのか。

やはり子供のような娘だった。

俺を警戒してぎこちないかと思えば次の瞬間には屈託なく笑う。

あの、魔法を見たときの驚いた顔。年頃の娘があんな顔をするとは思わなかった。

気づけば、思わず笑ってしまっていた。

その後、部屋を出てから王立図書館でグーテンベルク一族に関する本をかき集めた。

どの歴史書にもグーテンベルクについての記述は見られる。だが、どれも大体同じような内容しか書かれていなかった。どれを見ても400年前に滅びたという記述でグーテンベルクの歴史は終わっている。それ以後の事は分からないままだ。

俺はなるべく詳しく書かれた本を選び、娘に持っていくことにした。彼女の処遇が決まるまでは部屋から出せない。本を読む時間は十分にあるだろう。

部屋で夕食をとっている間、俺は密かに向かいに座る娘を観察していた。

静かに食事をしている娘。無事、風呂に入ったらしい彼女はさっ

ぱりした様子だった。

ゆるく波打つ長い髪は昼間よりもその輝きを増している。柔らかそうな胡桃色の髪に透き通るような白い肌。小さな顔に寸分の狂いもなく収められた大きな^{すみれ}董色の瞳と繊細な鼻筋、鮮やかな薄紅色の唇やはり、改めて見ても美しい娘だった。その顔はまるで女神の彫刻のようで、どこか高貴な雰囲気さえも感じられる。

いや、黙っていれば、だな。俺は内心苦笑しその考えを改めた。外見と比べると言動や態度があまりにも幼い。そのため、どちらかと言えば美しいよりも可愛らしいと言った方があてはまるか……。

夕飯を終えた後、持ってきた歴史書を出しテーブルに積み上げた。2,30冊ほどの本を目の前にした娘は目を輝かせる。

それから俺は王から借りた歴史書を彼女に手渡した。これを見れば彼女も自分がグーテンベルクの生き残りだと確信できるだろうと考えたのだ。

「これを見てみる」

開いたページにはあの肖像画が載っている。彼女は不思議そうに首をかしげて受け取るとその絵を見つめてつぶやいた。

「まあ……、綺麗な人……」

「お前にそっくりだぞ」

「……えっ？」

娘は驚いたように大きな紫の瞳をこちらに向ける。

「お前は鏡も見た事がないのか」

まさか、気づかなかったわけじゃないだろう。

俺が呆れて言って返すと、それを聞いた娘は少し考えるように視線を下に落とした後、普通の表情で頷いた。

「鏡は家にありませんでしたから」

……まさか。

「本当に自分の顔を見た事がないのか」

「いいえ。湖で姿は映せます」

彼女は真面目な顔でとんでもない答えを返した。俺は思わず眉をひそめた。鏡はそれほど高価ではないはずだったが。それにこの娘はそれほど貧しい暮らしをしていたようには見えない……。

そこまで考えて、昼間、彼女に鏡台の使い方を説明していなかった事に思いが至った。

どうも、この娘といると調子が狂う。

俺は浅くため息をついて立ち上がった。そのまま浴室へ向かい、洗面台の前の鏡台を開いて立てかけてある鏡を取り出す。

そしてそれを手に持って、再び娘の前に戻った。

「わあ、大きな鏡！」

「顔だ。顔をよく見てみる。お前にそっくりのはずだ」

「……………」

感嘆の声を上げた表情から一転、目の前に突き出された鏡を真剣な表情で覗き込み、自分と肖像画を見比べた娘は、しばらくすると硬い表情のまま首を振った。

「こっちの人の方が、私よりもずっと綺麗です」

……とぼけた娘だ。

同意を求めた俺が間違いだっただのか……。

「……………」とにかく、お前がグーテンベルクであることは間違いないと思う。ここに置いた本はすべてグーテンベルクについての記述がある歴史書だ。とりあえず内容が濃いと思われるものを選んで持ってきた。もし、もっと必要であれば用意しよう」

「あ、ありがとうございます」

「他に何か必要なものは？」

「いいえ。特に……………」

そう答え、目を伏せた娘を見て俺は立ち上がった。

グーテンベルク一族。不思議な力を使うとされた一族の生き残りの娘。

この歴史書から、彼女は何を思っただろうか。

未来はまだ、予想も出来なかった。

第一章 歴史

知れば知るほど、疑問は増える。

望む答えがすべて与えられる時なんてきつと来ない。

あの時、何を選べば良かったのか。今でも答えは見つからない。

大昔、精霊と人間は共に生活をしていたらしい。

それがやがて、精霊たちは契約を結んだ者にしか姿を見せなくな
った。

そしていつの間にか、契約をしているのはごく一部の人間だけに
なった。

精霊に愛されし者。

それがグーテンベルクと呼ばれる一族だった。その者は皆、共通
して紫の瞳を持っていたことから、紫の瞳は精霊との契約の証だと
言われ、いつしか紫の瞳を持って生まれたものはグーテンベルクと
名乗り、またそう呼ばれるようになった。

それにしても謎に包まれた一族だった。

歴史書では彼らが使う不思議な力の詳細は不明とされている。おそ
らく、精霊と関係があることが推測されるが詳しくは不明、と。

それに一族と言っても必ず血縁関係があるわけではないかもしれな
い。普通の瞳の親から、突然紫の瞳を持つ子供が生まれることもあ
る。グーテンベルクを名乗るのに重要なのは瞳の色だけ。

この辺りの記述はあいまいなところが多く、なぜ紫の瞳を持って
生まれるのか、精霊との契約とは何か、詳しい事は書かれていない。

かつてグーテンベルク一族は、このアゾフ大陸の北西部、バシリカ地方一帯に大きな国を築いていた。グーテンベルク王国。比較的人口も多く、何より豊かな国だった。

しかし、彼らが持つ不思議な力ゆえ、大戦の折には必ず他の国がその力を利用しようと一族に近づいた。一族の者たちは常に争いに巻き込まれることになったのだ。

グーテンベルク一族が関わった争いで最も有名なものは二つ。

約730年前のアゾフ大戦と約400年前のビリヤの災厄。

アゾフ大戦はこのアゾフ大陸を二分した戦いだった。

当時のグーテンベルク王、イシュ・アドナイル・グーテンベルクがその不思議な力で一族を守ったと書かれている。しかし、これもどのような力を使ったのかは書かれていない。

ビリヤの災厄とは、ビリヤという国が原因となって引き起こした戦争でほとんど大陸全土に規模が及んだ。争いが始まると各国がグーテンベルク王国を自国に引き入れようとした。

しかし、グーテンベルク王国はどの国とも同盟を結ぼうとはしなかった。

王国が中立を宣言すると、国々はグーテンベルクの人々を無理やり協力させようとした。彼らが持つ力を脅威に感じた他国が、王国に攻撃をしかけたりもした。

争いは12年間続いた。この戦いではほぼ大陸全土が焦土と化した。グーテンベルク王国のあったバシリカ地方の被害は特に酷いものだった。そして王国は他の国々に侵略され、滅亡した。

これ以降の歴史にグーテンベルク一族が登場することは一度もない。そのため一族は大戦により滅びたと考えられたのだった。

その力ゆえに滅びた不幸な一族。

彼らがどうなったのか。それは現在も分かっていない。

……はあ……。

ベッドの上で本を閉じてため息をつく。

彼が歴史書を大量に部屋に置いて行っってから、四日が過ぎていた。部屋の中で本を読むだけの毎日。そろそろ、本を読むのも飽きてきた。

本を読み出した頃は、次々と明らかになる事実に驚くばかりだった。グーテンベルクという名前がこれほど何度も歴史に登場するとは思わなかった。

けれど、読み進めていくうちに分かった事がある。本に書かれている大体の内容はどれも同じようなものだった。どの歴史書にも一族についての記述は見られる。でも、肝心なことは何も書かれていないのだ。

私には不思議な力の正体が精霊の力だとはっきりと分かっている。だから、昔も紫の瞳を持っていた人には私と同じように精霊が付いていて、その力が使えたんだろうって推測できる。

でも、滅びたと考えられているはずのグーテンベルクが、自分がどうしてここにいいのかは分からないまま。それに精霊と契約したということについてもよく分からない。だって、私自身にも契約をした覚えはないもの。

……私は、どこから来たんだろう……。

このまま本を読んでいても、欲しい答えが見つかるとは思えなかった。

それに、力を持っていたせいで滅びたという事実。

手紙に書かれていた言葉が思い出された。お母さんはグーテンベルク一族に何が起きたかを知っていたに違いなかった。だから、あれほど力を知られてはならないと繰り返していた。

自分が当然のように受け入れていた力がこれほど特別なものだったなんて……。

これを誰かに知られるわけにはいかない。私は改めてその思いを強くした。

この四日間、部屋を訪れたのはあの男の人だけだった。

相変わらずの無表情で食事を部屋まで持ってきてくれる。初めの二日間はリビングで一緒に食事をしていたけれど、今では部屋で一人だった。

二人きりの静かな食事。私は何を話せばいいのかわからなくて戸惑うことしかできなかった。そして、この人には力を知られているのかもしれないという緊張感。

彼は、私が放つ気まずい雰囲気、一緒に食事をするのが嫌になったんだろう。

あの時笑ったようだったのは気のせいだったのかな……。

そう思いながら自分の着ている服に眼を落とす。

見たこともないような繊細な刺繍のされた淡いクリーム色の部屋着。肌触りもすごくいい。

これも彼が持ってきてくれたものだった。ぶっきらぼうな口調で、使うといい、とだけ言って。

このまま放っておかれるなんてことないよね？

ずっと部屋に閉じ込められたままだったらどうしよう……。

外では誰が聞いているかわからないから、私はイブと話をすることもできなかった。

「寂しいよ……」

声に出してつぶやいてみる。

けれどそれは広い部屋に静かに響いただけだった。

私には、明日の自分さえ見えなかった。

第一章 命令：ジェラルド

偶然は思いがけない方向へ。
いつもそうだ。

気づいたときにはもう、運命の輪は音を立てて回り出している。

娘に歴史書を手渡した次の日、王は俺に重苦しい表情で告げた。

「他の生き残りを探そうと思う。この国に迎えれば、いざという時の力になる」

「まさか、戦争の道具になさるおつもりですか？」

「それこそまさか、だ。私とてグーテンベルクが歴史上どのような扱いを受けたかは知っている。それをもって自ら争いを起こすつもりはない。だが彼らの力は脅威だ。」

この平和を愛する王がこのようなことを言い出すとは信じられなかった。国のために民を犠牲にするなど……。

「あれは無害な娘です。私は彼女を戦争の道具にするために連れてきたわけではありません。」

「だが、彼女は間違いなくグーテンベルクの生き残りだ。この事を他国に知られてみる。この力をめぐって戦が始まるかもしれない。争いが始まれば多くの命が失われる。娘一人の犠牲でそれが防がれるのならやむを得ない。他に生き残りがいなければ、いないで構わない。お前に探しに行ってもらいたい」

「私が、ですか。あの娘は？」

「もちろん、このまま城に残ってもらう」

「ですが、あの娘は自分の一族に何が起こったのかを知りたがっています。私も力になると約束しました。だからここまで来ることに納得したのです。彼女が行くべきです」

「馬鹿な。娘一人で行ってどうなる。世界中を一人で旅できるわけがない。お前が行け」

「しかし、王……」

「お前がここまで言うのも珍しいな。……惚れたか？」

真面目に聞いてきた王の顔を見て、気が抜ける思いがした。この人はこんな時に、何を考えているのか。

「……まさか。ご冗談を」

「そうか……、いや、少し待て。最善の方法を考えよう」

王は俺の顔をじっと見てからそう言うと、話題を変えた。

こんなことになるとは……。

話が変わってから俺は頭の隅でさっきの話題を引きずっていた。いや、王の言葉は予想外の展開ではなかった。娘の事を王に報告すれば、こうなるかもしれないとは予測できた事だった。俺はあの時、紫の瞳を見た驚きで深く考えずに行動してしまったのだ。

おそらく、今後彼女がああの町に戻る事は二度とない。

純粹で屈託のない笑顔が浮かぶ。彼女は国が自分の力を利用しようとしているなど、夢にも思わないだろう。この事を知ったとき、彼女は俺を恨むだろうか。

このきっかけを作り出した責任は俺にある。

二日後、秘密裏に命が下った。

俺は城の軍人が寝泊りする部屋が並ぶ、軍人棟の廊下を騎士棟に向かって歩いていった。

『グーテンベルクの生き残りを探し出し、城に連れ帰れ』

告げられた命令は変わらなかった。王はやはり娘を国の為に手元に置くつもりの方だった。国のため、平和のためならば娘一人の犠牲はやむをえないという事だ。

しかし、それでも王は譲歩した。同じグーテンベルクを連れて行った方が相手の警戒心を和らげることが出来るだろう、と娘の同行を許可したのだ。

それに不思議な力の存在も理由の一つだ。彼女は今も頑なにその存在を否定し続けている。俺はその存在をほぼ確信しているが、どのような力なのかははっきりと分からない。一緒に旅を続けていれば、途中でその力を使うことになるかもしれないと王は考えたのだった。

『いいな、他国にグーテンベルクの存在を気づかれないように注意しろ。娘からは絶対に目を離すな』

これについては貴族にさえ注意すればいい。400年も昔の話だ。大陸史を学んでいない民は紫の瞳を見ても変わった色だとくらいしか思わないだろう。だから娘は今まで誰にも気づかれずに来られたのだ。

そして、娘の同行に加えてパーティーで行動することも命じられた。俺と年の離れた娘の二人で行動するのは不自然だからだ。普通、魔物などに対処しやすくするために、旅をする者は4、5人のパーティーで行動する。

『人選はお前に任せる。適当に選らぶといい。ただし、この命令は非公式だ。この意味が分かるな』

つまり、手柄を立ててもそれが知れ渡ることはないということ。

重要な任務が控えている者を連れては行けないという事だ。

俺は王の配慮に感謝した。

与えられた期間は一年。これは予想以上に長い。それに、考えていた以上の自由も与えられた。

だが、娘にとっては外を出歩くことのできる最後の一年になるだろう。他に仲間が見つかったにしろ見つからなかったにしろ、城に戻れば王の監視下に置かれることになる。

娘は一生、城から出ることを許されないのだ……。

王には逆らえない。

俺はある部屋の前で立ち止まった。

第一章 騎士：ジェラルド

対照的な二人だからこそ、分かり合えることもある。
変わらないものに、感謝を。

「キーナンだが。今、少しいいか」

「ああ、入ってくれ」

扉の向こうから返事があつたのを聞いて、俺は部屋の中に入った。
「久しぶりだな。どうした」

紅茶を飲みながらくつろいでいたらしい騎士が立ち上がる。

ロレンス・アルベルト・サファヴィー・ディアス。

それがこの男の名だった。一度では覚えられない長い名前。この名
がきっかけで、親しく付き合うようになったのだ。

濃いグレーの瞳に暗めのブロンド、その甘めの端正な顔立ちと優
雅な物腰に惹かれない女はいないだろう。この男と俺は生まれから
何からすべてが正反対だ。だが、何故か馬が合った。戦場で知り合
つて以来、暇な時には何かと行き来している。

「座ったらどうだ」

ロレンスはソファに腰を下ろしながら向かい側を指して言った。

「それで、今日は何の話だ？」

「ああ、実は王からある命を受けた。約一年間城を離れることにな
る」

俺は座ると同時に話を切り出した。

「それはまた、今回はやけに長いな」

ロレンスは訝しげに言う。この男は俺が何度か王の命で非公式な任務のために城を空けているのを知っている数少ないうちの一人だった。

「大陸中を回ることになりそうだ。それで同行してくれるものを探しているんだが、ロレンス、お前に頼みたいと思っている。任務の予定はどうなってる？」

「私に？私が行っても構わないのか？」

「ああ。王の許可は下りる」

「そうか……。任務は特に問題ないな。騎士団だ。戦争でも始まらない限り大きな仕事はないよ」

「家のほうはどうだ？」

俺は懸念していた点を聞いた。この男は代々続く由緒ある騎士の旧家、ディアス家の長男だ。俺のように自由には動けない。

案の定、ロレンスは思いつきり顔をしかめた。

「ちやうどそれを考えていたところだよ」

苦笑いしながらそう言うとしばらく沈黙した。

「いや、しかし家を一年も離れられるなんてこんな機会はもう二度となない。ぜひ行きたい。……家には、なんとか話をつけよう」

「この旅は非公式だぞ」

ロレンスはまた少し考えて言った。

「構わないよ、ジェラルド。本当に滅多にない、いい機会だ。同行したい」

「お前が家を説得できるならば、歓迎するが」

「ああ、なんとかするさ」

言うてから、にやつと笑った。

この男がそう言ったのだ。決まりだろう。

「詳しい話はお前の出発が確定してからだ」

「ああ、分かった」

頷いた男を見て俺は話を変えた。

「あと、魔術師を一人同行させたいと思っている。出来れば治癒が

いいんだが、誰か知り合いはいないか？」

「リトリアか？」

それは治癒の魔術師を多く輩出している旧家の名前だった。これも代々続く名門の貴族だ。同じ貴族同士、ディアス家とも交流があるのだろう。

「いいや、別に誰でも。力があれば構わない。」

「リトリア家の者で構わないなら知っているんだが……、ルイスとカルロは無理だな。一番下ならいけるかもしれないが……」

ロレンスが迷うように言った。

そうだ。確か、女だったか……？ 錆び付きかけていた記憶を探る。俺は魔術師とはほとんど交流がない。

女か。今まで特に考えなかったが、パーティーの中に他にも女がいた方があの娘にとってはいいいだろう。

「いや、女のほうがいいな。」

ロレンスに告げると驚いたような顔をした。

「そうなのか？」

「ああ、女のほうが都合がいい。その魔術師、名はなんだったか？」

「アイリスだ。アイリス・ヴィシュ・リトリア」

第一章 騎士：ジェラルド（後書き）

一緒に旅をする三人目の人物が登場です。

ロレンス・アルベルト・サファヴィー・ディアス。

長いですね……。貴族出身の騎士です。

あともう一人登場したらまた登場人物紹介を書きたいと思います。

第一章 家：ロレンス

見えているものといないもの。

きつと人は初めからすべてを持っている。

ただ、その意味が見えていないだけ。

ジェラルドは短い話を終えるとすぐに出て行った。

相変わらず忙しい男だ。

彼は貴族の生まれではないため騎士ではない。騎士団では必ずしも実力と階級は一致しないが、軍人は完全な実力主義だった。あの男は自分の実力だけでわずか28歳で中佐にまで上り詰めたのだ。

私より2歳上で階級も上官だが、任務の時以外は誰とでもごく普通に公平な態度で接する。相手がどんなに名の知れた家の貴族だろうが大げさに敬ったり卑屈になることはなかった。

初めの頃は向こうが上官であり年齢も上だと知ったせいで、任務以外でも敬語を使っていたのだが、逆に畏まったしゃべり方をするなどと言われた。それ以来、私も普通に接する事にしたのだ。

王とは何か特別な関係があるらしく、今回のように個人的な任務で城を離れて行動していることも少なくないようだった。

私はいつも、家に縛られずに自由に行動できるあの男を羨ましく思っていた。その剣と魔法の力と確かな行動力で彼は誰からも一目置かれている。

家の説得か……。

思わず、ため息をついた。面倒な事になりそうだった。

ディアスという名。

ここ数年、会うたびに父からは結婚を迫られるようになっていた。好きでもない女との結婚。子を儲け、家を繋げて行くためだけの。

私はずっと父の言葉に従って生きてきた。与えられるものだけを受け取り、騎士になる事が当然のことだと信じて疑った事はなかった。

それが、18の時、初めて家を遠く離れて生活し、この世界には騎士として以外の生き方があるという事を知ったのだ。様々な人間がいることを知り、疑問が芽生えた。

私はこのまま家のためだけに生きて行くのか、と。

その思いは、年々強くなる一方だった。結婚を迫られるようになってからはなお更に。

ジェラルドは鋭い男だ。私の葛藤に気づいていて、わざわざこの話を持ってきてくれたに違いなかった。あの男がそれを肯定する事は絶対にならないだろうが。

彼には男として全く敵わない……。

しかし、そのさりげなさを嬉しく思った。

家を離れて大陸中を旅することができる。こんな機会はもう二度とないだろう。

必ず、父を説得しなければ。

私は決意と共に家に戻る準備を始めた。

第一章 魔術師：ジェラルド

すべての出会いには意味がある。
たとえそれが、痛みと苦しみを残すものであつたとしても。

魔術師の部屋が並ぶ棟に向かう。

調べたところ、ロレンスの告げた魔術師はリトリア本家の4人兄弟の末娘。22歳になったばかりだった。

それなりに力はあるものの他の兄弟、特に長男が後世に名を残すと言われているほど優秀な魔術師らしく、その影に隠れてしまっているらしかった。俺も長男ルイスの名は知っていた。彼女も家の許可さえ下りれば同行が許されるだろう。

不思議なことに彼女は一人で軍の魔術師棟に住んでいるようだった。旧家の娘にこれほどの自由が許されているのは珍しい。普通ならとつくに結婚している年だ。

魔術師は日常的な訓練を城で行わないため、軍に所属する者であっても必ずしも城に住む必要はないのだ。それぞれに得意とする魔法が異なるため集団で訓練する意味もあまりない。そんなことを考えながら目的の部屋に着いた。

扉を叩いて声をかける。

「キーナン中佐だ」

「お入りください」

「失礼する」

扉を開けると女はすでに立ち上がって、敬礼の姿勢をとっていた。リトリア家に多い緑の瞳に赤褐色の髪。身長は普通くらいか。特に高くも低くもない。勝気な瞳のさっぱりした美人だ。

「アイリス・ヴィシユー・リトリア、治癒の魔術師です」

はきはきした、よく通る声だった。

俺は頷いた。

「楽にしてくれ、非公式なんだ。座ってもらってかまわない」

彼女は返事をする toward 側のソファに腰掛けた。

「そちらの上官から話は聞いていると思うが今回の任務、受けてもらえるだろうか」

「はい。お受けいたします」

迷いのない答え。

「任務は非公式だ。長期間国を離れることについて家は問題ないのか」

「はい。すでに家との話はついています。特に反対もされませんでしたし、何の問題もありません。女であることを心配されているようであれば、ご心配には及びません」

彼女は俺が聞きたいことの意味をよく理解しているらしかった。

「そうか……、では、詳細について話そう」

今までの出来事を順に話した。彼女は最後まで黙って聞いていたが、やはりすぐには信じられない様子だった。それももつともだと思った。実際に紫の瞳を見ていなければ、俺だって信じないだろう。一通り説明を終えると、女が口を開いた。

「お聞きしてもよろしいでしょうか」

「ああ」

「本当にグーテンベルクの生き残りなのでしょうか」

「今回の旅はそれを証明する目的もある」

「……この旅のことを、その娘は？」

「まだ話していない」

「今、その娘はどこに？」

「部屋にいる」

特にすることもなく、かといって忙しい俺も相手をしてやることが出来ず、他の者に存在を知られるわけにはいかないという理由からこの4日間部屋に閉じ込めっぱなしの娘のことを思った。娘はすっかりおとなしくなってしまうていた。

「今から会わせる。他の者に存在を知られる訳にはいかないんだ。旅の出発までの準備を手伝ってやって欲しい」

なるほどという顔でうなずくと「分かりました」と答えた。旅の支度を男の俺が手伝うよりは女同士のほうがいいだろう。

これだけで俺の言いたいことが分かったらしい。察しのいい女のようにだった。

「付いて来てもらおう」

「はい」

俺たちは同時に立ち上がった。

第一章 魔術師：ジェラルド（後書き）

四人目、魔術師のアイリス登場です。

第一章 出会い3：アイリス

強く、真っ直ぐに前を向いて。
いつまでも変わることのないあなたでいて。

驚いた。

目の前を歩く長身の男の広い背中を見つめながら、今聞いた話を頭の中で反芻する。

……グーテンベルク一族。

まさかそんな突拍子もない話をされるとは思わなかった。私も貴族に生まれた者の当然の教養として大陸史は学んでいる。

今回の話はロレンス・ディアスからの紹介だというから何かもつと……こう、貴族に関わるようなことかと思っていた。それがまさか、こんな大きな……国を左右するような話だなんて。

しかも、グーテンベルクよ。400年も前に滅んだはずの一族。生き残りが見つかったかもしれないと言われてもすぐに信じられるわけではない。

それから意識を前の男に向ける。

王から個人的にこんなにも大事な調査を任されるなんてどんな男なの。

私はほとんどの魔術師と同じく、軍人と任務以外で直接関わったことがなかった。軍の内情にも疎い。

ジェラルド・キーナン。中佐だと言っていた。30くらいかしら。でも、落ち着いて見えるしもっと年上かもしれない。

それにしても無表情な男だった。別に顔自体が怖いってわけじゃない。わりと整った顔立ちをしているとは思う。でも、その表情が変わらないのだ。

そして、目つきが印象的だった。野生的な鋭い目つき。この人に本気で睨まれたら軍人でもすぐみあがるだろう。

普通の町娘がこんな男にいきなり城に連れてこられたなんて。しかも、おそらくずっと部屋に軟禁状態。怯えているに違いないわ。可哀想に……。

私は心の中でまだ見ぬ娘に同情した。

中佐はある部屋の前で止まって、鍵を取り出した。

……え？こことって……軍人棟じゃないの？

「ここは？」

「俺の部屋だ」

当然だ、と言うような口調。

……まさか、自分の部屋で監禁してたって言うんじゃないでしょうね。年頃の娘に、あんまりだわ。

思いが顔にも出てしまい、顔をしかめていたらしかった。

私を見た中佐は何かを悟ったらしく、少し不機嫌そうな声で言った。

「勘違いするな、部屋はいくつかある。それに本人は気にしていない」

気にしてないですって？気にしてたって言えるわけじゃないじゃない、あなたに。

思わず口を突いて出そうになった言葉を飲み込む。さすがに、初対面の上官にこれを言うのはまずいわよね……。

中佐に続いて部屋に入ると、そこは広めの居間だった。

「失礼します」

彼はそのまま部屋を突っ切って、右手奥の扉に向かい声をかけた。「俺だ、開けるぞ」

「……………」

「おい、開けてもいいのか？」

怪訝そうな声でもう一度問う。私も扉に近づいた。
すると返事があつた。

「えっ？あ、あの、ちょっと待って！……じゃなかった。ど、どうぞ！」

開いた扉の奥を覗き込むと、白い部屋着を着た少女がベッドの上に一人座っていた。

今まで寝ていたらしい。髪の方がくしゃくしゃだ。

「あ、あの、ごめんなさい。何もすることがなくて……寝ちゃったみたい……」

恐る恐ると言った様子で中佐を見上げながら答える。

私はそれを見て、ほら、やっぱり怯えてるじゃないと思った。

中佐は特に答えず、私に部屋に入るようにと目で促した。私の存在に気づいたらしい少女と目が合う。

綺麗な子……。

私は思わず息を呑んだ。神秘的な紫の瞳にウェーブのかかった長い薄茶の髪。本当に紫色の瞳をしてる人がいるなんて。彼女を見た
とたんに、さっきまでの疑いはどこかに飛んでいつてしまった。

「彼女はアイリス・ヴィシュー・リトリア、旅と一緒に付いて来てくれることになった」

少女は紫の瞳を大きく見開き、驚いた顔で中佐を見た。

「旅……？グーテンベルクの事、一緒に調べて下さるんですか？」

「ああ、一年間世界中を旅して調べることになった。他にももう一人加わる。俺も含めて4人だ。出発は一週間後。それまでに何でも分からないことがあれば彼女に聞くといい。旅の準備も彼女が手伝ってくれる」

……ちよつと、そんな説明でいいの？

私は心の中で思ったが、少女はそれを聞くと輝くような笑顔に変わった。そして、そのまま視線をこっちに向ける。

「あの、私、サーシャ・ティアイエル……です。これからよろしく願います」

そう言つと子供のように無邪気につこり笑つた。あえて最後まで名前を言わなかったみたいだ。紫の瞳。信じられないような気分だけれど、それはグーテンベルク一族の特徴だった。でも、そんなすごい子には全然見えない。ううん、だってそもそも18歳にも見えない……。

なんだかあまりにも想像していた娘とはかけ離れていて、私はすっかり彼女の雰囲気飲まれていた。

「アイリスよ。よろしくね」

これが、私たちの出会いだった。

重要登場人物紹介2 & 裏話2（前書き）

前回同様、登場人物紹介にはまだ本編で出てきていない情報が含まれます。

ネタバレが嫌な方は読まないでください。
読まなくても全く支障はありません。

重要登場人物紹介2 & 裏話2

【重要登場人物紹介】

ロレンス・アルベルト・サファヴィー・ディアス

26歳。やさしい眼差しのグレーの瞳に暗めのブロンド。背はジェラルドほどではないが長身、体つきもしっかりしている。整った端正な顔立ちの美形。気配り上手で話も上手い。

それに加えて家柄も良いので女性には全く困らない。

代々騎士として続くディアス家の長男であり、幼い頃から名家の跡取りとしての教育を受けてきた。優雅な物腰、女性には平等に親切的な典型的な騎士。剣の腕もなかなかのもの。

現在、大尉。魔法は使えない。

アイリス・ヴィシユー・リトリア

22歳。緑の瞳に赤褐色の髪、身長は平均的。勝気な瞳のさっぱりした美人。

性格もさっぱりしている。思った事ははっきりと口に出すし、口に出さなくても顔に出る。

治癒の魔法を使う魔術師を多く輩出していることで有名なリトリア家の末娘でれっきとした貴族の令嬢。本人は柄じゃないと思っているが、やはり、言葉遣いや態度にはそれらしいところが見られる。しかし、面倒見がよく、心根は優しい。薬学や医学の知識もある。

【設定裏話】

NO・2 人物の名前について

今回もまた、どうでもいい裏話。なぜ主人公たちはこんな名前になったのか編パート1。今回は主役二人です。おそらく、ネタバレはしていません。……おそらく。

(1) サーシャ・ティアイエル・グーテンベルク

登場人物の名前を決める時、多くの人は色々悩みながら考えるのではないだろうか。

特に、主人公であればなおさら。私もそうでした。と言いたいところなのですが……いいえ、すぐに決まりました。ごめんなさい。

というか、こんな話を書きたいなーと漠然と思っていた段階から、一族の名前はグーテンベルクと決まっていたんです。なぜかは不明です。

そして、ティアイエルというのも決まっていました。これも、なぜかは不明。

……ここで終わっては裏話を作った意味がないので、一つ長い話を。

実は、初めの時点で主人公のフルネームはティアイエル・グーテンベルクだったんです。サーシャは後からついた名前で、ミドルネームはなかった。

では、なぜサーシャを付け加えたのか。

それは話を考えていくうちにある疑問に行き当たったからです(要するに制作上の理由)。

あれ？初めこの子は自分がグーテンベルクって事を知らないんだったら、名前は単なるティアイエルだったの？苗字は？ってなったんです。

で、『よし、じゃあ平民は苗字なしでいこう』ってことになりました。

これは昔のヨーロッパとか（日本もそうですけど）なら普通に見られた事だし、別におかしくはないだろうと。（こんな事考えたあたしって、架空の世界のファンタジー書いてるくせに妙に現実的……）でも、そのまま話を進めていくと困った事が起きました。ジェラルドがただのジェラルドになってしまいうんですね。彼は平民出身で、軍人は身分が高くないから。

そうになるとまた、色々考えていたジェラルドの過去の話につじつまが合わなくなってくる……。

『えーい！やっぱり平民にも苗字をつけてしまえ！設定変更ー！』
と思い直して、さあ、どんな名前にしようか、と思った時に思い浮かんだのがサーシャでした。

適度に（？）爽やかな響き、かつ、言いやすく読みやすく覚えやすい。

そう、これは大事なことです。私は横文字の名前がなかなか覚えられないんです！

やたらと登場人物が多い、しかも似たようなカタカナの名前の人物がいっぱい出てくる小説は混乱してついていけなくなってしまふ。

話は逸れましたが、サーシャっていう名前が思い浮かんだとき、ティアイエルは自動的にミドルネームに格下げ（？）になりました。個人的にはすごく好きな名前なのですが、やっぱり言いにくいし読みにくい。

それに、まあ、苗字だとしてもおかしくはないかな、と。こんな流れてサーシャはミドルネームを持つことになったのですが、結果的にそうして正解でした。

後にこのミドルネームも大きな意味を持つ事になるんです（これってネタバレ？）。

(2) ジェラルド・キーナン

次は、ジェラルドです。この人の名前は一瞬で決まりました。ジェラルドって言う名前が好きなんです。ちよつと古い名前ですけど、ヨーロッパのほうにいればある名前です。

で、苗字は何にしようかな……。キーナン……。おつ、いいんじゃない？ 決定！ 所要時間5秒くらいでした。

あまりにも安易な自分に驚きますね。

というか、ジェラルドの裏話をする必要ってあったのか……。

いえ、でも、すぐに決まったからといって愛がないわけではありません！

私個人的には一番好きな名前です。だから、こんなに短い裏話でも許してね、ジェラルド。

明日は引き続き本編です。

読んでくださっている方、本当にありがとうございます！
感想等いただければ嬉しいです。

このまま一章が終わるまでは毎日更新する予定です。

第一章 娘2：アイリス

私の意味。

それは私が決めるもの。

後悔はしたくない。

そこまで聞くと中佐は私を扉の外に呼んで「出発まで彼女ことは頼んだぞ。必要なものがあれば何でも言ってくれ。金を使ったら言ってもらえれば後で払う。このことは口外しないように」とだけ言って居間を出て行ってしまった。

彼はどうも説明が足りなくて困る。

でも、律義な性格らしいのは確かなようだった。

先ほどの部屋に戻るとサーシャはまだベッドに座ったままだった。あらためて見ても本当に綺麗な子だね。肌はすごく白いし、長い瞳まつげ。整った顔はお人形みたい。本当に今までずっと町で暮らしていたんだろつか。貴族の令嬢にも何もせずここまで綺麗な子はちよつといないんじゃないかしら……。そんな事を考えながら彼女を観察する。

「あの、アイリスさんはどうして一緒に来てくれることになったんですか？」

嬉しそうにはにかみながら聞いてくる。透き通った声だけどやっぱり幼い印象だった。

構えていた私はすっかり気が抜けてしまつて、ベッドの側に置い

てある椅子に腰掛けながら答えた。

「アイリスでいいわ。敬語も使わなくていいわよ。大して年も変わらないんだから。私は治癒の魔術師なの」

急にくだけた様子になった私に驚いたのか、彼女は少し黙り込み、それでも私の言葉に従うことに決めたようだった。

「……魔術師？えっと、アイリスは何歳？」

「22よ」

「まあ……、すごいわ……」

感心したようにそう言っただけ、黙り込んでしまった。次の話題が思い浮かばないらしい。無理もない。きっと今まで魔術師なんか見たこともなかったのだろうから。

「……あなたは？いつからここにいるの？」

「4日前よ。4日前からずっとここと隣の部屋にいるの。誰かに見つかったら困るんだって」

彼女は自分も困ったような顔をした。

「……ええと、アイリスは私のことをどのくらい聞いているの？」

不安そうな表情で私を覗き込むように言う。

「おそらく、全部聞いたんじゃないかしら。あのさっきの中佐が知っている事は全部。あなたがグーテンベルクの生き残りだって事も聞いたわ。だから安心して。隠さなくていいわよ」

笑いかけると、サーシャは目に見えてほっとした様子になった。

「ああ、良かった！全部秘密のまま一緒に旅をしなくちゃいけないんだったら、どうしようかと思っただわ。私、何もしやべれなくなっちゃう」

嘘のつけない子らしい。彼女はこれで安心したようで「お話できる人がいなくて寂しかったの」と明るく話しだした。

こんなに屈託なく話す子は初めてだった。私の周りの女の子と言えば貴族の令嬢ばかり。常に家柄や美しさを気にかけて慎重に相手の女の子を牽制しながら話し、取り繕った笑みを浮かべているよう

な女の子たち。

私も貴族の娘だけど、昔からそんなご令嬢たちとは気が合わなかった。

女でありながら城に住んで軍の魔術師として働いているのもそのせいだった。

ここにいれば、毎晩のように開かれる舞踏会やパーティーに参加しなくてももうさく言われない。あんなに無駄にきらびやかな場所は私には合わない……。

気がつけば私はサーシャとの会話を心から楽しんでいた。

第一章 顔合わせ：ジェラルド

俺たちは、ここから始まった。

娘にリトリアを引き合わせて早5日、娘は女と打ち解けたらしく、沈んでいた表情は目に見えて明るくなっていた。

一方で、俺は近づいてくる出発の日と中々片付かない仕事に頭を抱えなくなるような状態だった。王はあの時、俺に仕事を増やさないと首を横に振っておきながら「一年間も城を留守にするんだぞ、一週間くらいしっかり働いて行けよ」と笑い飛ばして明らかに仕事量を増やした。

…… まったく、あの人にはやられてばかりだ。

旅立ちの日は3日後に迫っていた。別に大急ぎで出発する必要はないが、先に日を決めてしまわないと永遠に城を出られなくなるのではないかと思われるほどすべき事は多かった。

角を曲がると部屋の前にロレンスが立っているのが見えた。

ただ立っているだけで様になる男だった。それもそうだろう。姿を見かけたというだけで令嬢の話題になる男だ。俺はこの男が気を抜いている姿を見たことがない。

どうでもいい事を考えたことに気づいた俺は、自分が思っている以上に疲れていることを知った。

「遅くなつてすまん、待たせたか」

「いや、今来たところだ。忙しいみたいだな」

「全くあの人には困る」

苦笑しながら言うつと男もつられて笑った。

「あの娘は？」

「ああ、この中だ」

鍵を取り出すとロレンスは何かを言いかけて怪訝そうな顔をした。

「ここ？だが、ここは」

「……またか。」

「勘違いするなよ。まだほんの子供だ」

俺が途中で言葉を遮ると、その男はくつと笑って横目で俺を見た。

「ジェラルド、私はまだ何も言っていない」

「……………」

思わず睨むと俺から視線を外したロレンスは肩をすくめた。

白けた空気にそのまま二人とも何も言わずに部屋に入る。

娘はリビングの大きな窓を開けて少し身を乗り出していた。外を眺めているらしいがやや腰が引けている。この部屋は軍人棟の最上階だ。下を見下ろすとかかなりの高さがある。

怖いのなら見なければいいものを……。

おっかなびつくりのその様子はなんだかおかしい。

ロレンスも同じ事を思ったらしく、首をこちらに向けた。俺はあの娘だというように目で合図して見せる。

娘がゆっくりと振り返った。窓から差し込む光が反射し薄茶の髪を金に見せていた。穏やかに吹き込む風がその髪を舞い上げる。薄い紫の瞳は光の加減でいつもよりもさらに薄く、不思議な色を湛えていた。

隣の男が息を呑むのが聞こえた。いつもとは別人のようだ、と思った。こちらを向いて静かに佇む彼女は神秘的なまでの美しさだった。

はっと我に返った様子のロレンスが歩み寄る。

「お初にお目にかかります。グーテンベルクの姫君。ロレンス・アルベルト・サファヴィー・ディアスと申します」

完璧な騎士の仕草で胸に手をあて、方膝を折って頭をたれた。突然目の前に跪ひざまずかれた娘は目を丸くして硬直する。そしてぎこちなく首だけを動かし、助けを求めるかのように俺に目を向けた。

「ロレンスだ。この男も旅に同行してくれる事になった」

「以後、お見知りおきを」

立ち上がって笑顔を向けられた娘はぱつと表情を華やかせた。

……いや、いつも通りだな。俺は心の中で苦笑した。

「サーシャ・ティアイエル・グーテンベルクです。よろしく願います」

にこやかに挨拶をする。が、途端にその表情が曇った。

ロレンスは何事かというふうに関女を見る。すると彼女は表情のままこちらを向いた。

「なんだ？」

俺は思わず、問いかけていた。

「……わ、私、あなたの名前を知りません」

今、気がついたというような呆然とした表情で言い放たれたのは予想外の言葉だった。

「冗談だろう？」

ロレンスは俺の顔を見て聞いてきた。

「……言ってなかったか？」

「聞いていません！」

そう言った娘は次第に泣き出しそうな表情に変わっていく。

「……………」

言ってなかっただろうか。

あまりの事に全員が言葉を失っていると、ノックが響いた。

「リトリアです」

俺はまずはそれに答えることにした。

「入れ」

「失礼します」

入ってきた女に娘は泣きそうな表情ですが、るような眼を向けた。
ロレンスは俺を見て笑いを堪えている。俺はどという反応をすれば
いいのか分からないままロレンスを見返した。

部屋に漂う妙な空気と沈黙。

異なる表情を浮かべて立ち尽くす異様な三人を見て、女は戸惑い
の声を上げた。

「……な、何よ？」

第一章 顔合わせ・ジェラルド（後書き）

第一章 前夜

希望と不安。

あの時、私はどんな旅の終わりを望んでいたのだろう。

どうして今まで名前も知らずにいたんだろう……。

その事に気づいた途端にもものすごい後悔が押し寄せた。
だから、この人とはあまり上手くいかなかったんだわ。

「とりあえず、全員座ってくれ」

沈黙を破った声。

私たちはそれぞれ席についた。

「まず、始めに確認してほしい。俺たちはこれから一年間大陸中、必要であれば世界中を旅する。もちろん、その間は身分を偽る。全員がエルン出身の平民という事になる。通行証も用意した」

全員が座ったのを確認すると彼は私たち一人ひとりを見回して話を切り出した。そして、イスニア国の紋章が描かれた紙を見せた。

「よって、敬語はなしだ。それと、ファーストネームで呼び合う。町の者たちがしているように。間違っても中佐とは呼ぶなよ」

そう言っアイリスを見る。

「はい」

「あと、俺の名前はジェラルドだ。ジェラルド・キーナン。ジェラルドと呼んでもらってかまわない」

私に強い目が向けられる。

「は、はい」

ジェラルド・キーナン。それが、この人の名前……。

慌てて頷いた私の隣でアイリスが怪訝そうな顔をしたのが分かった。向かいにいるロレンスは笑いたそうな顔。

……さっきから何がそんなにおかしいの。

「まったく、君らしいな」

呆れたように言ったロレンスの言葉を、彼は無視した。

その後、ジェラルドは私たちに旅の計画を説明した。

私はこの世界の地理を初めて知ることになった。世界地図を見たのも初めて。

この世界は二つの大陸からなっている。小さい方がアゾフ大陸で大きい方がボルミノサ大陸。

私たちがいるのはアゾフ大陸の南。この大陸は比較的是つきりとした四季がある、温暖な気候をしている。豊かだけれど、争いが多く安定しない大陸。

今もはつきりとした国が安定した状態で存在するのは私たちが住む南の方だけらしく、北の方は小さな領土のそれぞれを領主が守っていて、領土争いが頻繁に起きているらしい。

私たちはまず、大陸の最北東、バシリカ地方と呼ばれる、かつてグーテンベルク王国があったところを目指すことになった。

ジェラルドはグーテンベルク一族が本当に滅んだのかどうかを知るには、実際にまずそこに行ってみるほうがいいと考えたのだ。そこには王国時代の遺跡もある。

バシリカ地方は全体的に横に丸い感じの大陸から角が生えたように飛び出ている。狭い海峡をはさんだボルミノサ大陸と最も近いところだった。

つまり、私たちはアゾフ大陸をほぼ縦断する事になるらしかった。

「サーシャ、分かった？何か質問は？」

地図に目を向けていたロレンスを見て聞いてくれた。

「えっと、北に向かって進むのよね。バシリカ地方のグーテンベルク王国の跡地に」

私はジェラルドが話した事をなんとか整理して答える。

「ああ、そうだ。なかなか呑み込みがいいね。戦争が起きなければいいが……」

ロレンスは私につこりと笑顔を向けてから心配そうに言った。

「それは何とも言えないな。今は小康状態だが」

説明を終えたジェラルドは3日後の朝に出発するという事を確認すると、いつものようにすぐに部屋を出て行ってしまった。

その後、私は残ったアイリスとロレンスと話をした。初めて会ったロレンスは気さくで話しやすく、すごく優しいそうで他にどんな人が一緒に旅をするのか少し心配だった私はすっかり安心した。

それに、ロレンスは今まで見たことのある男の人の中で一番綺麗だった。男の人に綺麗って言うのはおかしいのかもしれないけど、本当にその言葉がぴったり。

濃いめのグレーの瞳にちょっと長めで落ち着いた色のさらさらの金髪。長いまつげの下の眼がすごく優しくて……そう、まるで本で読んだおとぎ話の王子様みたい。

同じ国軍の人でもどうしてこんなに違うんだろう……。

私は旅の前日、ベッドの中でつい最近やっと名前を知った彼のことを考えていた。

もう出会ってからかなり経っているのに、私が知っているのは鋭い眼差しとぶつきらばうな態度だけ。

ロレンスとジェラルドが友達だと聞いてもなんだか信じられない。冷たいのは私だけになの？

ロレンスは全然怖くないのに、やっぱりあの人はどこか怖い。

これからずっと一緒にいるのにこのままで大丈夫なのかな……。

旅の前夜。

私の胸の中では少しの不安と未知の世界への期待が渦巻いていた。

第一章 前夜（後書き）

これで第一章は終わりです。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます！

気づけばこんなにも長くなってしまっていました……。話をまとめられない私。

第二章はこの物語の中心になります。ズバリ、恋。

今までのように毎日更新とはいかないと思いますが、お付き合いしていただければ嬉しいです。

第二章 旅立ちの朝（前書き）

第二章：旅【前編】

真実に出会うまでの物語。

第二章 旅立ちの朝

あいにくの曇り空。

少し日差しが弱いけど、まあ外を歩くのにはこれくらいのほうがちょうどいいのかもしれない。

起きてすぐにカーテンを開けて天気を確認した私は一瞬がっかりしたものの、前向きに考えることにした。

すぐにリビングに出て洗面所に向かう。顔を洗って部屋に戻り、着替えを済ませてまたリビングに戻ったけどジェラルドが来た様子はない。

早くに目が覚めすぎたのかな。

ううん、この時計っていう機械は6を指してるし……。

この時計の見方はアイリスに教えてもらったのだ。私は今まで時計を知らなかった。

とりあえずはリビングのテーブルにあった朝食に手をつけることにした。

これっていつも通り私の分よね？一人分しか置いてないし……。

そう思いながら自分の着ている服を見下ろす。今日の服はアイリスと一緒に用意をした旅人が着ている服だった。

いつものような膝下のワンピースにブラウスじゃない。ズボンを履いたのは生まれて初めて。深い緑色のズボンに茶色の短いブーツ、上の服は白っぽいグレーでお尻の下くらいまでの長さ。ブーツと同じ茶のベルトには小さな袋が二つぶら下がっている。一つには家から持ってきたお金とおばあちゃんのタンスで見つけたネックレスに手紙、そしてもう一つには薬草。

隣に置いた、少し大きめで肩にもかけられる袋にはフードのついた黒いローブと水、少しの食料などが入っていた。

長い旅に出るわりには軽装なものにはアイリスとジェラルドが魔法を使えるからという理由があった。

魔法はすごく便利で、自分の契約した空間をすぐに手元に呼び出すことができるらしい。アイリスのおかげで、私の着替えや他の荷物もそこに置いてもらっているのだ。

でも4人が全員手ぶらだと魔法が使えますと宣言しているようなものなので、普通の旅人には怪しすぎる。そこでそれぞれが一つは荷物を持つことになったのだ。

ちょうど食事を終えた頃、ジェラルドがリビングにやって来た。

彼もいつもの軍服とは違って黒のズボンに黒の短いブーツ、紺色の長袖のシャツという楽な格好だった。大きな荷物を持って腰にはいつもはない短剣が下げられている。

彼は私を見て心なしが安堵したように言った。

「食べ終わってるな。準備は？」

「はい、できています」

敬語はなしだって言われたけど、いきなりこの人に普通に話すなんて無理だと思う。

「よし、行くぞ。遅くなつてすまない」

ぎりぎりまで忙しかったのかな。

それだけ言つとちらつと私を見てすぐに部屋を出て行こうとする彼を慌てて追いかけた。

「おはよう、サーシャ。よく眠れた？」

「うん。おはよう」

お城の外にはすでにアイリスとロレンスが待っていた。二人の姿を見ると急に実感が沸いてきて笑みがこぼれてしまう。

本当に今日から始まるんだ。

アイリスは私と同じような格好だった。上に着ている深い石榴色ガーネットの

ローブが赤茶の髪とよく合っている。ロレンスもジェラルドと同じような格好だけど、腰にはジェラルドよりもずっと長い剣。

それを見てから私は二人の横で静かに立っている三頭の馬に眼を留めた。

嘘、馬で行くの？そんな事聞いてない……。

頭の中であまり快適ではなかった前回の旅が思い出された。

「馬に乗って行くの？」

一番話しやすいアイリスにそれとなく聞いてみる。するとアイリスはジェラルドの方を見た。

「そうなの？」

「ああ、国内なら馬に乗っても大丈夫だ。国を出たら徒歩だ」

「そうなんだって」

彼女は肩をすくめて私に返す。

これを聞く限りアイリスも今まで知らなかったみたいだ。

そっか、国内だけ……。

馬は貴族か軍人の乗り物なのだ。普通の旅人が乗っていたらおかしい。

「出発する」

ジェラルドはそう言うのと黒い馬にさつとまたがった。

え、待って、私は乗れないのに？

焦る私の目の前でアイリスもロレンスも当然のように馬に乗った。

アイリスも乗れるの……。

軍の魔術師とは知っているけど、見た目はそうは見えないから驚いてしまう。

すると黒い馬が近づいてきた。

「掴まれ」

「あ、ありがとうございます」

目の前に無表情なままのジェラルドの手が差し出された。恐る恐る

る手を伸ばすとそのままものすごい力で引っ張り上げられる。そして私が落ちないように腕がしっかりと腰に回された。前の時みたい

に。
ああ、どうしよう。まさか、また馬だなんて。気まずい……。
「行くぞ」

動揺を隠せない私なんかを気にも止めず、三頭の馬はいなぎと共に一斉に走り出した。

第二章 宿の夜

夜は町の宿に泊まるらしい。

イスニア国は比較的人口が多く、至る所に小さな町が点在する。だからこの国にいる間は夜、必ず宿に泊まる事ができる。けれど国を出て徒歩になれば話は変わってくる。町と町の距離が遠ければ野宿をすることになるらしかった。でも、それも楽しみだ。

私たちはわりと大きな宿の広い食堂で夕食を取っていた。人も結構多い。このくらいの規模の宿になれば食事も前に並ぶ料理の中から自分の好きなものを好きなだけ取って食べるスタイル。

前にも思ったことだけど、何度見ても男の人の食べる量には驚かされる。それにその早さにも。私の倍以上の量を半分の時間で食べってしまうのだ。男の人と食事なんて牧師さん以外とはしたことがなかった。牧師さんは別にいっぱい食べるわけでも、食べるのが早いわけでもなかった。だからジェラルドだけが特別なのかもしれないと疑っていたけど、ロレンスも同じような感じだった。

それでやっと納得した。男の人は食べるのが早いのだと。私にだってジェラルドが『一般的な男の人』という括りには入らないかもしれないということには気づいているのだ。

二人きりだった時はさつさと食べ終わってしまうジェラルドを横目に内心ものすごく焦ったけど、今回はアイリスが居るから大丈夫。

「どうしたの。なんだか嬉しそうね」

思い出しながら向かいに座るアイリスを見てにこにこしてしまっていたらしかった。アイリスは私に怪訝そうな表情を向ける。

「ううん、何でも」

二人がいる前では言えない。

私は笑いながら首を振った。

「明日もこのくらいの天気だいいけど」

彼女はあっさり話を変えると外を見ながら独り言のようにつぶやく。

今日は結局、一日中曇り空だったのだ。朝起きて残念に思ったことを思い出した。

「どうして？せっかくの夏なのに晴れなくてもいいの？」

「だって、日に焼けるじゃない。サーシャは気にならない？」

アイリスの言っている事は不思議だった。

「夏は日に焼けるものでしょう？」

「サーシャって何もしてなくてそんなに色白いの？」

何故か疑いの眼を向けられた私は困惑した。

「何をするの？」

「何もしてないのね。……なんか、あなたってすごいわ。色々と」

アイリスは首を振りながら呆れたように言う。

言葉では褒められているのになんだかすっきりしない言い方だ。

「リヴィー、全く、君は全然変わらないな」

すると突然、私の横でもうとつくの前に食事を終えて、優雅にお茶を飲んでいたロレンスが何かを思い出したように笑った。

「ちよっと、外でその呼び方はやめてくれる？」

アイリスが少し尖がった声で言う。

「リヴィー？」

それって、アイリスの事？私はアイリスを見て問いかける。

「私の愛称よ」

彼女はうんざりしたように答えた。

愛称って小さいときの呼び方だったような。二人ってそんなに前から知り合いだったの？その割にはすごく仲がいいというふうには見えないけど……。

「アイリスとロレンスってどのくらい仲良しなの？」

「別に仲良しじゃないわ」

アイリスはきっぱり言い放った。その迷いのない口調にロレンスは苦笑いする。

「なんだか、その言い方は傷つくな」

「小さい頃から知ってるんじゃないの？」

「知ってるのは知ってるわ。ロレンスはお兄様と仲が良くて、それで家にも遊びに来ていたことがあるっただけよ。それにそれもう結構昔の話だし」

「家でお兄様って呼ぶの？」

「そうよ。何か変？」

「うっん」

慌てて首を振って否定を示す。でも内心は驚きだった。お兄様って呼んでるなんて。

私は旅の準備を手伝ってもらう時に必要になりそうなものをアイリスから色々もらったのだ。「使っていないものが家にたくさんあるから遠慮はしないで」と言われて。そしてそれはどれも私が見たことのないような高級そうな物ばかりだった。

その時ははつきりとは教えてくれなかったけど、やっぱりアイリスはお嬢様だったんだ。

感心してこっさりため息をつく。

ここにいるみんなはすごい人たちばかりだった。

アイリスが教えてくれた情報によると、ロレンスはすごく有名な家の騎士らしいし、ジェラルドも地位の高い軍人。こんな所に私が混じっていいのなと思ってしまう。

それにみんなは私の一族を探すためにこの旅について来てくれているのだ。

「ありがとう」

みんなを見渡して突然なんの脈絡もなく言った私に驚いたらしい
アイリスは食事の手を止めた。

「何よ、疲れたの？」

その答えに笑ってしまい、首を振りながら答える。

「ううん、ありがとって言いたかっただけ」

アイリスは怪訝そうにしたままそれ以上は何も言わなかった。口
レンスは私を見てちょっと首をかしげている。

今まで黙っていたジェラルドは少し眉を寄せて「早く食べる」と言
った。

第二章 距離 1

馬の旅は7日間続いた。

その間はあまり変化がなかった。昼間は馬で進み、夜は宿に泊まる。この国ではグーテンベルク一族に関する情報を私たちが捜す必要はないしかった。

その昼、ようやく北の国境に到着した私たちは馬を降りた。

これでやつとお尻の痛みから解放される。

私はほっと安堵した。

移動する間、馬が近づき過ぎないようにそれぞれ少し距離を保って進んでいた私たちは馬から下りて休憩する時以外に会話はほとんどしなかった。

もちろん、同じ馬に乗っている私とジェラルドは話そうと思えば普通に話す事ができた。でも予想していた通り、会話は全くなかった。

ううん。本当は聞かなかったことにしたい会話が一つだけあった。ジェラルドは4日目に突然「ロレンスの方に乗るか」と言ったのだ。

目の前が暗くなるほどのショックだった。

気まずい空気に、彼は私を乗せるのが嫌になったに違いなかった。

私はあまりの事に狼狽し、答えることができなかった。

その時、私たちを見ていたらしいロレンスが「よろしければどうぞ、お姫様」とにつこり言ってくれた。ロレンスがそう言ってくれなかったらどうなっていたのか。私は想像するのも怖くて考えないことにした。

それでその日から今日まで、私はロレンスの馬に乗って来たのだった。

どうして上手く行かないんだろう。

馬を預けに行くジェラルドの後姿を見ながら悲しく思う。

乗せてもらっている間、ロレンスとは色々話した。

ロレンスは王子様みたいな見た目だけど、実はちよつと皮肉屋さ
なんだって事も分かった。私みたいな子は珍しいって私が何を言っ
てもおかしそくに笑うのだ。でも一緒にいるのはすごく楽しい。

出会ってから少ししか経っていないロレンスのことは分かるよう
になってきたのに、ジェラルドのことは何も分からないまま。私に
向けられる鋭い目つきが和らぐ事もない。出会った時から全く縮ま
らない距離に戸惑う事しかできないままだ。
どうすればいいのか私には分からない。

歩く道は細い森の中の道だった。小道があるようなところもある
し、ないところもある。

この大陸はほとんどが森で覆われていて、まるで森に浮かぶよう
に町が点在するのだそうだ。町から町へ移動するには必ず深い森を
越えることになる。

山で暮らしていた私はそれが少し嬉しかった。

国の外でも森の植物は同じなのかな。今まで見たことのない花や
薬草が見られるかもしれない。私は期待に心躍らせていた。

薬草を探して道の両端をきよろきよろと見回しながら進む。

振り返って私を見ていたロレンスと眼が合つと彼はおかしそくに
言った。

「サーシャは山の中に住んでいたんだろう？何がそんなに珍しいん
だ？」

「もう国の外だし、今までとは違う薬草が見つかるんじゃないかな
と思って」

驚いたように私を見たのはアイリスだった。

「サーシャって薬学の知識があるの？」

「薬学かは分からないけど、私薬草を売って生活していたの」

そう言いながらその事がなんだかすごく昔のことに思えた。普通の毎日を懐かしく思う日が来るなんて。あの頃は考えた事もなかった。

「それは驚いたな」

感心したように言われてなんだか嬉しくなる。

「あ、ちよつとは私のこと見直した？」

「そうだね」

ロレンスは鼻を鳴らして笑った。

「ねえ、アイリスは魔法が使えるんでしょう？ 治癒の魔法ってどんなの？」

「そうだね、と言いながら思う。今までちゃんと聞いたことはなかった。」

「怪我を治すことができるのよ」

「それって珍しいの？ 私今までそんな魔法があるなんて知らなかった」

昔読んだ事のある本に紹介されていた魔法は攻撃に使われるようなものばかりだった。

アイリスは少し考えてから口を開いた。

「そうね。魔術師にはそれぞれ自分の得意な分野があるのよ。風の魔法だったり、火の魔法だったり。それを属性っていうんだけど、

……ジェラルドは何なの？」

突然前に声をかける。

「水だ」

彼は聞いていたらしく前を向いたまま普通に答えた。それに密かに驚く。

「そうなんだ。あ、でも属性があるっていても、それだけしか使えないわけじゃないのよ。他の分野の魔法も使えるの。一番得意な

ものが属性って言われるだけ。ただ治癒の魔法はそれが自分の属性じゃないと使えないの。あと雷もそうね」

「じゃあ、アイリスはすごいね」

「すごいかどうかは分からないけど……生まれつきのものだし」

感心して言う彼女は少し困ったようだった。

「魔法って生まれつき使えないと使えるようにはならないの？」

これも聞いたかったことだ。

もしかしたら私も使えたりしないのかな。そんな期待を目に込めてアイリスを見つめる。

「才能によるわ。それと訓練」

アイリスは断言した。

「使えるかどうかは生まれつきの才能に左右されるの。才能がなければ使えるようにはならないわ。でも厄介な事にその才能がどれくらいあるかは訓練してみないと分からないのよ」

「じゃあ私も才能があるかもしれない？」

わくわくしながら聞くとアイリスは笑った。

「ほとんどの場合、才能って遺伝なのよ。突然の場合は赤ん坊の頃に力が暴発してしまったりするくらい強い力を持って生まれるから気づかれるの」

「気づかれないくらいの力を突然持つて生まれたりしないの？」

諦めきれなくて食い下がってみる。アイリスははっとしたような顔をした。

「平民に生まれたら、魔法の訓練なんてしないでしょ？だから気づかれないまま結局使えないって事になるんじゃないかしら。……あ、ジェラルドはどうだったの？」

また前に声をかける。

ジェラルドは一度私たちを振り向いてから前を向いた。少し考えているようだった。

「覚えてないな。気づいたら使っていた」

「覚えてないの？そんな事ってあるの！？」

アイリスは素つ頓狂な声を上げた。呆れ顔で。

「……ああ。親も知らないしな。遺伝かどうか分からん」
「そう……」

アイリスは少し黙り込み、それから私を見た。

「サーシャも親がどうだったかは分からないのよね？」
それに頷いて答える。

あ、そう言えばロレンスは魔法は使えないんだっけ。

「ねえ、ロレンスは訓練したの？」

私も前に声をかける。

「ああ、一応ね。でも残念ながら反応なしだった。私は親兄弟誰も使えないしな。サーシャもしてみればいいんじゃないか。どう思う？」

ロレンスは最後、振り返ってアイリスに顔を向けた。

「確かにそうね。暴発するくらいの力ってそうそうないし、もしかしたら平民にもある程度力のある人はいるのかも。訓練しなきゃ分からないしね。……ねえ、やってみる？」

アイリスはいたずらっぽく目を私に向ける。

「ほんと！？いいの？」

「歩きながらは無理よ。夜になったらね」

飛び上がって満面の笑みを浮かべた私にアイリスはなだめるように言った。

第二章 文字1：アイリス

昼間自分にも魔法が使えるかもしれないと聞いたサーシャは、夜までずっとそわそわしっ放しだった。

私はそれを分かりやすく可愛いと思う。

彼女は好奇心の塊でできているみたいだ。知らない事を見つけると嬉しそうにきらきらした眼で素直に聞く。知らない事で引け目を感じたりする様子はなかった。

それにあの笑顔。本当に無邪気に笑うのだ。黙っていれば近寄りたいくらい綺麗な分、そのギャップは大きい。あの笑顔向けられてくらつと来ない男はいないと思う。私だってそうだったもの。

事実、ロレンスはすっかりサーシャの虜のようだったし、宿の人も彼女が笑顔で「ごちそうさまでした」と言っただけで、次の日の食事にしなさいとパンや果物をくれたりしたくらいだ。

あ、でも一人だけ例外がいるわね……。

魔法で薪に火を付けようとしている男に眼を向ける。彼はあまり表情を表に出さない。それに口数も少ない。ロレンスの冗談に付き合っているところを見ると、話が下手なわけではないようだし、話すのが嫌いでもないみたい。聞けばすぐに答えてくれるし。

ただ無口なだけなんだろうけど、サーシャはすっかり参っているみたいだった。私が知らないだけで二人には何かあったのかもしれないけど、かなり苦手意識を持っている様子。

そしてどちらかというとジェラルドの方はそれに気づいていて、彼女に気を使っているらしかった。馬での移動の時には彼女の緊張状態を見ていられなくなったのか、ロレンスの馬にさせることを提案したくらいだ。

あれには笑ってしまった。悪い男ではないのだ。多分、不器用なだけ。

「いっぱい取れたよー」

薪を集めて火を付けるのが仕事だった私たちが役目を終えて持ち無沙汰で座っていると、果物を集めに行っていたロレンスとサーシャが戻ってきた。この時期の森には食べられる木の実や果実が多くある。

別にそんなに切り詰めて旅をする必要はないんだけど、サーシャが詳しいという事で行ってもらっていたのだ。乾燥させた果物よりは生のほうがおいしいだろうと言うことで。

サーシャはご機嫌だった。両手いっぱい木苺やブルーベリーなどを抱えている。ロレンスの手にはキャンテロープが二つ。

私は思わず呆れてしまった。

「ちよつと、取って来すぎなんじゃない？」

「サーシャが男の人はいっぱい食べるでしよって聞かないんだよ」

ロレンスも苦笑いだ。ジェラルドまで鼻を鳴らす。

「もう火をつけてるの？」

私たち三人の反応を本人は全く気にしていないようだった。誰に聞くでもなく独り言のようにつぶやく。

「火があれば獣が近づかない。それに山の夜は冷えるだろう」

意外にもそれに答えたのはジェラルドだった。

サーシャも驚いたようで火の前に座る彼をちらつと見ると、そっか、とまたつぶやくように言った。

「さあ、食べよう」

ロレンスが座って私たちは全員火を囲んだ。今夜は初めての野宿だ。

「でも、やっぱりちよつと熱いわよね」

そう言う私に全員が無言で同意した。

食事の後、サーシャはまたそわそわし出した。彼女はすごく分かりやすい。絶対に魔法の事を考えている。

でも私はその前に聞いてみたいことがあった。

「ねえ、サーシャはどこで薬学を学んだの？」

治癒の魔法を使えば外傷は治すことができるけど、病気は治せない。それには医学や薬学を学ばなければならない。私も薬学を勉強しているから彼女の知識に興味があった。

「薬草の知識は、本で覚えたの」

彼女は首をかしげながら答える。

「サーシャは文字が読めるの？」

「うん。私のおばあちゃんも文字が読めたから。おばあちゃんに教えてもらったの」

「それは珍しいな」

ロレンスが声を上げる。私も同感だった。イスニアの平民の識字率はそれほど高くはない。本を何の問題もなく読むことができれば相当知識がある者として扱われるはずだった。彼女の祖母の年で文字が読めるのは本当に珍しい。

「そう言えば、どうしてだろうね。聞いたことなかったわ」

サーシャはどこか遠くを見るようなぼんやりした眼をした。

「ねえ、どんな本？」

彼女は自分の荷物の中をあさり、一冊の本を取り出した。

「これよ」

手を伸ばして受け取った本見て私は言葉を失った。

「これ……？」

その本の表紙に書かれてある文字。それは私には読めなかった。

第二章 文字2：アイリス

「これが読めるのか？」

先に声を出したのは隣にいたジェラルドだった。訝しむような表情で眉を寄せてサーシャを見ている。するとサーシャは慌てたように私の近くにやって来た。

「え、何かダメなの？」

彼女は自分の本を覗き込み、確認しながら答える。

「だって、……これ、なんて書いてあるの？」

「へっ？」

サーシャと私は顔を見合わせた。

我ながら間の抜けた質問だと思う。でも、この文字は私には読めない。

うつん、この国の誰にも読めないはずだ。

「これって、アラベル文字よね？」

「そうだ、間違いないな。どうして今まで黙っていた？」

近くからジェラルドに鋭い眼を向けられたサーシャは目に見えてうろたえた。

「何がダメなの？」

サーシャはおろおろと私とジェラルドを交互に見る。彼女にはこの重大さが分からないらしかった。

そこで私は体の向きを変えてサーシャに説明することにした。

「この本、アラベルっていう文字で書かれているんだけど、この文字は古い文字でもう使われていないの。今でも解読されていないのよ」

彼女は驚きに目を丸くしておずおずと口を開く。

「え、でも……私、読めるよ……？」

「だから私たちも驚いてるんじゃない！」

「どうしてこれが読めるんだ。祖母に習ったのか？」

それを聞いたサーシャははっと何かを思い出したような顔をした。
「そうだわ。おばあちゃんはこの本が読めなかったのかもしれない

……」

「じゃあ、どうしてあなたは読めるのよ？」

「……分からないわ」

彼女は困惑した様子で考えだした。私とジェラルドは思わず顔を見合わせる。

分からないって言われても……。彼も困ったようだった。

「じゃあ、本はどこで手に入れたんだ？」

「……家に、家にあつたの」

彼女は記憶をたぐり寄せるかのように虚空を見つめ、たどたどしく話し出した。

「そう、子供の頃におばあちゃんのベッドの上で見つけたの。家にはそんなに本がなくて、見たことのない本だったから……借りたのか、新しいのを買ったのになって思っ、その場で読んでいたの。そしたら、おばあちゃんが私が読んでいるのを見つけて……、慌ててみたいだった。私が読めるのを知って、多分、……驚いてたと思う……。この本どうしたのって聞いたら教えてくれなかったんだけど、私が読めるんだつたらあなたにあげるわって。……今まで、忘れてたわ。この本はいつも当然にそばにあつたから……」

私たちはしばらくの間沈黙した。それぞれが何かを考えているようだった。

「アラベール文字はグーテンベルク一族の使う文字だったんじゃないか。サーシャの母親が置いて行ったのかもしれない」

沈黙を破ったのはロレンスだった。ジェラルドはそれに頷いた。

「そう考えるのが最も筋が通るな」

サーシャはまだじっと本を見つめたまま動かない。私は持っていた本を彼女に返した。

「誰にも教えてもらっていないのに読めたの？」

彼女は顔を上げて本を受け取る。

「ええ。だって、今まで他の本と違うなんて気づかなかったもの」

「全部一緒に見えるの？」

「うん」

同じ文字に見える。

当然のように頷いた彼女を見て、私は何故か背筋に寒気を覚えた。不思議な色の瞳。あなたのその紫の瞳にはこの文字はどういうふうに映っているの？

やっぱりサーシャは普通の子とは違う。グーテンベルクの生き残りなんだわ。

その事を強く認識せざるを得なかった。

アラベール文字が読める。これは本当にすごい事なのだ。

この大陸には三種類の文字がある。現在使われるコナール文字、魔術書に使われている古代ピョーテル文字、そして謎のアラベール文字。

学者たちの長年の研究にも関わらず、アラベールだけが唯一、解読されていないのだ。その複雑さゆえに。

「ねえ、書く時は？字を書いた事がある？」

サーシャは首を横に振った。

別に珍しい事ではなかった。紙は町の人にとってはわりと高価だろうし、ペンやインクはもっと高価だ。それに文字を使う機会は日常的にはないだろう。

「名前、書いてみて」

魔法で紙とペンを取り出し、彼女に手渡す。

全員がその手元に痛いくらいの視線を向ける中、彼女はおそろおそろペンを滑らせた。

「……………」

誰かが息をもらすのが聞こえた。

アラベールだった。

サーシャには本当に違いが分からないらしい。不安そうに私の顔を覗き込む。

「ねえ、私どっちで書いたの？」

「アラベール文字よ」

サーシャが目を閉じてため息をついた。どうして、と呟く。

重苦しい空気が漂う。

パチパチと焚木のはぜる音だけが静かにやけに大きく響いていた。あまりの事実に必要な何を言うべきなのか分からないのだ。サーシャは私たちの真ん中で、まるで悪い事をしたのが見つかってしまった子供みたいに萎縮してしまっている。

彼女は何も悪くはないのに。

「ねえ、サーシャ。これってすごいことだわ。アラベール文字って、薬学や医学の本が多いって言われているの。まあ実際は解読できていないから、その挿絵とかで判断しただけなんだろうけど。でもその中にはまだ知られていない内容が書かれているものがあるかもしれないわ」

私は明るく言った。

「そうだよ、サーシャ。これはすごい力だよ。きっと国のみんなの役に立つ」

ロレンスも気分を変えるように言うとサーシャに笑いかけた。

それを聞いた彼女は強張っていた口元を少し緩めて囁くように言った。

「ほんと？本当にそうなる？」

「ええ。大丈夫よ」

笑いかけると、サーシャはほっとしたようにかすかに微笑んだ。ジェラルドは何も言わなかった。彼はその後一人で静かに何かを考えているようだった。

第二章 不安

ざわざわと森が音を立てる。

私は眠ろうと閉じていた目を静かに開けた。

真つ暗な森の中、燃え続ける焚火の火だけがやけに赤々と周りを照らしている。

皆は眠っているようだった。ゆっくりと体を起こして辺りを見回す。アイリスはローブに包まって横になって眠っている。ロレンスとジェラルドもそれぞれ近くの木に背を預け、座った姿勢のまま眠っているようだ。

初めての野宿は眠れそうになかった。さっき初めて知った事実のせいで。

横に置いてある袋に手を伸ばし、音を立てないように気をつけながら本を取り出した。濃いオレンジ色の光が揺らめきながらその表紙を映し出す。

『森の毒草・薬草とその効用』

そつと表題を指でなぞる。もう、すべてを覚えてしまうほど何度も読んだ本だ。

使い込まれた本の角は少し丸く、全体的に古びた見た目になってしまっている。でも、凹凸のある厚い表紙はツタが絡まったような複雑な模様で手の込んだ作りだった。高価なものだったはずだ。

……おかあさんが私のために置いて行ったの？

この本が特別なものだなんて考えたこともなかった。

今までこの本のおかげで薬草を売って生活して来られたのだ。側にあるのが当然すぎて何の疑問も抱かなかった。

誰にも読めない本。どうして私には読めるんだろう。

私には二つの文字の違いが分からない。この本も、現在使われているコナール文字で書かれているんだと思っていた。

もし、コナール文字を学ぶ前であれば、その違いが分かったの？でも今になってはもう、それを知る事はできない。

また一つ、疑問が増えた。

答えを求めて旅に出たはずなのに分からない事が増えるなんて。心の中で苦笑いをしてふつと息を漏らす。

いずれすべて分かるのだろうか。旅はまだ始まったばかりだし……。

大丈夫。朝になれば明るい気持ちになれるわ。そう、暗いところで考え事すると深刻になってしまっただけ。

私は無理やり自分に言い聞かせた。考えても答えは出ないのだ。

今は、じわじわと沸いてきそうになる不安に気づかない振りをするしかなかった。

翌日は素晴らしく晴れた一日だった。

昼間はとりとめのない話をしながら歩いた。昨日の出来事なんてなかったかのように、いつもと何も変わらなかった。

私は今日こそ自分に魔法が使えるのかどうか知りたいと思っていた。

今日も野宿だ。明日の昼には町に着けるらしいけど。

「ああー、疲れたあー！」

夕食を取ろうと焚火の前に座ったとき、アイリスが突然声を上げた。

本当に疲れているのがよく伝わってくるその響きに、思わずロレンスと顔を見合わせて笑ってしまう。

「アイリス、レディーがその声を出すのはちよつとどうかと思うよ」

「何よ、こんな所でお父様みたいなこと言わないでよ」

そのやり取りもなんだか可笑的い。

今日は本当に暑かった。それに一日中歩き通しだった。昨日もそ

うだったけど、まだ一日目だったからそれほど疲れたとは思わなかった。それに昨晩は野宿だったのだ。体の疲れは溜まっているはず。「この調子だと明日はもつと大変ね」

「サーシャはなんでそんなに元気なのよ？」

「アイリスよりは慣れてるもの」

肩をすくめて答える。私は森で暮らしていたのだ。今まであまり森に入った事がないアイリスよりはずっと慣れているに決まっている。

「それで魔法を使う事になったら大変なんじゃないのか？」

ロレンスの言葉にアイリスは笑いながら返した。

「人の治療する前に、私が死んじゃうわ」

魔法を使うとその分だけ自分の力が削られてしまうらしい。大きな魔法を使えばそれだけ多くの体力を使う。だから自分自身にそれなりの体力がないと魔法を使う事はできないのだ。これは精霊の力と違うところだった。

「だからごめんね。私今日はサーシャに魔法を教えてあげられないわ」

「えっ、そんな。楽しみにしてたのに……」

続いて放たれたアイリスの言葉にがっかりした。今日一日中ずっと楽しみにしてたのに。

でも、無理は言えないのは分かっている。今日は仕方がない。

「ジェラルドに教えてもらえばいいんじゃないのか」

ふと思いついたように言ったロレンスの言葉に私は固まった。

「……え、でもそれは……」

焚火を挟んで反対側に座るジェラルドをちらりと見る。

「……………」

その時ちょうど同時に私に眼をやった彼と思いがけず視線がぶつかった。ちらりと見てすぐに眼を離すつもりだったのに、なぜか囚われたまま視線を外せなくなってしまい、私は心の中で一気に焦った。

しばらくして、ふっとまるで興味がなくなかのように視線を外したのはジェラルドだった。

彼はそのまま一言も言わない。

泣きたいような気持ちで顔の向きを変えてロレンスに眼で訴える。
『嫌だつて……』

ロレンスは私の視線を受けて困惑したような複雑な表情を浮かべた。彼はジェラルドに眼をやって口を開きかけたまま、どう言おうべきか迷っているようだった。

「とにかく、食事にしない？ お腹空いたわ」
助け舟を出してくれたのはアイリスだった。

第二章 呪文

微妙な空気の中での食事の後、結局アイリスが教えてくれることになった。

もう、それだったら始めからあんな事言わないでよ……。

と心の中で思ったけど、教えてもらっている身でそんな事は言えない。

彼女は魔法で一冊の本を取り出した。

「これが魔術の基本書よ」

私との間に本が置かれる。薄いけれどすごく荘厳な作りの本だ。厚めの表紙は真っ黒で表紙の文字は金色。見るからに高価だというのが良く分かる。

でも、その金の文字を見て自分の顔が強張るのが分かった。

……嘘でしょう……？

「これ……、何て書いてあるの？」

アイリスは少し予想が外れたというような顔をした。

「あら、これは読めないの？」

頷くと彼女は続けた。

「古代ピョーテル文字。昔から魔術の本に使われている文字よ。コナール文字の原型ね。今でも魔術書にはこの文字が使われているから、魔法を学ぶにはこの文字が読めるようにならないといけないの」「じゃあ、文字が読めないと私が魔法を使えるかどうか分からないの？」

アイリスの言葉に愕然とする。

もしかしてこれってものすごく時間がかかるの？

「ううん、魔法の才能があるかどうかを見るだけなら読めなくても大丈夫よ。実際に使う段階になって初めて必要になるの」

「良かった……」ほっと息をつく。「どうすればいいの？」

「この本の表紙には、特別な魔力が込められてるの。その人の持つ魔法の力に反応するように」

そう言くと、彼女は本の表紙に右手を当てて、目を閉じて何かをつばやきはじめた。お城でジェラルドの魔法を見たときよりもずっと長い呪文だ。

呪文が途切れると同時に本が光を放ち始めた。

柔らかな淡い黄色の光は徐々に強くなり、その光の色もどんどん濃くなった。最後に大きく鮮やかな緑色の眩^{まはゆ}い光を放つと突然ぱつと消えた。

静寂が広がった。

急に消えた光のせいで、さっきまでよりも周りが暗く感じられる。私は驚きから目を丸くして光の消えた本に眼をやっていた。

赤い焚火の炎に照らされた本の表紙は先ほどまでの漆黒から鮮やかな緑に変わっている。

「色が変わってる……」

「そうよ、この色で属性が分かるの。緑は治癒の色ね。はい、あなたもやってみて」

そう言くと突然、アイリスは立ち上がった。

そのまま反対側に座っていたジェラルドの方へ歩み寄って本を手渡す。ジェラルドはアイリスを無言で見上げて本を受け取った。

本はジェラルドの手に渡ると同時に元の真っ黒に戻った。

ジェラルドが同じように呪文を唱えるとまた眩い光が溢れ、本は今度は透き通るような青に変わった。

……また色が変わった……。

「目と同じ色だわ」

驚きとともに考えるよりも先に言葉が口をついで出た。

……そうだ、アイリスは緑でジェラルドは青い瞳だもの。

「あら、よく気づいたわね。大体、目の色と属性は一致するのよ。

……そうじゃない場合もあるけど」

「紫はあるの？」

「紫はないわ。だからサーシャはどんな属性か予想ができないわね」
アイリスは微笑んだ。

「ねえ、ロレンスもあれやったの？」

隣に座っているロレンスに聞いてみる。

「ああ、小さい頃に何度もやらされたよ」

何を思い出したのか、うんざりした様子だ。

「何度もやるの？」

「そうよ、サーシャ」

アイリスは再び私たちの方に戻って来た。

「すぐに反応する人は滅多にいないの。よっぽどの強い力を持っていないとすぐには反応しない。だから初めての人は、眠っている力を起こすために何度もやらなくちゃいけないの」

「でも、永遠に反応しないかもしれない」

ロレンスが肩をすくめる。

「そうね。こればかりはやってみないと分からないわ」

アイリスはそう言うと言った黒な本を私に手渡した。

「呪文は？」

それを聞くと彼女は何か含み笑いをした。

「表紙の次のページに書いてあるわ」

どうしておかしそうなんだろう。疑問に思いながら本の表紙を開く。

そこにはページの上半分にびっしりと読めない文章。下半分にはそれを訳したらしい、私にも読める文章があった。おそらく、コナール文字で書かれたもの。

首をかしげる。

「これ？」

「そうよ、それ」

「えっ……、全部!？」

「そう、全部」

私は目を見開いた。結構な量だ。本当にこれを全部覚えるの？

「頑張つて覚えてね。少しでも間違えたら反応しないわよ。それに、つかえたりしてもダメよ」

アイリスの言葉を聞いたロレンスが突然、堪え切れなくなったかのように吹き出した。

「本当に大変だったんだよ、それ。サーシャ、頑張れよ」

「私も苦労したの！もう二度と嫌だわ！」

啞然とする私を横目にアイリスもつられて笑い出した。

本当に全部？しかも、一字一句間違えないように覚える。これは大変だわ……。

「本に手を当てて、呪文を唱えるだけでいいの？」

「ええ。私には魔法の力があるんだって強く信じながらね」

まだおかしそうな二人を見ながら、私は頑張ろうと決心した。

第二章 彼女：ロレンス

小さな町に着いたのは日が傾きかけたのがはつきりと分かるようになった頃だった。

「わあ、私の住んでた町に似てるわ」

隣でサーシャが声を上げる。目を輝かせて嬉しそうだ。

別に可笑しな事を言っただけではないのだが、その愛らしさに口元が緩んでしまいそうになる。

今日の彼女は本当に見えていて飽きなかった。

歩きながら昨日アイリスに借りた本の呪文の暗唱の練習。今日はいつものように他愛無いかしゃべりをせず口の中でぶつぶつと呪文を唱えていた。さらに薬草を探すために目は絶えず道の両脇を見渡す。どっちも大真面目でやっているのが本当におかしい。

初めて見た時は彼女の美しさに言葉を失ったが、その性格を知った私はそれ以上に驚かされた。

彼女のような女性は初めてだ。

これまで貴族の令嬢以外とこのように接する機会などなかった。巧みな話術と勘ぐり、駆け引きが常の彼女たちとは違い、サーシャは純粹で疑うことを知らず、正直だった。世間知らずかと思えば、薬学の知識があるなど意外な一面も持っている。まるで掴みどころがない。

彼女のそのよく動く大きな紫の瞳と愛らしい笑顔は誰をも魅了するようだった。

イスニアで宿に泊まった夜、姿が見えなくなった事を心配し探しに行くと、いつの間にか食堂で知らないパーティーの者と談笑していた事もあった。あれには三人とも呆れてしまった。

「町じゃなくて村じゃないの？」

「私の住んだところはもう少し大きいもの。だから町よ。でもなんだか雰囲気似てるの」

確かに、町というよりは村だ。家が20軒ほどあるだけだ。

それぞれの家も町のように隣り合っているのではなく、畑を挟んでいるためある程度の距離があった。

「宿を探してくる。少しここで待っていてくれ」

ジェラルドはそう言うと言わしめ私達を町の入り口に置いたままさつさと一人行ってしまった。

「ここに宿なんてあるのかしら」

アイリスの言葉を聞いて、私は尤も^{もっと}だろう、と思った。アイリスこそ家や城を出てこれほど遠くへ来たのは生まれて初めてのはずだ。私が彼女の兄のルイスと友人であるため、彼女の事は彼女が生まれた時から知っていた。彼女が幼い頃は実際にリトリアの家で会っていたし、成長してからルイスから聞かされる困った妹リヴィーとして。

やはり兄にとって末の妹というのはいつまで経っても幼いリヴィーのままであるらしく、その話を聞かされ続けていた私もすっかりそれに感化されてしまっていた。

確かに、彼女のはつきりとした物言いや素っ気ない態度は昔からあまり変わっていない。なので、旅を始めた当初は聞かされてきた幼いリヴィーのままだと感じた。

しかし、彼女はあまり誰かと群れることを好むようではなかったように思う。パーティーや舞踏会を嫌がり参加しようとしなないというのはいつもルイスの嘆きの一つだった。

それが今、見ている限り彼女はサーシャとは姉妹のように打ち解けている。それに意外と世話好きのようだった。ジェラルドにも事

あることに話しかけ、私たちの話に参加させようと試みている。

まあ、あまり効果は上がっていないようではあるが。

彼女はもう幼いリヴィーではなかった。城で一人暮らしをするうちに何かしらの変化があったのだろうか。

そこまで考え、ふと我に返った。

「普通の民家に泊めてもらうんだよ。部屋が余っていたりすれば泊めてもらえるさ」

「四人が泊まれるほど部屋があるの？」

「まあ、さすがに一人一部屋と言うわけにはいかないだろうな」

ここよりも小さく、もっと貧しい村に行けば四人一緒に一つの家に泊めてもらうことも困難になるだろうが、この村ではまだ大丈夫だろう。

それを聞くとサーシャが嬉しそうに言った。

「じゃあ、私とアイリスは一緒に部屋で眠るの？」

「あら、あなたはジェラルドと同じ部屋よ？」

くすつと笑ってサーシャを見たアイリス。一人暮らしでそんな冗談まで覚えたのか、と内心苦笑する。

案の定、それを聞いたサーシャはみるみるうちに顔を曇らせる。彼女に冗談は通じないのだ。

「そ、それは困るわ……」

「城では一緒に部屋で生活してたじゃない」

アイリスはまだ続ける気のようにだった。

「そ、そんな事してないわ!」

何を言っているのか、というようにアイリスを見たサーシャの様子に、私はおや、と思った。

「私と初めて会った部屋にずっと居たんでしょ?」

「そうよ。だから一緒に部屋じゃないでしょう?」

まさか、彼女はあの部屋がジェラルドの部屋の客室であったとは気づいていないのではないか……。

いや、サーシャならありうるな。それに気づき考えを改める。彼女はリビングを挟んだ反対の部屋にジェラルドの寝室がある事を本当に知らないのだろう。まあ、サーシャにしてみれば同じ部屋だという感覚がないのかもしれないが。

アイリスもその事に思いが至ったようだった。複雑な表情を見せる。

「アイリス、このまま知らない方がいいな」

「そ、そうね」

その方が彼女のためだ。

目配せして事実を知らせない事を確認し合う。

「なに？なにを知らないの？」

その時ちょうどジェラルドが戻ってきた。

おそらく、彼はサーシャに気を使い隣に彼の寝室があることを気取られないようにしていたのだろう。彼はこの女性に思いの外気を使っていたらしい。

私とアイリスに同時に哀れみの眼を向けられた男は怪訝そうな顔をして言った。

「なんだ？……宿が見つかったぞ。四人一緒に入れるそうだ」

第二章 距離2

ジェラルドに付いて行つた家はごく普通の民家だった。

扉の前にぶら下がっている小さな鈴を鳴らす。迎えてくれたのは老夫婦だった。

確かに、この家に二人で住んでいるのなら部屋は余っているはずだ。

私たちはそろって家の中に入った。

あまり物がないシンプルな部屋。ここから見渡せる範囲には大きな木のテーブルとそれを囲む椅子が8脚。この部屋からしたら不自然な大きさのテーブルだ。そして、部屋の隅には暖炉。反対側の奥に見えるのは綺麗に片付いたキッチンと二階へと続く階段。

家具はあまりないけど、清潔で所々に花が飾ってあったりして、隅々まで目が行き届いている。古い家だけれどすごく温かい雰囲気だ。

椅子が8脚もあるのを見て、この家には子供が多かったのかなと思った。きつと、みんな大きな町に仕事を探して出て行つたんだろう。私の町でもそうだったように。

「あらあら、あなたみたいな大男が4人かと思えば、お嬢さん方もいたのね」

ブラウスにエプロンと長いスカートで肩にはショール。おばあちゃんみたいだ、と私は思った。懐かしいような切ないような気分。嬉しそうににこにこ笑いかけてくれたその人に私は笑い返した。

「あら、あなた、珍しい色の目をしているわねえ」

おばあちゃんが私の目を覗き込むように言った。

いきなり核心を突かれた私は焦った。

前までは自分の瞳が持つ意味を分かっていなかったから、その事

を言われても何とも思わなかったのだ。生まれつきこんな色よ、って軽く返していた。でも今は違う。

「どう言えばいいんだろう……」。

迷いながらひとまず微笑んでみる。

「この辺りでは見かけない色か？」

ジェラルドが自分たちにとっては特に珍しい色ではない、というように何気ない口調で問いかけた。

「ええ、この辺りの人はみんな茶色い瞳だからね。あら、気づいてみればあなたたちみんな違う色をしてるのねえ」

おばあちゃんが私たちを見回して驚いたような感心したような様子で言う。

私に珍しいと言ったのは偶然目が合ったからみたいだ。その事に気づいて、少し安心する。

「疲れているでしょう。大したものはないけれどゆっくり休んでいてね。日が沈んだら夕飯にするわ」

もうこの話題はおしまいみたいだった。

「世話になる」

「さあ、部屋に案内しよう。三部屋しか空きはないがな」

おじいちゃんが言って奥へ歩いていく。

三部屋……。

私は歩きながら隣のアイリスに^{すが}縋るような眼を向けた。

アイリスがくすくすと小さく笑う。そして小声で言った。

「冗談よ、サーシャは私と同じ部屋」

「ああ、よかった……」

ほっと胸をなで下ろす。私たちの話を聞いていたらしいロレンスが振り向いて声を出さずに笑った。

部屋にあったのは簡素なベッドが二つと丸いテーブルだけだった。もう今は使っていない部屋なんだろう。

とりあえずベッドに腰掛けて荷物を置く。久しぶりの宿だ。

アイリスはすっかり疲れてしまっているみたいだった。ベッドの上で靴も脱がないままぐったりしている。

「ねえ、これから夕飯までは暇な時間なの？」

「そうなんじゃない？」

アイリスも分からないのか適当な返事だ。

窓の外を見てみると町が茜色に変わりだしたばかり。暗くなるまでにはまだ時間がありそうだった。

おばあちゃん一人でみんなの食事を作るのかな……。そうだったら大変だわ。

「ねえ、私下でお手伝いしてこようかな。アイリスは休んでるでしょ？」

アイリスは横たえていた体を起こした。

「あなたは？疲れてないの？」

「うーん、あんまり。あのおばあちゃんとお話したいなと思って。

なんだか私のおばあちゃんと雰囲気似てるの」

アイリスはちょっと考えるような、迷うような表情を見せた。

「私も手伝えたらいいんだけど……。私、料理ってしたことがないのよ」

その予想もしない告白に私は目を点にした。

「えっ、今までどうしてたの！？」

「家にはコックがいたし、お城では軍の食堂があっただし……」

……。なんだか、住んでいる世界が違う……。

私は納得するしかなかった。

それに言われてみれば、お城の部屋にはキッチンがなかった。

「ねえ、これから少しずつ、野宿の時にでもサーシャが教えてくれる？」

それを聞いて急に嬉しくなる。今まで教えてもらってばかりいた彼女に私でも教えられる事があるなんて思ってもみなかった。

「もちろんよ」

確かに、今日は無理だわ……。

料理をしたことがないなんて分ければ一瞬で身分がばれてしまう。別にあの老夫婦を警戒する必要はないだろうけど、これから先どうなるか分からないのだ。誰か他の人に私たちのことが偶然に伝わってしまう事もある。もし、他国の貴族に紫の瞳の者と身分の高そうな者が一緒に旅をしていたと知られてしまったらどうなるだろう。それがきっかけで危険な目に遭うかもしれない。もうここはイスニアではないのだ。警戒するに越した事はなかった。

「じゃあ、行ってくるわね」

私はアイリスを残して部屋を出た。

狭い廊下。

私たちの部屋は階段から一番遠い奥の部屋だった。

昼間でも薄暗いであろう廊下を歩いて階段の前まで来た時、何の前触れもなく、一番近い扉が開いた。

あまりにもタイミングが良すぎた。

思いがけず近い距離からジェラルドに見下ろされる事になった私はうろたえた。暗いせいでいつもより威圧感がある。

「どこへ行く？」

「あ、あの、おばあちゃんのお手伝いをしようと思って……」

彼は何かを考えているかのように私をじっと見下ろした。感情の読めない眼差し。

なんだか観察されてるみたい……。

居心地が悪くなった私は顔を合わせられずにうつむいた。

「俺も行くっ」

「えっ」

「余計な事は言うなよ」

思いがけない展開だった。

ジェラルドはそのまま私の横を通って階段を下りていつてしまった。

要するに、私が変な事を言わないように見張ってるって事なの？

私は彼に余計な手間をかけさせてしまったの？

疑問と不安が頭の中でうずまく。

私たちの間には見えない厚い壁があるみたいだった。

彼に対する苦手意識は大きくなるばかり。今までに見たことのないタイプの男の人。どう付き合えばいいのか分からない。このままずっとこんな関係が続くのだろうか。

誰かを苦手だと思ったことなんて今までではなかったのに、どうして……。答えは見つかりそうになかった。いつもそう。頭が答えを出すより先に体が緊張してしまうのだ。

私はしばらく暗い廊下で立ち尽くしていた。

出合った時から一向に近づかない距離。

彼は私のことをどう思っているんだろう。面倒な旅だと思っているんだろうか……。

私には、分からなかった。

第二章 困惑

私は宿の裏庭の大きな木の下で呪文の練習をしていた。さっきお風呂にも入ったし、楽な服装に着替えて。わざわざ外にいるのは部屋ではもうアイリスが休んでいるし、リビングにはロレンスとジェラルドがいるからだった。今夜は月が明るいから横にろうそくを置いただけでも十分に文字が読める。

呪文を覚えるにはなかなか時間がかかりそうだった。

言い回しが古めかしくて、これをつつかえずにすら言えるようになるにはひたすら繰り返すしかなさそう。

……はあ……。

本から顔を上げて息をつく。実はあまり集中できていなかった。

一人になると、どうしても考えてしまう。

おばあちゃんとの食事の準備はすごく楽しかった。常にジェラルドの視線を意識しながらではあったけれど。

ジェラルドは私の監視のために下に降りたのかと思っていたけど、彼はただ私を見張っているだけじゃなかった。水汲みをしてくれたり、裏の畑から野菜を取るのを手伝ってくれたりしたのだ。

悪い人じゃないのは分かってるの……。

それはどうしようもなく重く私にのしかかっていた。今まで人間関係で悩んだことのない私には、初めての大きすぎる悩み。これからずっと一緒にいるのに、何とかしなくちゃと、考えれば考えるほど彼に対する態度がきこちなくなっていく気がする。

考えていると頭の上でがさがさという音がした。

なに？

そう思って木を見上げる。すると黒い影が目の前にどさっと落ちてきた。

降ってきたのは私の頭の大きさくらいの魔物だった。ほんのすぐそこ、目と鼻の先だ。

……うわぁ……。

見たことのない魔物だった。毒々しい紫と黒い縞模様しまでクモのような形。だけど、足がもつといっぱいある。普通のクモでもちよつと嫌なのにその大きさのせいで本当に気持ち悪い。

もし、もう少し落ちてくる場所がずれていたら私の頭の上だったかもしれないのだ。

……あれが、頭の上に……？

余計な事を考えたせいで、足元から背筋に悪寒が走り抜けた。思わず、ぶるつと体を震わせる。

今ここには誰もいない。イブを呼んですぐに風でどこかに飛ばしてもらえばいいのに、私はその見た目のおぞましさに固まってしまった。

気づけば、魔物は硬そうな短い縞模様の毛を逆立てて私を威嚇していた。

私たちは身じろぎ一つしない状態で睨み合っていた。多分、動いたら負ける。

う……。ど、どうしよう……。

その時、ぎいっという音がした。

先に動いたのは魔物のほうだった。音の先に黄色く光る目だけをぎよろつと向ける。私もつられてちらつと音の方に視線を走らせた。でも、すぐに視線を戻す。魔物からも目が離せないのだ。

戸口の前に立っていたのはジェラルドだった。

不意に、私の視界の端で淡い光が生まれた。オレンジ色の光の玉がうねるように魔物に向かって行く。それを見た魔物は突然、体の向きを変え大きく跳ねた。

逃げ出そうとする魔物に襲い掛かるように、光は ぱつと空中で大きく広がった。そのまま網のように魔物を絡め捕らえ地面に押さ

えつける。魔物は逃れようとたくさんの足を動かして必死に抵抗している。

耳を塞ぎたくなるような断末魔の悲鳴が上がった。

光が激しい炎に変わったのだ。黒っぽい色の炎は容赦なく魔物の体を覆いつくしていく。苦しみの声を上げて、じたばたともがいていた魔物はすぐに動かなくなり、その全てが炎に飲み込まれた。あつという間のことだった。

ゆっくりと炎が消えた後、魔物が居た地面には灰すら残っていなかった。

……魔法には、こんな力もあるの……。

私はただただ驚いて、動けなかった。胸の鼓動が早い。

攻撃のためとは知っていた。それに、岩の巨人の時も目にしていた。

でも……。

跡形もなく消えてしまった魔物。実際に目の前でもがき苦しむ姿を見てみると、それは想像以上の衝撃だった。便利なものだという程度の認識しかなかった魔法に対して、私は初めて恐怖を感じた。

「怪我はないのか」

ジェラルドが近づいてきた。

魔物を消し去った彼は何事もなかったかのように落ち着いた、冷静な眼差しだった。

「は、はい」

「暗くなつてからはあまり外に出るな」

彼は私が魔物に怯えていると思ったみたいだった。それだけを静かに言つて、そのまま宿に戻ろうとした。

「あ、あの……っ！」

焦って出してしまった大きな声に一番驚いたのは私だった。振り向いた彼は全く動じていない。

「……ありがとうございます」

彼は一度だけ私の顔に目を留めると、何も言わないまま部屋に戻って行った。

誰もいなくなつた裏庭に佇む。魔物が居たはずの地面に視線を落とした。

魔物つて跡形もなく消えるものなんだろうか。巨人の時には岩が残つたのに……？

使う魔法の種類によって変わるの？

ううん、本当はそんなのどうでもいい。

胸にはまださっきの恐怖の余韻が残っていた。耳には魔物の上げた断末魔の悲鳴も。

私は自分の気持ちに戸惑っていた。

本当は魔法だけじゃなかったのだ。私はあの時、魔法を使ったジェラルドに対しても恐怖を感じた。彼は助けてくれたのに。

……どうして……？

私はとうとう自分の気持ちまで分からなくなってしまったらしかった。深呼吸をして心を落ち着けようと努力する。でもしばらくの間、説明できない不安と胸のざわめきは消えなかった。

明かりがついているのを見てリビングを覗くとジェラルドとロレンスは大きなテーブルに座っていた。

私は目が合ったロレンスに微笑んだ。

「明日もいつもと同じ時間？」

「ああ」

ロレンスも微笑んで答えてくれた。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

二人に声をかけたのに、返事をくれたのはロレンスだけだった。ジェラルドは私を見ただけで、また、何も言わなかった。いつもと同じように。

どうすればいいの……？

夜ベッドの中で、泣きたいような気持ちになっている私が居た。

第二章 獣

あの小さな村を出てからすでに十日ほどが経ち、私たちはもう二つ別の同じような村を過ぎていた。

今日は朝から少し風が強い。森全体の木々が擦れ合い、かさかさと言を立てている。空は相変わらず爽やかな青が広がっていて暑いのはいつもと変わらないけれど。

珍しく誰もしゃべっていないかった。

ジェラルドはいつも通り静かに一人、前を歩いていたし、アイリスはその斜め少し後ろに。私はロレンスと並んで歩いている。でも私は顔を道の横に向けて真剣に薬草を探している真っ最中。

その時突然、がさがさと右斜め前の繁みが音を立ててゆれた。

風とは明らかに違う動きだ。

全員がほぼ同時に足を止めた。

「下がってる」

低い小声でそれだけ言うとジェラルドは一人、私たちよりも前に出た。

そして、ゆっくりと腰の短剣に手をかけながら様子をつかがう。

アイリスを自分の後ろに下がらせたロレンスも剣に手をかけた。

なに……？

繁みの向こうの相手もこちらの様子をうかがっているようで、無言のまま緊迫した時間が流れる。ジェラルドがもう少し繁みに近づこうと足を動かそうとしたとき、その足元で砂がじやりつと音を立てた。

その瞬間、繁みの中から大きな影がほぼ垂直に跳ね上がり、私たちの真正面に音もなく着地した。

それはほんの15メートルほど先だった。飛び出してきた真っ黒な猛獣は全身の毛を逆立て、牙をむき出しにして低い唸り声を上げている。

それを見たジェラルドが魔法を放とうと猛獣に手のひらを向けた。
「待つて！」

私は小さく声を上げて駆け寄り、そのまま彼の腕を掴んでいた。
本当に無意識の行動だった。

ジェラルドが手を上げたのを見た時、あの魔物が炎に飲み込まれ、
のた打ち回る光景が目の前に蘇ったのだ。あの時はどんな力を使う
か分からない魔物だった。でも、今私たちの目の前にいるのは魔物
じゃない。

「動くな」

彼は獣と睨み合ったまま低い声で鋭く言った。その声に怯んだ私
は掴んでいたジェラルドの腕を放した。

「魔法は使わないで……」

ジェラルドに向かってそれだけをなんとか囁ささやいてから、唸り声を
上げて私たちを警戒する獣に顔を向ける。

「邪魔をしてごめんなさい。ちょっと通るだけなの」

そつと声をかけながら心で強くイブを呼んだ。

見たところ大型の肉食獣だけれど、魔物でないことは明らかだっ
た。魔物は自然の摂理とは別次元おきてに存在する。でも、それ以外の動
物は皆自然の中で、その掟に従って生きている。自然を司る精霊の
言葉には耳を貸すはず。人間よりも鋭い感覚を持つ動物には精霊の
声が聞こえるはずだった。

お願い、イブ。あの子に伝えて。私たちにあの子を傷つけるつも
りはないんだって。

そう念じながら私はジェラルドよりも前に歩みを進めた。

「おい」

一歩前に足を踏み出すと、それ以上進むなというように上腕を強
く掴まれて後ろに引っ張られた。私はその強い力に片足を前に出し
たままの姿勢で動けなくなつた。
そんな私の横に静かにイブが現れる。

その瞬間、獣の耳が片方、ぴくつと動き、ジェラルドと睨み合っていた瞳を私に向けた。正確には私の横のイブに。黒い瞳は何かを感じ取ったようだった。そこにさっきまでの射るような目つきはもうない。

「あなたを傷つけるつもりはないの。お願い、通らせて」

もう一度言くと、隣のイブがすつと消えた。さあっと一陣の風が吹き抜ける。その風を顔に受けた獣は何かを諦めたかのように、私から眼をそらした。そしてそのまま音もなく体の向きを変え、藪の中に消えていった。

……良かった……。

ほっとして肩の力を抜く。腕はまだ強い力で掴まれたままだった。斜め後ろに顔を向けるとジェラルドと眼が合った。私を掴んでいた手はすぐに気がついたように離れた。

けれど、視線は外れなかった。射るような鋭い視線が今度は私に向けられていた。

怪しむような表情とその複雑な青色は、私に『今、何をした』と問いかけていた。

どのくらいの時間だったんだろう。

ほんの短い時間だったのかもしれない。けれど、永遠のように感じられた時間。

それに耐えられず、私は重なった視線を外した。

知られるわけにはいかない。でも、獣が殺されるのを見逃す事もできなかったの。

逸らした目を一瞬だけ閉じて、短く息を吸い込む。

「ね、大丈夫だったでしょう？」

私は努めて明るく声を出し、笑顔を作って後ろを振り返った。

「サーシャ！もう、やめてよ！心臓がいくつあっても足りないわ」
アイリスは安堵したように息をついてから言った。

「私、山の中に住んでたから、こういうことよくあったの」

「突然飛び出すから、あの動物と知り合いなのかと思ったよ」

ロレンスが呆れたように首を振りながら言う。

「そうだったらどうした？」

「別におかしくはないな」

「私もそう思うわ」

「そ、それって……」

その後はいつも通りの会話だった。

みんなの前で堂々と嘘についていることに胸が痛む。アイリスと

ロレンスはきつと私の力のことを知らない。

でも、彼は……？

不安を隠しながら笑顔で会話を続ける私は不自然に見えていないだろうか。話をしながらそんなことをぐるぐると考えた。

ジェラルドはそのまま何も言わなかった。

そして私もその日、彼の顔を見ることができなかった。

第二章 涙

宿で夕食を終えた後、私は一人暗い外に出た。

4人が泊まればいっぱいになってしまう小さな宿。その一階の食堂に全員でいると、どうしてもジェラルドの視線が気になるのだ。

彼は私に力があると疑っている。出会った時に聞かれて以来、その事については一度も聞かれていないけど、今でもきつと疑っている事に変わりはないはずだった。

再び目の前で使ってしまったイブの力。彼は何か気づいたのだろうか。

狭い食堂に一緒に居づらくて、私は外に逃げてきたのだ。

あの、すべてを見透かすような鋭い視線が苦手だった。他の二人と同じように、打ち解けて話ができたらいいなと思っている。でも、眼が合うと後ろめたい気持ちになってしまう。そして、上手く話せなくなる。

彼の考えていることが分からないから？

それとも、疑われていると知っているから？

私には、自分が彼の前で上手く振舞えない理由が分からなかった。でも、この力を打ち明ける事には抵抗がある。

……不幸を招く力……。

ため息をついて空を見上げる。曇っていて星が見えない。それに、空気も少し重いようだった。

……明日はきっと雨だね。

私はそのまま目を閉じて、しばらく風を感じていた。

「何をしている」

いきなり響いた声にびくっと体が反応した。振り向くと宿の外にジェラルドが立っていた。

「なにも……、少し、外の空気が吸いたくて」

近づいてくる彼に告げる。近づいてきたことで、暗くてよく見えなかった顔が見えるようになった。その顔は怒っていた。

どうして……。

「暗い中、一人で外をうろろするなと前にも言ったはずだ」

いつもより低い、空気を切り裂くように真っ直ぐ響く声。それを聞いた私は絶望的な気分になった。

……ジェラルドは私のことが嫌いなんだ。

何かが胸に込み上げてくるのと同時に、私は唐突に思いついた。それに気付いたとき、今までの彼の態度のすべてに説明がつく気がした。

だって、ジェラルドは私には笑ってくれない……。

そうだった。アイリスやロレンスと話している時は表情を和らげるのに、私と話す時はいつも硬い表情が怒ったような顔ばかり。それに、私は今まで彼に面倒をかけてばかりだ。

「聞いているのか」

彼はもう一度言った。

それを聞いたとたん、突然、涙が込み上げてきた。目が潤みだしたと思ったときにはもう涙が溢れ出していた。止める暇もなかった。いやだ、ここで泣いたらもっと嫌がられてしまう……。

これにはジェラルドもさすがに驚いたようだった。

「おい……」

「……ごっ、ごめんなさい……っ」

なんとかしぼり出した声は震えていた。でも、これ以上、涙を見せたくはなかった。とっさに手で目元を拭う。慌てたように近づいて来ようとする彼から後ずさり、気が付けば私は宿に向かって走り出していた。

部屋に戻ると、そのまま泣きながらベッドにうつぶせに倒れ込んだ。

ああ、なんてひどい事をしたんだろう……。

驚いたに違いない。泣くつもりなんてなかったのに。突然泣くなんて卑怯なんだろう。それでもう、本当に嫌われてしまう。

自分でも何が悲しくて涙が出るのか分からない。頭の中はぐちゃぐちゃだった。

私はそのまま気持ちが落ち着くまで泣き続けた。

落ち着いてみれば、ジェラルドの目の前で泣いてしまったという後悔と、逃げるように部屋に戻ってきた事への後悔だけが残り、私はもう、このままベッドに沈んで消えてしまいたいと思った。

第二章 雨：ジェラルド

外は薄暗く、厚い雲からは雨が降り出していた。

まだ彼女は起きて来てはいなかった。早くに目が覚めて先に朝食を済ませた俺はロレンスとアイリスが朝食を取る横で紅茶を飲みながら窓の外に目をやっていた。

この季節にしては珍しい雨だった。この時期、この国ではほぼ晴れの日が続く。降るといえば夕方、それもたまに思い出したように激しいスコールが降る程度だ。

彼女を泣かせたせいか……。

しとしと降る雨を見ながら、俺らしくもないことを考える。

朝の目覚めは最悪だった。女に泣かれるというのがこれほど後味の悪いものだとは知らなかった。しかも、俺にはその理由に見当もつかない。

これほどの長期間を女と共に行動するのは初めての事だ。今まで、長くて一晩。浅く適当な付き合いしかしてこなかった。それに相手は全く過ごしてきた環境が違う町の娘だ。その心の中で何を考えているかなど、想像できるはずがない。

それにしてもだ、突然泣き出されるとは思わなかった。

俺はそんなに彼女につらく当たっていたのだろうか。普通に接していたつもりだった。いや、普通以上に気を使っていたはずだ。

昨夜は目を離すなど言われた通り、外に出たまま戻ってこない娘を追いかけたただだった。村の中とはいえ暗くなると危ない。前のように魔物と睨み合って動けなくなっているかもしれないと心配した。

確かに、機会があれば獣に語りかけたことについて聞こうと考えていた。だが、彼女は俺がまだ何も言わないうちに泣き出したのだ。視線を向けるといつも怯えたような表情で眼を泳がす娘。紫の瞳が逸らされずに最後まで話を終えた事など今までに一度もない。

この罪悪感なんだ……。

俺はテーブルに肘をついたまま片手で両の目頭を押さえ、ため息をついていた。

「あ、朝からため息」

「どうした、目が疲れているのか」

呑気に声をかけてきた二人に思わず問いかけていた。

「俺はそんなに恐ろしい目つきをしているか」

「……ぶっ……」

アイリスが吹き出し、ロレンスは俺を見たまま固まった。その瞬間、自分の発言を後悔した。

「今のは忘れる。聞かなかったことにしてくれ」

まだ笑いを堪えた様子のアイリスが言い放った。

「サーシャね」

さすがに鋭い。

「ああ」

息をついて呟く。すると、少し真面目な顔を作った彼女が続けた。
「あの子は私たちと違って町の普通の女の子なのよ。軍人の無愛想な態度とか言い方に慣れてないのよ。今まで町にあなたみたいな人はいなかったの。……何か言われたの？」

「……いいや」

何も言われていない事は事実だ。昨晚の事は黙っておくことにした。女に泣かれたなど言える訳がない。

「君は特に目つきが鋭いと言われるからな。彼女も慣れないうちは戸惑うだろう。まあ、それが魅力的だというご令嬢もいたが」

ロレンスはにやりと笑って付け加えた。

「その情報に感謝する、ロレンス」

ロレンスを睨むと、アイリスは再び笑い出した。人の悩みを笑うとはいいい度胸をした奴らだ。

その時、娘が静かに食堂に入ってきた。

「おはよう」

二人が答えるのを聞きながら、俺は立ち上がった。

朝から昨日自分を泣かせた男の顔を見ながら食事をしたくはないだろう。

俺は彼女と入れ違いに食堂を出た。

朝からの雨は次第に強くなった。夕方になってもその雨が止む気配はない。

昨日はあれから、部屋でも泣いていたのだろうか。娘の目はいつもより心なしに腫れているようだった。

森を進む間、俺たちの間に会話は一切なく、視線が合うことも一度もなかった。前に立って歩きながら聞く彼女の声が今日はやけに耳に響いた。アイリスと話す時の明るく、楽しそうな声は俺と話をする彼女とは別人のようだった。

その声が俺に向けられることはない。俺に対しては、いつも慎重に言葉を選んで話すか、戸惑ったように口ごもるかのどちらかだった。

「止まないな」

隣を歩くロレンスが雨に濡れた髪をうっとおしそうにかき上げながら言う。

「ああ」

「今日は野宿だろう？」

「そうなるな。ついてない」

「彼女を泣かしたせいだ」

俺は小さく呟かれた言葉にぎょっとして隣を見た。したり顔の男がこちらを向いていた。

「俺は何もしていない」

「おっ、彼女が泣いた事については否定しないな」

「……………」

こういう話でこいつに太刀打ちできる奴がいるならば教えてほし

い。俺たちは後ろを歩く二人には聞こえないように小声でぼそぼそと話していた。雨の音でいつもよりは後ろに声も届きにくいはずだった。俺は無駄な抵抗は諦め、首を振りながら聞いた。

「どうして分かった」

「そうなのか。いつもより目が腫れてるから、カマをかけてみただけだったんだが……」

自分で墓穴を掘ったらしかった。くつと笑いながらロレンスは続けた。

「いや、何かがあったのは分かっていたんだ。今日の君たちは不自然すぎる。お互いを見ないのに痛いくらい意識し合っている。だが、女性を泣かすのは感心しないな」

「……ああ、そうだ。どうせ俺が悪い」

投げやりに言った俺をロレンスは珍しいものを見るかのような目で見た。

「君は無敵だと思っていたんだが、苦手なものがあつたんだな」

こいつは人をなんだと思っているのか。呆れて言い返す。

「あんな小娘が何を考えているかなんて分かるか」

「お互い慎重になりすぎてるんだ。彼女は君に嫌われているんじゃないかと思ってる」

そうなのか。俺は思ってもみない言葉に内心、驚いていた。

「普通の町娘だ。俺は俺なりに気を使っていたつもりだったんだが」
ロレンスは穏やかな笑みを浮かべて頷いた。

「サーシャはそれが自分によそよそしいと感じているみたいだ。普段と同じでいいんだよ」

どうしてこの男には彼女の心の内が分かるのか。その方法も、その結果が正しいものかどうか俺には判断できそうになかった。

しかし、今まで良かれと思ってしていた事が逆効果であつたならば……。間抜けな話だ。

「彼女は君が思っているよりも強いよ。君のその鋭い目つきにもすぐに慣れるさ」

黙り込んだ俺に、ロレンスは冗談っぽく言って笑った。

第二章 違い

夜になっても雨は降り続いていた。

パンとチーズ、乾燥させた果実の夕食を終え、焚き火を囲んだ私たちは木の根元に座って、それぞれ思い思いにくつろいでいた。

頭の上にはジェラルドの張った結界があった。3、4本の木の幹の間に張り巡らされた薄い光のような膜は、雨を音もなく弾いている。

やっぱり魔法って便利だな。私はぼんやりと考えた。これで夜の間、雨に濡れて風邪をひく心配をしなくてもいい。精霊の力があっても、その力を使って雨に濡れないようにする方法なんて今まで考えた事がなかった。どうすればいいんだろう。水に関係するからアクアに頼んでみればいいの？でも、そんなことしたらアクアのことだから他の精霊の手も借りて、雨自体を止ませてしまいそう。

それを想像してふっと息をもらす。

とりとめなくどうでもいいことを考えていないとまた泣いてしまいそうだった。

状況は絶望的だった。

朝、私が食堂に来るのを見るなり、ジェラルドは入れ違いに食堂を出て行ったのだ。

私とはもう顔も合わせたくない。

それが、私の昨日の行いに対する彼の答えに違いなかった。それを見るまでは泣いてしまった事について謝りたいと思っていた。不快な思いをさせてごめんなさいって。でも、もう無理。彼に私から話しかけるなんてとてもじゃないけどできない……。

また朝の出来事を思い出した私は抱えていた膝に顔を埋めた。

……もう、ダメ……。

こんなに悩むのって生まれて初めて。今までは大した変化のない日常を特に悩みもなくのんびり過ごしてきたのだ。旅が始まってか

ら、私は悩んでくよくよしてばかりのような気がする。

「サーシャ、ちょっと付き合ってくれない？」

アイリスの声に膝から顔を上げると、彼女はさっきまで脱いでいたはずのフードをまたかぶっていた。

「え、どこに行くの？」

こんな時間に今から？何をしに？外は雨なのに？私は不思議な提案に疑問がいつぱいだった。

「ちょっと、行ってくるわ。さ、あなたも立って」

アイリスは私の質問には答えずに残りの二人に声をかけると結果から出ようとした。

「おい、こんな時間に女だけじゃ危ない。明日にしろ」

「いいじゃない、何かあったら大声上げるわよ」

「それじゃ遅いだろう」

「あのね、私、魔術師よ。そこら辺の相手よりはよっぽど強いと思うけど」

やめさせようとするジェラルドに全く怯まずに答えるアイリス。

すごい。怖くないのかな。あんまり言う事聞かないと怒りそう…

…

心配になってちらっと見たジェラルドの目は据わっている。

「だ、」

「いいじゃないか」

何かを言おうとしたジェラルドを遮って、ロレンスが口を出した。
「二人でしたい話でもあるんだろう。行っておいで。サーシャは危なくなったら大声を上げるように」

そう言っただけで私たちを見て微笑んだ。

「さすが、ロレンス。話が分かるわ」

アイリスもそれにっこりすると、さ、行くわよと私の腕を引っ張った。おろおろしながら微笑みあう二人の顔を交互に見る。

みんなしてジェラルドを無視してもいいの？本当に怒っちゃうよ？でも、彼の前でそんなこと言えない。私は心の中では大声で反論

しながら、結局引つ張られるがままに結界を出た。

暗い森の中を手を光を浮かべたアイリスに続き、進んで行く。

「サーシャ、転ばないでよ」

「ちよつと、どこまで行くの?……なにをしに?」

聞くと「この辺でいっか」とつぶやいたアイリスが立ち止まって結界を張り始めた。

その中に私を押し込むと、彼女は倒れた木の幹に腰掛けた。私も並んで座る。

「さあ、なにがあつたの?」

話さない、という表情でアイリスは私の顔を覗き込んだ。突然始まつた話に戸惑う。

「なに?って何の話?」

「とぼけなくていいのよ、何かあつたんでしょう。ジェラルドと」

私はそれを聞いて愕然とした。

「どうして、どうして知ってるの?」

ふつと笑ってアイリスが言う。

「どうしてって。分かりやすいもの、あなたたち。見てたら絶対分かると思うけど。多分ロレンスも気づいていると思うわよ。だからさつきも協力してくれたんだろっし」

だから、だからにっこり笑い合つてたの!?

ロレンスにも気づかれていたなんて……。

ますます泣きたくなつた私は正直にアイリスに打ち明けた。

ジェラルドを怖いと思つてのこと。今まで彼のような人は見たことがなくて戸惑つてのこと。誰かを苦手だと思つたことなんてなくて、どうしていいのか分からないこと。そして、昨日の事を謝りたいと思つてのこと……。

つつかえながら話す私の話をアイリスは辛抱強く黙って聞いてく

れていた。そして、すべてを聞くと、口を開いた。

「サーシャ、ジェラルドと今まであなたが知っていた町の人が違うのは当たり前よ。あなたとジェラルドは初めて会ったんだから」

「どういうこと？」

「人はみんな違うつて事よ。違うのが当たり前なの。この世界にはいろんな見た目の人がいて、いろんな考えの人がいるの」

「違うのが当たり前……」

「そうよ。そりゃ住んでる所だったり、過ごしてきた環境が似ていたら少しは似るかもしれない。でもやっぱり違うのよ。この人はどうして私と同じじゃないんだろうって考えるのは間違ってるわ。あなたとジェラルドは今まで全く違う環境で過ごしてきたでしょ。だから今はまだ理解できなくなつて、近づきにくかつたっていいと思うの」

「ジェラルドは……私の事が嫌いなんじゃないの？」

「嫌いだったらきつと、この旅にあなたを連れては来なかったわ。あなたが今まで出逢つたことのある人とは違うつてだけよ。それだけ。そのうち慣れるし、理解できるようにもなるわ。まあ、確かに見た目はちよつと怖いかもしれないけど、悪い人じゃないわ」

アイリスは最後にいたずらっぽく笑うと、あ、それにちよつと無愛想よねと付け加えた。

私とは違うだけ……。

それを意識するだけで心の中のものもややしたものが晴れていくような気がした。彼は元から誰とも違つたというだけ。誰かと似ているところを探していたのが間違いだった。

言われてみれば簡単な事。でもきつと、回りを見渡す余裕のなかった私一人では気づけなかった。

「アイリスの言うとおりだったわ。私、今まで出逢つたことのある人たちと比べてばかりいたような気がする」

アイリスはそれを聞くと私の顔を覗き込んでにっこり微笑んだ。

「どう？これでどうにかなりそう？」

「うん、頑張ってみる。……ありがとう」

これからは、考え方を変えてみよう。

私は今、ここにアイリスがいることに心から感謝した。

第二章 距離3

朝、昨夜の雨で水滴のついた緑の草木は朝日を浴びてきらきらと輝いていた。

…… ああ、なんだか久しぶりに晴れたような気がする。

その眩しさに目を細めて周りを見渡す。少しもやがかかったような森の朝は本当に静かで綺麗だ。遠くから聞こえるのは鳥のさえずりだけ。他の三人はまだ眠っているようだった。私は起こしてしまわないようにそっと立ち上がり境界の外に出た。

下草もまだしっとりしていて、歩くとブーツに水滴が跳ねる。昨日は地面が濡れていたから座って寝たせいで体が少し痛い。そう思いながら、私は爽やかな空気の中で思いっきり背伸びをした。

姿勢を戻し、はあと深呼吸をした時、後ろに気配を感じ振り返った。

すると、いつの間にか立ち上がって私のほうを向いていたジェラルドと眼が合った。

「……………」

見つめ合ったままお互いに何も言わずに時間だけが過ぎていく。いつものように、何を思っているのか分からない表情。そして鋭い眼差し。

そう、彼は出会った時からずっとこうだったのだ。

それに気づかなかったのは私の方……。

大丈夫。今はまだ理解できなくても、近づきにくくても。

アイリスの言葉を頭の中で反芻する。そう考えると心が落ち着く気がした。

少しずつでいいの。そのうち慣れて普通に接することができるようになる。

だからまずは謝らなくちゃ……。

そう決心して口を開こうとしたその時、ジェラルドがずっと一度私から目をそらした。そしてもう一度私を見ると言った。

「少し話がある」

彼はそれだけ言うと森の奥へ向かって歩き出した。
なに……？

私は内心ものすごく焦りながらその後を追いかけた。しばらくの間、私たちは無言で道なき道を進んだ。木がまばらに生えた少し開けたところに出ると、その人は振り返っておもむろに口を開いた。

「すまなかった」

その言葉を聞いた私は頭をぶつけたような衝撃に襲われた。
どうして……？

どうしてジェラルドが謝るの。悪いのは私の方なのに……。
私は慌てて首を振って答えた。

「そんな、私が急に泣き出したのがいけないのに……」
言おうとしていた言葉を先に言われてしまった私は頭が真っ白になっ
てしまっていた。最後の方は消え入りそうな返事だった。

それなのに、彼は静かに首を振って答えた。

「いや、女を泣かしたんだ。男が悪いに決まっている。とにかく、
悪かった」

真面目な表情と真っ直ぐで真摯な眼が私に向けられていた。

……ああ、この人は怖い人なんかじゃない……。

ずとんと胸に落ちてくる感覚があった。真っ直ぐで強い彼の眼を
正面から見つめて、私は初めてそう思えた。

「私も、ごめんなさい」

ジェラルドの目を見返して答える。

嫌な思いをさせて、ごめんなさい。今まで分からなくてごめんな

さい……。この想いは上手く伝わるだろうか。

視線を外さない私に何を思ったのか。ジェラルドは鼻を鳴らすと「戻るか」と言って私の横をすり抜けて元来た道を歩き出した。

大丈夫、これからはもう眼をそらさずに。きつともっと上手にく…………。

先を立つて歩く彼の広い背中を見つめながら、私は心がゆつくりと晴れていくのを感じていた。

二日後の昼下がり、道の両端は急に木々が少なくなりだした。しばらくして、視界が開けた私たちの眼下には城壁に囲まれた町が広がっていた。

「わぁ！」

「ほんと、大きな町ね」

隣でアイリスも感心したような声を上げた。

「オルディアだよ。大陸の南の交差点だ」

「エルンよりも大きいの？」

「いいや、町の大きさ自体はエルンの方が大きい。でも、ここはどの国にも属していない独立した町なんだ。だから様々な国の人や物、情報が集まってくる。この町で手に入らないものはないと言われているくらいだ」

ロレンスの説明によると、どこにも属さない町だからこそ、人々は自由に出入りでき、物や情報が集まるのだそうだ。そして地理的にも大陸の南側の中心に位置するせいで、貿易などで重要な役割を果たしているらしい。

「この町にしばらく滞在する」

「そうなの？」

そう言ったジェラルドに、この町も通り過ぎるだけだと思っていた私は聞き返した。

彼とはあの日以来、何かが大きく変わったというわけではなかった。

ジェラルドの話し方は相変わらずぶっきらぼうで、無表情なのも前と同じ。そもそも、あまりしゃべらないし。

でも、私は少しずつ変わることにしたのだ。丁寧な言葉遣いをやめて、なるべくみんなと同じように接する事にした。

そう、そうするようになって気づいたのは、笑っていなかったのは私の方だったということ。今までの自分の態度を思い返して、それでも謝ってくれた彼に本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

今までだったら、ジェラルドと話すといえば謝るか、お礼を言う時だけだった。けれど、アイリスを見習ってジェラルドにも質問してみたり、話を振ってみたりすることにしたのだ。

彼に対する苦手意識が全く消えたわけじゃない。今でもその鋭い目が合うと、落ち着かない気分になる。

でも、何かを聞けばジェラルドはちゃんと答えてくれるって分かったのだ。これは大きな進歩だった。その事を知っただけで、話しかけるのがずっと楽になった。

「ああ、ここなら情報を集めて歩き回っても目立たない。人の出入りが激しいからな」

ほら、今もちゃんと答えてくれた。

私は分かったと言う代わりに、私を見下ろす彼に頷いて笑って見せた。

こんな町にしばらくいられるなんて、すごく楽しみだ。

エルンでは、結局町を見て歩くことができなかったのだ。でも、ここはエルン以上にたくさんの物と人がいる町。きっと、初めて見るものばかりに違いない。

心を支配していた大きな悩みが消えた私は、オルディアの町への期待に胸を躍らせていた。

第二章 距離3（後書き）

やっと、とんでもないすれ違いの日々から抜け出した二人。

でも、ジェラルドの本当の意味での苦悩はこれから始まるのです（笑

この長い話を読んでくださっている方、本当にありがとうございました！
す！！

第二章 オルディア

私たちはまず、宿を探すことになった。

城壁の中に入るとそこには見渡す限り、店が所狭しと並んでいた。町全体が市場だった。

城壁の近くではテントや簡素な作りの屋台で様々な物が売られている。城壁辺りで物を売っている人たちはみんな別の国から物売りに来た人たちらしい。

町の人々が住んでいるのは中心地だそうで、家はすべて灰白色の壁に赤茶色の屋根で統一されていた。町の中心に行くにつれて、建物はどんどん背が高くなった。高いものは5、6階建てくらいはありそう。隙間なく建てられた家の一階はどこもお店になっている。狭い路地までせり出すように商品が並べられていた。

同じ町でも全然違う。私は目を丸くした。整った印象を受けたエルンとは違い、ごみごみとして騒がしく、でも人の活気に溢れていた。

エルンでは町に豪華な馬車や貴族らしいドレスを着た人たちがいたけれど、そんな人は見当たらない。ここの人々は様々な服装をしていた。大陸中から人が集まっているのだ。旅人らしい人たちも多く見られた。

「サーシャ、ぼんやりしなで。はぐれると危ないわ」

「危ないの？」

アイリスに声をかけられて、慌てて後を追う。

「ええ、ここはあまり治安が良くない町なのよ。城壁はあるけど誰でも入れるでしょう？」

確かに、さつき城壁を通る時は国境を越えたときみたいに身分の確認をされたりはしなかった。それに男の人たちはみんな腰に短剣をさしている。

「ここは商人の町で、男の町なのよ」

「男の町？」

私は聞き返しながら、辺りを見回してみると男の人が圧倒的に多いことに気づいた。

「女の人はいないの？」

「遠くから商品を売りに来たり、仕入れに来たりするのが男ばかりだからよ。町の女の人たちは中心街から出ないんじゃないかしら」

「そうなの……」

アイリスの言うとおりだった。こんなにもたくさんの人がいるのに旅の格好をした女の人はほとんど見かけない。それに、この辺りにいる女の人は町に住んでいる人だ。町の女の人は私の住んでいた町とあまり変わらない格好をしているからすぐに分かる。

「ここにしよう。空きがあるかを聞いてくる」

ジェラルドが建物の前で立ち止まった。にぎやかな通りの裏のこの辺の家は一階にお店がなかった。そういう家には大体、宿の看板がかかっている。

しばらくして、私たちは宿の3階に案内された。町の宿だから、大きな食堂などがついているのかと思ったら、泊まる部屋を貸してくれるだけだそうだ。

でも、リビングに寝室二つが繋がった大きな部屋だった。浴室もついているし、小さなキッチンもある。3階全体が一つの家のような造りで、そこを四人だけで使える。

大人数や家族向けの宿なんだってロレンスが教えてくれた。このの方が普通の宿に泊まってみんなが別々の部屋にいるよりも安全だからここにしたんだって。

「少し休んだら町を見てから食事に行こう。それまでに二人は着替えてくれ」

ジェラルドは私とアイリスを見て言った。

「そうね。この格好じゃ目立つわね」

町を見に行く。私はもう聞いただけでわくわくしてしまった。

「サーシャはどこでも楽しそうね」

寢室の一つに入ると、荷物を置いたアイリスが私に呆れたように言った。

「だって、本当に楽しいもの。仕方ないじゃない」

頬が緩んでしまうのを止められない。アイリスもここに来るのは初めてのはずなのに、こんなに落ち着いていられるのが信じられない。

私たちは先にお風呂に入ってから、膝下までのワンピースとブラウスに着替えた。もちろん靴も変えた。この普通の格好をするのがなんだかすごく久しぶりのような気がした。足元が軽いせいで気分が浮き立つ。

……髪を編もうかな……。

私は自分の髪を見て思いついた。山を歩く間はずっと、邪魔にならないように後ろで髪を一つに結んでいただけだった。今日はなんだか久しぶりにおしゃれしたい気分だ。

「私こんな格好初めてだわ。ねえ、変じゃない？」

アイリスの言葉に彼女を振り返る。ベージュのワンピースは胸元で皮の紐が交差して結べるようになっていて、腰から下はふんわりと広がっている。その下には長袖の白い麻のブラウス。

「すごく似合ってるわよ」

不安そうなアイリスに、にっこりして言う。彼女が魔術師だなんて絶対に誰も思わない。

「ねえ、髪編んであげようか？」

私はアイリスの流れるように真っ直ぐな髪を見て思った。

うん、アイリスが髪を結んでいるのは見たことがないけど、きつと似合う。

「サーシャが？」

「ね、いいでしょう？私、ずっとおばあちゃんと二人だったし、こっとういのしてみたかったの」

それを聞くとアイリスは笑って、いいわよと言ってくれた。

部屋を出ると、リビングでは着替えた二人がすっかり寛くつろいでいた。そのいつもとは違う様子に驚く。

二人はまさに『寛いでいます』という格好だった。ジェラルドはソファ―に深く座って両手を頭の後ろで組み、靴を脱いだ両足を伸ばしてテーブルの上に上げていたし、ロレンスもゆったりとソファ―の背に体を預けて足を組んでいた。

こんなふうに関を抜いた二人は見たことがなかった。今まで言わなかっただけで、本当はすごく疲れていたの？

私は口が半開きのままアイリスを見ると彼女は二人の方を向いて眉をひそめていた。そして私の視線に気づくと、こっちを向いて肩をすくめてみせた。

私たちが見合わせていた顔を二人の方に戻すと、ロレンスはいつものように姿勢を正していた。顔だけをこっちに向けて何事もなかったかのように言う。

「終わった？」

「ええ」

アイリスが答えた。私たちは並んで部屋の扉の前に立つたまま、二人とは微妙な距離を保っていた。

なんだか、変な空気だ。ジェラルドも私たちのほうを向いてはい。でも足は相変わらずテーブルに乗ったまま。

お行儀が悪い……。

私はおばあちゃんみたいな事を思ったけど、それをジェラルドには言えそうになかった。

ロレンスがふっと笑った。

「髪も結ったんだね……。二人とも似合ってるよ」

それを聞いて、私は二人が待ちくたびれたのかもしれないと気づいた。ソファ―に歩み寄りながら告げる。

「待たせちゃった？ごめんなさい」

「いいや」

ロレンスは優しく笑って答えてくれた。でも、絶対に嘘だ。だって、そうじゃないと二人揃ってあんな格好にはならない。

私とアイリスはあの後、舞踏会のドレスや髪型の話や町の服装や髪型などをお互いに教えあったりして話が弾んでいたのだ。

「気にしなくていいのよ、サーシャ。男は待つものなんだから」

アイリスも近づいてきてそのままソファーに腰を下ろした。当然だという顔をしている。アイリスってこういう時は本当にお嬢様なんだなって思う。

ジェラルドはアイリスが側に座ってもまだ足を上げたままだった。私はどうしてもそれが気になって仕方がなかった。

……大きな足……。

「そつだよ。お嬢さん方、何か飲む？」

ロレンスもアイリスに同意を示した。二人は全然違うようでやっぱりどこか似ているのだ。

「私はいいわ。先に町を見るんでしょう？」

「町を見るのは明日でもいい。別に急がない」

今まで黙っていたジェラルドが答えた。

「私はいいわよ。サーシャは？」

「私も大丈夫よ」

そうアイリスに答えて、何気なく顔を戻すとジェラルドと目が合った。彼は特に表情を変えずに、私から視線を外す。伸ばしていた足を下ろし、靴を履くと立ち上がった。

「行くか」

第二章 オルディア（後書き）

どうでもいい後書き

初めてカタカナ＆架空の町の名前がそのままサブタイトルに。色々な意味で重要な町です。

イメージはイスラム世界のスーク（常設市場）。

第二章 短剣

夕方の町は人で溢れかえっていた。

狭い路地は行きかう人々と時々通るたくさんの荷物を載せた馬車とで、気をつけないとすぐにはぐれてしまいそうだった。

迷路のように入り組んだ通り。きっと、迷子になったら宿に戻れない。

私は両側のお店を見て歩くよりも、前に見えるジェラルドの頭を追うので精一杯だった。彼は歩くのが早い。宿を出た時はジェラルドのすぐ後ろを歩いていたはずなのに、いつの間にか私たちの間には知らない人がいて、今はジェラルドの頭しか見えなくなってしまう。ジェラルドの背が高くてよかった。

そして、私は時々振り返って少し後ろにいるロレンスの姿も確認していた。ロレンスとアイリスは並んでのんびりとしやべりながら歩いているので、ちゃんとして来ているか心配になってしまった。

私が心配しなくても大丈夫なんだろうけど……。気になるものは仕方がない。

少し先のお店の前でジェラルドが立ち止まったのが見えた。

何か買うのかな……？

近くに行くと紐やロープなどを売っている所だと分かった。髭を生やした人のよさそうなおじさんがジェラルドにいろいろな種類のロープを見せている。細い紐のようなものから、ロープをさらに束ねて作ったすごく太いものもある。色もいろいろ。

ロープを買うの？何に使うんだろう？

おじさんの話を聞いているジェラルドの横で私は黙って店を眺めていた。

「サーシャ！」

声がした方を向くと、二軒ほど離れた店の前でロレンスが手招き

している。

ちらとジェラルドを見ると、なんだか難しい話をしているようだったので私は何も言わずにロレンスのところへ向かうことにした。

「なあに？」

そこで売っているのは装飾品や小さな雑貨だった。

「これ、何でできてるの……？」

「ロカイユだよ。見たことないだろう？ 貝殻でできているんだ」

「貝殻って、海にある？」

「そうだよ」

私は海を見たことがない。本で読んだ事があるだけだった。貝殻って思っていたよりも変わった形をしている。それに色はすごく綺麗。白やピンクに淡い黄色、複雑な色に光輝く青や緑。

海ってすごい……。

「お嬢さん、手にとって見るかい」

店のおじさんに手渡されたのは金のチェーンがついた丸いネックレス。その貝でできたトップにはあらゆる色が詰め込まれていた。複雑な輝きで見る角度によって色が変わる。

「すごい、綺麗……」

「虹みたいね」

近くに來たアイリスが言う。するとおじさんが大げさに感心したような表情を作った。

「いやあ、お嬢さん、よく知っているな。これは虹貝と言われているんだよ。お嬢さんは虹を見たことがあるなんて言わないでくれよ？」

「そんなわけないじゃない。話を聞いたことがあるだけよ」

笑い合っているおじさんとアイリスに声をかけた。

「虹って、あの伝説の？」

「あら、伝説って言っても作り話じゃないのよ」

「そうだぞ。昔は何度か見られたのは本当の話さ。で、この貝は虹の輝きを写し取ったと言われているんだよ」

「そうなの……」

改めてネックレスに目を落とす。虹の伝説は誰でも知っている、昔話のようなものだ。空に架かる大きな光のアーチ。その光は7色とか8色とか言われているけど詳しくはよく分からない。だって、見たことがある人なんていないから。昔、何度か虹が架かったことがあるとは言われているけど、その虹がどうして出来たのかも分からない。

アイリスが作り話じゃないなんて言うのは意外だった。

虹が埋め込まれたみたいだな金のネックレス。私はその複雑な輝きに見とれてしまっていた。

「いいもんだろう？上等なやつだ。俺がミコスから仕入れたんだよ」
おじさんは自慢げに言ったけど、私にはそれがどこなのか分からない。

「それって遠いところ？」

「ああ、ずーっと北の海のある町さ。この貝はな」
北だったら、もしかしたらこれから行くところかもしれない。海を見るのがますます楽しみになる。

おじさんの自慢話を聞いていると、ジェラルドがやってきた。手に持った袋はさっきよりふくらんでいる。ロープ買ったみたいだ。
「欲しいのか？」

ジェラルドは私の手元を見下ろして唐突に言った。私は目を丸くして、慌てて首を横に振った。

綺麗だけど、欲しいわけじゃない。装飾品っていつ使えばいいのかわく分らないし、ネックレスだったら私にはおばあちゃんのタンスの中から見つけたのがある。残念そうなおじさんにお礼を言つてネックレスを返した。

「いらない？」

ロレンスも聞いてきた。

「うん、いらないの。ありがとう」

二人は買ってくれようとしているの？でも、どうして？

その気持ちは嬉しく思うけど、高そうなものだし、私には買ってもらう理由がない。ジェラルドとロレンスは一瞬だけ、無表情のまま顔を見合わせた。

それからジェラルドはすぐに私たちを見て「行くぞ」と声をかけた。

その後も色々な店の前で立ち止まり、買い物をした。

ここで買っておかないとこれ以降の町では手に入らない事の方が多そうだ。私は時々アイリスと話しながら、ジェラルドとロレンスの後について歩いていただけだった。歩くだけでも大変な人込みだけど、珍しいものが多くて飽きることはなかった。

それから私たちは短剣を扱っている店に立ち寄った。

壁という壁に剣が飾られている。短剣とは言っても太くて大きめのものからすごく豪華な宝石がついた飾り物のようなものまでたくさん種類がある。今までと同じく店をほんやり眺めていると、またロレンスに呼ばれた。

店の前の二人に近づくと、ジェラルドに短剣を差し出された。

「持ってみろ」

「えっ？」

思わず逃げ腰になった。

私のを買うの？そういう疑問を込めた目でジェラルドを見上げた。「持っていないだろう。これから必要になるかもしれない。護身用に一つ持っておけ」

アイリスも持ってるのかな。そう思い、アイリスの方を見る。

「私は自分の持ってるわよ。サーシャも買っておいたほうがいいわ」アイリスは真面目な顔をして言った。

そう……。

差し出された剣を受け取る。柄はあまり太くなくて意外に手になじんだ。多分、鹿とか牛の角。硬い皮で作られた鞘なまやには美しい模様が彫られている。でも、繊細な見た目と大きさのわりにはずっしり

と重い。

「抜いてみる」

言われて恐る恐る引っ張ってみる。けれど、中で引っかかっているような感じがして抜けない。ぐっと力を込めてもう一度引っ張ると、今度はあっけないほど簡単に抜けた。鈍い光を放つ刃が勢いよく鞘から飛び出した。

その勢いに驚く。刃に映る自分の顔が強張っているのが分かった。「気をつけて」

ロレンスが私を覗き込むようにして言った。私はそれに頷いて答えながら刃を見つめた。

刃先はすごく鋭い。磨き込まれていてよく切れそうだった。

私は思わず顔をしかめた。

これを私が持つなんて、危ない……。

でも、そう思い気づく。ジェラルドやこの町の男の人はみんな腰に短剣を下げているのだ。それも今私が持っているよりも二周り以上は大きなものを。ロレンスはもっと長い剣を持っている。

私の持っている剣でだって誰かを傷つけるには十分だった。ううん、きつと殺すこともできる……。

慎重に剣を鞘に戻す。そしてそれをジェラルドに返そうと見上げると目が合った。ずっと私を見ていたみたいだった。

「これをもらう」

ジェラルドはお店の人にお金を払った。

「今は俺が持つておくぞ」

それだけ言うと、私の返事を待たずに自分の背負っていた袋に短剣をしまった。

第二章 恐怖1

暗くなる前にお店に入り、食事をするようになった。

小さな食堂でテーブルは10卓ほどしかなく、私たちのテーブル以外もすべて埋まっている。

なんだか微笑ましい……。

実は反対側に見える席に若い恋人同士が座っているのだ。それがずっと気になっていた。可愛い感じの女の子は向かいに座る男の子を見てすごく楽しそうにおしゃべりしている。

彼が何かを言ったたびにすごく幸せそうに、嬉しそうに笑うのだ。目がきらきらしていて、彼の事がすごく好きなんだなっていうのが分かる。

見ている私まで幸せな気分。

ああいうのにすごく憧れる。恋してみたいなあ。どんな感じなんだろう。

それからふと、私たちって周りからはどう見えるんだろうかと考えた。

周りはまだ早い時間なせいか、恋人同士や子供連れの家族がほとんどだった。

男女が四人って珍しいのかも。しかも、私たちは見た目も雰囲気もばらばら。家族には見えないだろうし……。やっぱり旅の仲間……？

終わりそうにない考えは料理がやってきたことで中断された。

珍しい料理が次々とテーブルに並ぶ。揚げたパンと詰め物をした鶉うずのシチュー、トマトとチーズの載った綺麗な彩りのサラダにたくさんいろどのフルーツ。すごいご馳走だ。

男性二人の前にはビンが置かれた。

「お酒？」

いつもみんなが飲んでいる葡萄酒じゃない。透明だ。

「見たことがない酒ね、なに？」

アイリスも初めて見るらしい。

「アラックだ。この辺りで有名な酒だ」

ジェラルドの答えにアイリスが興味を示した。

「ちよつともらつていい？」

「やめておけ。強いぞ」

そう言いながらもジェラルドはアイリスにグラスを渡している。

この中でお酒を飲まないのは私だけなのだ。アイリスも二人と一緒に飲んでいるのを見たことがある。

「ぐっ……っ！」

お酒を口にしたアイリスが変な声を出してグラスを離す。

「ちよ、ちよつと、大丈夫？」

私は慌てて背中をさすった。

しばらく咳き込んだアイリスが涙目でジェラルドを睨んだ。

「……何よこれ、ひどい！」

「言つただらう。強いって」

笑いを堪えるような表情のジェラルド。

絶対、こうなるって分かつていてやつたんだ……。

あまりの意外さに私は目をぱちぱちさせてアイリスとジェラルドを交互に見ていた。

「これは本当は水で割って飲むんだよ」

口元を押さえて、やっぱり笑いを堪えていたロレンスが言う。それを聞いて彼も分かっていたんだと知った。

なんてこと……！

「そうだと思つたわ！なんで二人はそのまま飲んでるのよ！？」

アイリスは怒りが収まらないらしくった。おかしいんじゃないの、とぶつぶつ言っている。

「水で割って飲むか？」

ジェラルドは微妙に質問をはぐらかした。水で割って飲むものをそのまま飲んでいるなんて、二人はどれだけ強いんだろう。

「いらないわ。お酒についてはもう絶対信じないんだから」

アイリスは完全に頭にきたみたいだ。

私はなんだか少し楽しそうな二人を見て驚きだった。こんな一面もあるなんて。今日は二人の新しい一面を見てばかりだ。

それにしても……。

まだぶつぶつ怒っているアイリスを見て、私もお酒については二人を信用しないでおこうと決めた。

それからゆっくりと食事をした私たちは暗くなる前に宿に戻ろうと店を出た。

通りは店にはいる前よりも混雑していた。日暮れ時。家に帰る人が多いんだろう。

私は相変わらずジェラルドの頭を必死に追いかけていた。

その時、肩を叩かれたような気がして立ち止まった。振り返ると知らない男の人が私を見下ろしていた。

……なに？呼ばれたの？

その人は私を見たまま何も言わない。立ち止まったまま動かない。私たちは明らかに他の通行人の邪魔だった。

……気のせい？

でも、その人は私を見ているし、まだ立ち止まったまま。聞いてみようと口を開きかけた時、突然、後ろから伸びてきた手が私の口を塞いだ。

……！？

突然の事で何が起こったのか分からない。腕はすごい力で私を後ろに引っ張り、頭が勢いよく固いものにぶつかった。一瞬、くらつと視界が歪んだ。

頭に当たったのは別の男の人の体だった。後ろから口を塞がれて体を抱え込まれたのだ。そのことに気づいた私は声を上げて抵抗しようとした。

「……んー…っ、んんー……！」

離れようと手を振り回しても腕はびくともしなかった。暴れる私を見てさつきまで私を見下ろしていた人がにやつと笑った。

この人も……？

それに気づいて目を見開く。必死の抵抗はなんの意味もなさなかった。私はものすごい力で抱え込まれたまま、引きずられるようにして近くの薄暗い路地へと連れ込まれた。

一日中建物の影で光の届かない袋小路。

そこに連れ込まれた私は放り投げられるように奥に突き飛ばされた。よろめき、奥の壁に手について体を支える。なんとか転ばずに済んだ。

男の人は三人だった。はつと振り返ると二人がニヤニヤしながら近づいて来る。

後ろは壁。逃げるには前しかない。

でも……。

近づいて来る二人を見た私は、今までに感じたことのない種類の恐怖を覚えた。

心臓をぎゅっと掴まれたような恐怖。体が凍りついたように寒気を感じ、足がすくんで動けそうにない。壁に後手についてなんとか体を支えている状態だった。

口を塞がれているわけでもないのに、震える唇からは細い息を漏らすことしかできない。

「おとなしいな。こんなに怯えちまって、可哀想に」

そう言うとな人が顔に向かって手を伸ばしてきた。

……嫌っ……！！

とつさに顔を逸らしてぎゅっと目をつぶり、体を強張らせた。

でも、何も起きない。

恐る恐る目を開けるとその人は暴れたせいで解れた髪ほつを手にとっていた。髪を太い指に絡ませて弄ぶ。もてあそ

「へへっ」

男は目が合うとにやりと嫌らしく笑った。まるで私の反応を楽しんでいるかのように。

背筋にぞつと寒気が走った。

……何をされるの？

ふと、視界の端に男が腰にさげている大きな剣が飛び込んできた。さつき見た刃の鈍い輝きを思い出して更に恐怖する。あの短剣とは比べ物にならないくらい大きな半月刀……。

震えることしかできない私を見てもう片方の男が近づいてきて、腕を掴んだ。

「ちよつとくらい抵抗してもらわなきゃ面白くねえな」

すごい力で引つ張られて奥から引きずり出された。そのまま遊ばれるように狭い路地を引きずり回される。

「や、嫌っ！！」

男に触れられた瞬間、嘘のように声が出て、体が動くようになった。掴まれた腕を外そうと必死に抵抗する。でも、相手はびくともしない。無駄な抵抗。男の思惑通りだった。

その時、がつという不気味な音が路地に響いた。音が聞こえたのと同時に、私を引きずっていた男が動きを止めた。私も男たちも一斉に音の方へ目を向けていた。

「ジェラルド……」

静寂の中、聞こえたのは自分の呟きだった。私はその瞬間、彼の名前を呼ぶのは初めてだ、と場違いな事を思った。

第二章 恐怖1（後書き）

どうでもいい後書き

（勝手にシリーズ化決定）

登場したお酒、アラクは実在します。アルコール度数は高いものになると50度を超えるものも。水で割ると白く濁る事で有名かもしれません。

二人が飲んでいたアラクの度数がどれほどかはご想像にお任せします（笑

第二章 安堵1：ジェラルド

「ねえ、サーシャがいないわ!」

……まさか。さつきまでは後ろにいたはずだ。

そう思い、振り返るとアイリスとロレンスが人を押しのけて近づいてきた。

「まずいな」

ロレンスが言う。アイリスは一気に真っ青になった。辺りは大分暗くなっている。だがまだそれほど遠くへは行っていないはずだった。

「先に戻っていてくれ。探して来る」

「私たちも……」

彼女の言いたいことは分かっている。しかし、危ない。

「この町は暗くなると治安が悪化する。戻れ」

俺はそれだけ言うとは返事を待たず、来た道を引き返した。町が完全に闇に飲み込まれる前に家に戻ろうとする者、店をたたもつとする者で狭い通りは今が一番混雑していた。

それにしても迂闊だった。すぐ後ろについて来ているのを確認しながら進んでいたのだ。いなくなつたのに声もしなかった。

……まさかどこかでグーテンベルクだと気づかれたのか。

嫌な予感が頭によぎる。

はぐれただけかもしれないとも思ったが、道をしばらく辿つても娘の姿はなかった。そもそも、こんな時間に一人でうろつく娘がいれば目立っているはずだ。そう考え、店の者に聞きながら進んだがそのような娘を見たという者はいなかった。

連れ込むとしたら……路地か……。

見える限り周りを見渡し、目ぼしい路地を探す。

すると一つが目についた。そこだけ人の出入りがない。上の建物を確認すると袋小路のようだった。

人を押しのけて進むと路地を塞ぐように男が立っているのが見えた。何気ない様子を装っているが辺りを警戒している様子のはつきりと分かった。

俺は男に近づいた。近づくと、男は目に見えてうるたえた。

「ここは行き止まりですぜ、旦那」

止めようとする背の低い男の後ろを覗き込むと、暗い路地の奥に茶色い髪とグレーの服が確認できた。今日娘が着ていたものに間違いなかった。

彼女を見つけた瞬間、とてつもない安堵と怒りが同時に湧き上がった。

「なにか御用で」

俺は何かを言いかけた男の顔を殴り飛ばした。

後ろを歩いていた男たちが驚き、遠ざかる。

正しい判断だな。こういう時は関わらないのが一番安全だ。そんな事を思った頭の中は冷え切っていた。

殴られた男はそのまま後ろにとんで、路地の壁に後頭部を打ちつけて崩れ落ちた。まあ死にはしないだろう。一応手加減はしたつもりだ。

そのまま奥に足を進めると、二人の男が振り向いた。

女一人に三人がかりとは卑怯な奴らだ。

「ジェラルド……」

娘が震える声で呟いたのが聞こえた。

蒼白な顔で小さくなつて震えている。彼女が俺の名前を呼ぶのを初めて聞く気がした。

怖かっただろう。その呟きに胸が締め付けられた。

「手を離せ」

男の一人はまだ娘の腕を掴んだままだった。汚い手で触れるな。

俺は本気の殺意を込めて男たちを睨んだ。

「なんだ、旦那の女だったのか」

男は焦ったように手を離し、言い訳を始めた。

「旦那のもんだって知ってたなら手は出さなかったよ、なあ」

俺は何も言わずに睨んだままだった。こいつらも殴ってやるうか。だが男三人にこの狭い路地に寝られても邪魔なだけだ。腰に下げた剣は見せかけだけのようだった。男共は剣を抜こうともしない。

「失せろ」

その言葉を待っていたかのように、二人は入り口で伸びている男を引きずってそそくさと逃げて行った。

娘はずっと震えていた。

俺は少しだけ近づいて様子を窺^{うかが}った。服に乱れがないのを確認して胸を撫で下ろす。彼女は掴まれていた方の腕を反対の手で押さえ、自分の体を抱くような格好で俯いていた。暗いせいで表情までは見えない。

「怪我はないか？」

娘は返事の代わりにかすかに頷いた。押さえている腕はそのままだった。長袖の服を着ているせいで外からは怪我をしているのかは分からない。俺はもう少し近づいた。

「腕は？」

聞くと彼女は はつとしたような様子で自分の腕を放した。

「大丈夫」

俯いていた顔をあげて小さく答えた。薄紅色の唇が微かに震え、怯えた硬い表情をしている。泣いているのかもしれないと思ったがそうではないようだった。

町娘の服を着て髪を結った彼女は年相応に見えた。今日、部屋から出てきたのを見た時、子供っぽいと思っていた娘が突然大人びて見えたことを思い出した。

乱暴に扱われたのか、その綺麗に編み込まれていた髪が乱れていた。後れ毛がいく束か肩に落ちている。飴色の柔らかそうな髪。俺はそれを見て艶かしいと思った。震えている娘を前にして抱くには相応しくない感情だった。

所詮は俺も男だということだった。さっきの奴らと抱く感情はなんら変わらない。ただ、俺はあいつらよりも自制が効くというだけだ。

恐ろしい目に合わされたのと同じ男に近づかれるのは嫌だろうと、俺はさつきから彼女に近づけないでいた。

「戻るか？」

「……みんなは？」

「先に宿に戻ってもらった」

娘は短く息を漏らした。そして気づいたように頭に手をやる。髪の毛の乱れに気づいたようだった。顔がみるみる曇っていく。

この出来事を二人には知られたくないのだろう。俺は魔法で小さな手鏡を取り出して彼女に差し出した。

「……ありがとう」

彼女は鏡を覗き込むと、器用に髪を直した。肩に落ちていた髪はピンで元の場所に収められていく。髪はあつという間にもとの形に戻った。俺は鏡をしまった。

「行くか」

「……ごめんなさい」

返事の代わりに、娘は謝った。泣き出しそうな顔で見上げられた俺は返事に困り、何故謝られたのかを考えた。しばらくして、もしかしたら、こうなった事で自分を責めているのかもしれない気がついた。

しかし、彼女から目を離れたのは俺の責任だった。

「お前が謝る必要はない。お前から目を離れた俺が悪いんだ。怖い思いをさせてすまなかった」

すると娘ははじかれたように下を向いた。その細い肩がまた震え出す。

どうしたんだ……？

そつと横から顔を覗き込むと、光るものが顎を伝って地面に落ちた。

娘は声を押し殺して泣いていた。突然泣き出した娘に俺は焦った。また、泣かせてしまった……。

同じ過ちを繰り返した自分の無能さに腹立たしさを通り越して呆れる。それと同時にあの男どもに対する怒りが湧き上がった。

娘は今になって張り詰めていた気が緩んだのだろう。震えながら口元を押さえ、嗚咽をかみ殺している。その姿は痛々しかった。

何故か心がかき乱される。弱弱しく頼りなげな様子を見ているとどうしようもなく胸が詰まった。俺は今までに抱いたことのない不思議な感情に戸惑っていた。

……今、彼女に触れてもいいのだろうか……。

性的な欲求以外で誰かに触れたいと思うことなど初めてだ。ただ、彼女を抱きしめて、もう大丈夫だと言ってやれば泣き止むだろうか。馬鹿な。俺のような男に触れられて泣き止むわけがない……。

そう思い直し、結局、無能な男は動けないまま、黙って立っていることしかできなかった。

第二章 安堵2

怖かった。

さっきまでの出来事がまだ現実感を伴っていなかった。地に足が着いていないような感覚が続いていた。

助けに来てくれた……。

ジェラルドの姿を見た時どれだけ安堵したか。言葉では言い表せない。

それなのに、また彼の目の前で泣いてしまうなんて。我慢しようと思ったのに、優しい言葉をかけられた瞬間、今まで張り詰めていた緊張がとけてしまったのだ。

ジェラルドは何も言わずに私が泣き止むまで側にいてくれた。その存在にどれほど助けられただろう。彼の側にいるだけで緊張していた数日前が嘘のようだった。

気にするなと言われたけど、やっぱりジェラルドには迷惑をかけてばかりだった。

泣いてばかりいる自分が情けない。私はこんなにも弱かっただろうか。

明るくて元気なのがサーシャじゃない……。

町での自分を思い出して言い聞かせてみる。

でも、それは何も知らなかった時の私だった。何も知らずに、ただ、平和でいられた時の。

こんなに怖い目に遭った事なんてなかった。あのままジェラルドが助けに来てくれなかったらと思うとぞつとする。

それを思い出してしまった私は、また体が震えだすのを必死に押さえ込んだ。

……もう、大丈夫なんだから……。

唇を噛み締めてスカートをぎゅっと握りしめる。今はもう大丈夫。

隣にはジェラルドがいる。

ジェラルドは三人の男相手に全く怯まなかった。私は言葉を発することすらできなかったのに……。

もう外は真つ暗だった。

通りのほとんどの店は閉まっている。逆に、昼間閉まっていた店が開いていたりする。

狭い通りには所々にランプが灯っているだけだった。

先ほどまではそう気にならなかったのに、今は柄の悪い男の人が多くなっていた。私はさっきの男の人たちに似ている人とすれ違うたびにびくびくしてしまっていた。

歩いているのは狭い通りだった。すれ違つと男の人と肩が触れ合つてしまいそうになる。さっきまでは気にならなかったのに、今は嫌だった。

でも、ジェラルドが反対側を歩いているからあまりそつちに寄つて避けることもできない。

すると突然、肩に手を置かれた。

心臓が跳ね上がる。恐怖がよみがえり、自分の体がびくつと震えるのが分かった。ぎこちなく振り返るとジェラルドと眼が合った。

彼はそのまま私の肩を抱き寄せるように引いて、私を前に押し出した。

「前を歩け」

「……ありがとう」

気づかれないようにほつと息を漏らす。

……隣にはジェラルドしかいないじゃない。少し落ち着かないとすると、今度は通りの真ん中を歩くような格好になった。両側を通る人の目が気になる。男の人たちが通り過ぎるたびにじろじろ見ていくのだ。なんだか不快な視線。

暗くなつてからは女の人を全く見かけないからこの時間に歩いている私が珍しいみたいだった。

今は、宿までの道がすごく長く感じられた。

「サーシャ！ああ、良かった！」

宿の部屋の扉を開けるなり、泣き出しそんな表情のアイリスに飛びつかれた。

私はその勢いにびつくりして、呆然としながらアイリスを受け止めた。

でも、アイリスを抱きしめていると急に部屋に戻ってきたんだという実感が沸いてきた。体の力が抜けていく。アイリスはしばらくして少し離れると、私を覗き込むようにして言った。

「本当に無事でよかった。大丈夫？」

それに何度も頷く。

「心配かけてごめんなさい。すぐにジェラルドが探しに来てくれたから、大丈夫よ」

詳しく話してこれ以上心配かけたくはなかった。それに嘘を言っているわけじゃない。

彼女はそれを聞いて安心したようだった。

「そう……。よかった……」

アイリスはほっと息をついて、やっと私の体から手を離す。こんなにも心配してくれていたこと知って嬉しかった。私はアイリスに微笑んでみせた。心から笑うことができた。

それから何も言わずに側で見ていたロレンスに向きを変える。

「サーシャ、悪かったね」

彼も謝った。優しいグレーの瞳が気遣うような色を湛えている。

みんなは悪くないのに……。

そう思いながら唇を噛んで首を振るのが精一杯だった。込み上げる安心感でまた泣いてしまいそうだった。

ロレンスは静かに近づいてきて優しく抱きしめてくれた。広い胸にそっと頬を預けて目を閉じる。すると静かに頭を撫でられた。

同じ男の人でも全然違う。ロレンスには触れられても嫌じゃない。

こんなにも安心する……。

「ありがとう」

離れてからみんなに告げる。

私にはもう、三人の存在が掛替えのないものになっていた。

第二章 恐怖2：ジェラルド

二人が娘の様子を見て安堵した姿を見て、俺は予定通り宿を出ることにした。

「行つて来る」

ロレンスに告げたつもりだったのが、それを聞いた娘が驚いたように振り返った。

「どこに行くの？」

^{すが}縋るような目を向けられて密かに驚く。その声も不安に満ちていた。

今から情報を集めに行くつもりだった。こういう事は夜の方が都合がいい。暗いとあまり顔も覚えられないし、相手をする事になる情報屋は主に夜活動する奴らがほとんどだからだ。

「外を見てくるだけだ。先に寝てろ」

「でも、危ないんじゃない……」

それを聞いて思わず、ふっと笑ってしまった。ロレンスも微かに^{かす}笑っている。

どうやら俺の身を案じてくれているらしい。さっきの事で不安になっているのだろう。だが、この娘に心配されるようでは俺も終わるだ。

笑った俺たちを見て彼女はショックを受けたような顔をした。

「サーシャ、君は心配しなくていい」

納得していないのか、娘はロレンスの言葉に反応しなかった。何を考えているのかは分からなかった。彼女は俺をじっと見つめたまま動かない。大きな紫の瞳は俺が見つめ返しても揺るがなかった。

時々、この娘はこんな眼をする。まるで彼女にしか見えない何かを見ているような、真っ直ぐで不思議な眼差し。

「心配するな。すぐに戻ってくる」

それを聞くと娘は諦めたように静かに目を伏せた。

何か言いたいことでもあったのだろうか。気になりながらも、俺はロレンスに後を頼むと目配せを送り、部屋を出た。

「おかえり」

朝方、寝室に入ると寝ていたらしいロレンスが起き上がった。

「あいつらは？」

「あの後すぐに休んだ。サーシャはしばらく心配そうだったが」

娘が何を心配していたのかは分からない俺は答えようがなかった。ロレンスは彼女に何があったかなどという野暮な事は聞かなかった。鋭い男だ、言わなくとも気づいているのかもしれないが。

「古本屋を回ってきた。アラベールの書物があれば何か分かるかもしれないかと思ったんだが、明らかに薬学と医学書と分かるものしかなかった」

アラベール文字が読めない俺は挿絵から判断するしかなかったが、間違いようもなかった。

「元々あまり数もないしな。それに複写も難しい。高価だろう？」

「ああ。結構な値がついていた」

この複雑な文字はまだ全体の体系すらはつきりしていない。複写するには一字一句手で書き写すしかなく、途方もない労力がかかるためほとんど行なわれていなかった。そのため、現存する本はそのほとんどが原本であり、本来なら王立図書館にあるべき貴重なものだった。それがこの町では闇で取引されるのだ。

だが、この町を見ただけですぐに何かが見つかるとは思っていなかった。俺たちが軽く探し回っただけで何かが見つかるのなら、グーテンベルク一族が謎に包まれているはずがない。

「今日は南の方を回ってきた。明日は北の方を頼めるか。北には二軒しかないそうだが距離が離れていてな。今日中には回れそうになかった」

俺たちはあまり嗅ぎ回っているのが知られないように一日おきに行動する事になっていた。

「ああ、分かった。もし、内容が分からない本があればどうする？」
「すべてを買いわけにはいかないだろう。娘に確認してもらった方がいい」

これは危険かもしれないが、仕方がなかった。それに、闇市の者は自分の身を守るためなら口を閉ざす。脅せばどうともなるだろう。

ロレンスも納得するほかはないようだった。

朝、リビングにはもう娘の姿があった。

「おはよう」

はにかみながら声をかけてくる彼女を見て安堵する。その様子はいつもと変わらない。

二人で話をしたあの朝から、娘は俺にも笑いかけてくるようになっていた。彼女の中で何があったのかは知らないがその変化は好ましかった。だが、同時に少し困っている自分もいる。娘の純粋な笑顔は俺には眩しすぎて直視できないのだ。

「アイリスに熱があるみたいなの」

「ひどいのか？」

「今までの疲れが出たみたい。今はまだそんなに高くないわ」

「薬が作れるんだったな。今用意があるか？」

女二人の会話を思い出す。この娘の知識にはアイリスも驚いていた。

すると、彼女は微笑んだ。

「うん。色々持ってきてるから大丈夫。今作ろうとしてたのよ」

それに頷いてみせると、娘は沸かしていた湯に向き直り「ごそ」と何かを始めた。

俺は黙ってそれを見つめていた。その後ろ姿に惹かれている自分を意識していた。

小娘相手に何を考えている？

ほんの子供だと言っていたのは誰だ？

旅を始めてからの俺はおかしかった。何故が必要以上にこの娘の様子が気にかかる。気にしても彼女が何を考えているかなど分からないと知っているのに。

しかも今、彼女は部屋着を着て目の前に立っていた。俺が城で渡した部屋着を。

この部屋着は本来、夜寝る時にだけ身に着けるものだった。年頃の娘がその姿をむやみに男に見せるものではない。

初めの頃、普段とあまり変わらない格好で寝ている娘を見て、いくつか用意させた物を渡したのだ。純粋な好意からだった。娘はそれほど服を持ってきてはいなかったのだ。

しかし、部屋着と言ったのがまずかったのか彼女はそれを昼間も着ている。初めは本人が気にしなければそれでいいと思っていた。忙しかったせいで彼女と顔を合わせる時間がほとんどなかったからあまり気にも留めなかったのだ。

それを今、後悔していた。

夜着と言ったべきだったのだ。その普通の服よりも広く開いた胸元が気になってしまう。

俺は無邪気な娘に対してやましい気持ちを抱いた自分を諫めた。

だが今更どう言えればいい？

目のやり場に困るから着替えると？

そんな事が言えるか……。

俺は密かにため息をついた。

しばらくして起きてきたロレンスは、案の定、それについて触れてきた。

「サーシャ、着替えないのか？」

「どうして？」

「どうしてって、それは部屋着だろう？」

「部屋着ってお部屋で着るんじゃないの？」

何がおかしいのか分からないといった様子で首を傾げて聞く。
俺はそのあまりに無邪気な様子に軽い恐怖すら覚えた。

「……………」

ロレンスは彼女を見てから俺に目を移す。鋭い男は何かを察したらしい。俺と目が合った一瞬だけ真顔になった。

それから娘に視線を戻し、困ったような顔を作る。

「部屋着は寝る時に着るものなんだ。それで寝室から出たりするのはちょっと……。私たちも男だし、少し困るというか……」

それを聞くと娘は表情をなくした。みるみるうちに耳まで赤くなる。

その赤い顔のまま勢いよく振り返り、潤んだ瞳で俺を見た。

「おかしいと思ってたっ!？」

その見たことのない勢いに俺は圧倒されていた。そして正直に答える。

「……………少し」

「どうして今まで言ってくれなかったの!？」

「別に部屋からは出ないと知っていたし、誰とも会わないからかわないかと思っていた」

「……………」

それを聞いた娘は表情を変えないまま黙って踵を返し、寝室に戻って行った。無表情なのが恐ろしい。

俺はその姿を呆然と見送った。

「ジェラルド、間違いなく嫌われたな」

いつの間にかソファアに座っていたロレンスが俺を見て言い放った。

やはり今のはまずかったのか。確かに、あの勢いは見たことがないな……………。

反論できない俺は閉められた扉を眺めて黙って考え込んだ。

「さあ、どうする? 君に残された道は二つに一つだ。今までの彼女

に対する仕打ちを私に告白するか、今後は彼女に対する態度を改めるか」

ロレンスはソファアの肘に頬杖をついた余裕の表情で続けた。この男が今の状況を楽しんでいるのは明らかだった。

不愉快に思いながら、男の向かいに腰かけて言い返した。

「仕打ちとはえらい言いようだ。別に普通に接してきたつもりだ」「そのつもりがどうなった？ 彼女は絶対、怒ったぞ」

「あれをどうやって言えば良かったんだ。今まで本人は気にしてなかったんだぞ」

自分でも分かっている。見苦しい言い訳に過ぎなかった。

「そういう問題じゃないだろう？」

ロレンスは呆れたような表情で言う。しかし、次の瞬間何を思ったか、にやつと笑った。

「……やっぱり止めた。まあ、君もたまには悩んでみるのもいいんじゃないか。……頑張れよ、彼女に嫌われたくなければな」

その発言に耳を疑う。こいつはこんなに性格が悪かっただろうか。俺は呆れて首を振りながら言い返した。

「お前がそんな性格だとは知らなかったな」

「ああ、私も楽しんでいる自分に驚いている」

答えたロレンスはまた静かに笑い出した。にやにやしながら、面白くなりそうだと独り言のように呟いた。

第二章 料理

ベッドに座り込んだ私は頭を抱えていた。

こんな事を男の人に注意されるなんて。恥ずかしい……。

火照った顔を両手で押さえ、沈んだ心で言い訳を並べる。

……知らなかったんだもの、仕方ないじゃない。こんな豪華な服が寝るときだけのものだなんて思わなかった。

山の家に住んでいたときは部屋着なんて明確な区別はなかったのだ。

ジェラルドはなんで今まで言ってくれなかったの……。

少し恨めしい気持ちになる。でも、これではつきり分かった。彼は私になんか何の興味もないって事が。ただの子供だとしか思われていないんだ。

今までは同じ宿に一泊以上したことがなかったから、朝になれば必ず旅の服に着替えていたのだ。

もし、ここが大きな宿だったら私はこの格好のまま食堂に出て行っていたかもしれない。同じ宿の中だから大丈夫だと思って。

今日教えてもらってよかった……。

そう、今日で良かったんだと思うことにしよう。必死に自分に言い聞かせる。そう思わないともう、リビングに戻れない。

そんな事よりアイリスよ……。

私は着替えるとアイリスにそっと近づいた。近づいてみると彼女はうつすら目を開けた。起きていたようだった。

「ねえ、何か食べられそう？ 食べたいものある？」

なるべく静かに聞きながら、手を伸ばしておでこに触れる。熱はさつきより高いみたいだ。

「ごめんね、迷惑かけて」

アイリスは掠れた声で囁いた。

「迷惑なんかじゃないわ。どうせしばらくはゆっくりできるんだか

ら、気にしないで」

笑ってそう言うと、アイリスも弱弱しく笑った。それから首を横に振った。

「今はあまり食欲がないわ」

「そう、後でお薬作るわね。今は休んで」

アイリスは頷くと、目を閉じた。かなりしんどそうだ。しばらくのんびりできると聞いて、溜まっていた疲れが出たんだろう。ううん、昨日私が心配かけたのがいけなかったのかも。

ごめんね……。

私は心の中で謝った。

戸を開けると二人が顔を向けた。

なんとなく居心地が悪い。けれど今は気にしない振りをするしかない。頼まなくちゃいけないことがある。

私がどう話を切り出すか考えているうちにロレンスが聞いてきた。

「アイリスはどう？」

「結構熱が高いわ。今日はどうするの？」

「初めから情報を集めるのは私たち二人でやるつもりだった。君たちが町をうろろろするのはあまり良くないからね。部屋にいるか、町で何か見たいのなら一緒に行くよ」

「情報を集めに行かないの？」

「それは夜だ」

ああ、それでジェラルドは昨日の夜出て行ったんだ、と頭の隅で納得する。

「じゃあ、アイリスも食べられそうなものを買いに行きたいの」

二人は顔を見合わせた。お互い、真顔のまま何も言わない。

「俺が行こう」

ジェラルドだけが私を見て言った。

ジェラルドが付いてきてくれることになった事に内心驚く。あれだけで、二人の間では話し合いが成立したらしい。

その後私たちは朝食を済ませ、まだ何もいらなというアイリスに熱冷ましの薬を飲んでもらってから部屋を出た。

朝の市場は昨日ほど混雑してはいなかった。まだ開いていない店も多い。人でにぎわっているのは食料を売っている一角だけだった。そこには町のお母さんが多かった。半分以上が女の人。

今は安全そう、とほっと息をつく。

それに、ジェラルドも側にいるし……。そう思い、こっそり横目で確認する。今日は前じゃなくてすぐ横にいるのだ。ジェラルドはずっと何も言わずに私に合わせて歩いてくれていた。

私にはやっぱり、彼が何を思っているのかは分からなかった。優しいのか、そうじゃないのかもなんだか曖昧。今朝の事を思い出すと昨日の感謝が薄らぎそうになってしまふ罰当たりな自分に苦笑する。

でも、今こんなふうに考え事をする余裕をもって歩けるのはジェラルドがいるお陰なのだという事は分かっている。

私が果物売り場の一角で立ち止まると、彼も立ち止まった。

売り場を見渡す。様々な形、色の果物が売られている。見たことのない物もたくさんある。

とりあえず近くの桃を手にとって眺めた。

そういえばアイリスは何が好きなんだろう。嫌いなものはあったりするのかな。それにフルーツだけじゃ駄目よね。何か栄養のあるものも買って帰らないと……。

そこでふと気づいた。

今日の夕食はどうするんだろう？アイリスは外に食べに出られないだろうし……。私は立ち止まったまま動かずに考えてしまっていた。

「おい、買わないのか？」

ジェラルドが怪訝そうに言った。

「夕食の分も買って帰ってもいい？」

「ああ、構わないが。……どうするんだ？」

「お部屋で作ろうと思って」

食べに出られないなら部屋で作るしかないと思ったのだ。台所には器具も置いてあった。簡単なものならそれで十分だ。

「おまえが？」

そりゃ、迷惑かけてばかりで信用できないかもしれないけど、料理くらいはできるんだから。なんだか疑わしげな彼の顔を見上げて密かに不満を抱いた。

……別に、嫌なら無理に食べるとは言わないわ。私は何故か強気にそう思った。

「だって、アイリスは部屋から出られないでしょう？二人は外で食べきて」

「お前たちを二人残して行くわけにはいかないだろう」

あ、そっか……。

私たちは顔を見合わせたまま沈黙した。

「俺たちの分も頼めるか？」

意外な言葉に目を見張る。嫌だったんじゃないの？

頼まれると、困ってしまう。今度は急に弱気になった。

「大したものは作れないんだけど……」

「何でもいい。助かる」

ジェラルドはそう言うのと僅かに口の両端を上げた。

笑った……。

それを見て嬉しくなった私は満面の笑みで笑い返した。

その後、私たちは色々な売り場を周りたくさんの食材を買いこんだ。

本当にたくさん。私がどっちを買うか迷っていたりするとジェラルドは両方買ってしまうのだ。あれば食べるだろうと言って。

そして買ったものは全部彼が持ってくれている。買い物に行くと

言い出したのは私なのに申し訳ないような、手ぶらでいるのが落ち着かないような気分だ。

部屋に戻ると、思ったとおりロレンスに「多すぎるんじゃないか」と笑われた。ジェラルドは知らん顔だ。「今日は私のせいじゃないのよ」と言ってみても信じてくれない。

でも……。

初めてジェラルドに頼まれた。私だって少しは役に立てる。

それが嬉しくて、私は旅が始まってから一番心が弾んでいた。

第二章 病：アイリス

体が楽になったと感じたのは熱が出てから二日後の夜だった。

おでこに何かが触れる感覚がして目を開くと、私を見下ろすサーシャの優しい笑顔があった。

「良かった。熱が下がってきたみたい。まだ食欲はない？」

「なんだか、サーシャには迷惑をかけっ放しだ。私のために薬や食べやすいスープなどを作ってくれているのだ。でも、食欲がないせいであまり食べられなかった。」

「ごめんね。ずっと迷惑かけて」

「うつん、そんな事ないわ」

静かに笑いながら言うサーシャはいつもより大人びて見える。

女の私から見ても懂れてしまっくらい綺麗だった。こんな子に看病されたら男は絶対惚れると思う。どうでもいい事を考える余裕のある自分がちよつと回復してきたことを実感した。

「ずっと、おばあちゃんにも言われてたのよ。ちよつと熱を出すくらいの方が女の子らしくっていいって。私なんて、何をしても体を壊さないのよ。元気なのだけが取り柄なんだから」

秘密を打ち明けるような表情で言う。その苦々しい言い方と見た目は全然そんなふうに見えないのがなんだかおかしい。

私は思わず笑ってしまっていた。

「夕飯、食べられそうね？さっきも見に来ただけどよく寝てるみたいだったから。私たちは先に食べたわ」

「ええ。もう熱が下がったみたいだし、そっちに行って食べるわ」
元気になってきたし、男二人にも顔を見せておいた方がいいだろうと思ったのだ。

「でも無理しないで？」

「大丈夫よ」

心配そうなサーシャに笑いかけて、ベッドから出た。黒いショー

ルを羽織る。

「着替えないの？」

「病人だし、別にいいわよ」

部屋着だけど。まあ、あの二人だし今更よね、と適当に思う自分に苦笑いだ。

「そう……」

サーシャは少し複雑そうな顔をした。

「どうかしたの？」

「うっん、何でもないわ」

夕食を軽く食べた後、私は手持ち無沙汰でソファに座っていた。サーシャは後片付けをしている。後片付けを手伝おうかと聞いたら、絶対にダメ！とすごい勢いで拒絶されてしまったからだ。

彼女はいつの間にか全員の食事の用意を任されるようになっていた。多分私が寝込んでいたので外に食べに行くことができないせい。本当に申し訳なく思った。

初めて食べる料理だったけど、おいしかった。ここにいる間に私も料理を教えてもらわないと……。

ロレンスは今、外出していて部屋にはいない。

向かいにはジェラルドが座っていた。彼はさっきから静かに手元の本に目を落としている。両足を前の低いテーブルに上げて。

これはどうも彼の癖らしい。初めて見た時、サーシャがそれをやたらと気にしていたのを思い出した。どうして足がテーブルに載っているの？お行儀が悪いと思うの、と気に入らない様子だった。ジェラルドがまだやっているのを見ると、言えないままなんだろうなと可笑しくなった。

二人の空気は前と比べると明らかに変わっていた。サーシャはジェラルドに対して笑いかけるようになったのだ。そして、あの無邪気な笑顔を向けられるとジェラルドが少し困ったような表情になる

ことにも私は気づいていた。

この無愛想な男がサーシャに落ちるのも時間の問題ね……。

ジェラルドを前にしてこんな事を考えてる私ってすごいのかも、と思う。旅の準備で家に戻った時に兄に聞いたところ、軍の男たちの中でも彼は恐れられているらしい。

でも、そんな男がサーシャには振り回されっ放しなのだ。なんだから微笑ましいとさえ思ってしまう。私も大概、怖いもの知らずだ。

「さつきからなんだ。俺の顔はそんなにおもしろいか？」

気づけばジェラルドはこちらを向いていた。

答え辛いのでとりあえず、意味深ににんまり笑って見せる。案の定、ジェラルドは嫌そうな顔をした。

「その様子だともうすっかり元通りだな」

「ええ、もう大丈夫。ご心配をおかけしました」

笑いながら言うと、彼は面白くなさそうに鼻を鳴らした。

しばらくすると、ロレンスが帰ってきた。

その時にはもう私はすっかり元気になってサーシャと談笑していた。ちゃんとご飯を食べたのが良かったみたい。そんな私を見たロレンスはなんだか拍子抜けしたみたいだった。

「食欲がないかと思って、君の好きなクッキー買ってきたんだけど、必要なかったな」

そう言っって背中の袋から紙の包みを取り出した。

クッキー……？

私はロレンスとそんな話をした覚えがない。

「クッキーってなに？」

「クロスグリのクッキー。好きだろう？」

好きだけど……、どうして知ってるの？

けれどその理由はすぐに思い至った。

「ルイス兄様から聞いたのね？」

「ああ」

ごく普通の表情で答えたロレンスを見てやっぱり、と思う。あまり歓迎できる気分ではなかった。

……あの、おしゃべり。ロレンスに私の何を話したのよ。

「ちよつと、二人でどんな話をしてたのよ？」

ロレンスはくつと面白そうに笑った。

「それは秘密だな」

なんだか頭痛がぶり返すような気がした。ロレンスの様子だと他にも何かを聞いているみたいだ。本当に勘弁してほしい。

「あと、お見舞いのはずだったんだが、快気祝いに」

そう言いながら近づいてきたロレンスは私の膝の上に小さな花束を置いた。

「……ありがとう」

これには素直にお礼を言う。

「どういたしまして」

淡いピンクのゼラニウムの可愛い花束。柄にもなく女の子らしい気持ちになった私はそれを手にとって思わず微笑んだ。

「わぁ……！良かったわね、アイリス！綺麗なお花」

隣のサーシャがにこにこして声を上げた。私よりもサーシャのほうが嬉しそうかも。

ロレンスは本当にこういうことをしても嫌味がないというか、様になる。昔からそうだった。この優しい眼差しと笑顔で親切にされると悪い気はしない。女の子なら誰だってそうに決まっている。

でも、勘違いしてはいけないのだ。彼は誰にでも平等に優しいから。

それでも……。

「クッキー、食べようかな」

もう遅いけど、今日は特別よね。

それを聞いたロレンスは爽やかな笑みを浮かべた。

第二章 変化

夜になると、ジェラルドとロレンスは交代で出かけていく。

けれど、あまり芳しい結果は得られていないようだった。はつきりと言われたわけじゃない。私たちには、何か分ければ伝えると言われたまま何も知らされていなかったから。

暇な昼間は一緒に出かけて町を見て回ったり、食料を買ったりした。

まるで家族のようだった。同じ部屋に住んで、同じ物を食べて。私にはそれがすごく楽しかった。こんなに賑やかに過ごしたのは初めてだ。

アイリスとは一緒に料理をしたり、笑われながら呪文の練習に付き合ってもらったり。

森で歩き回るわけじゃないから疲れない。今まで以上に時間があつた私たちは色々な話をした。

そして、私はなんとなく四人の雰囲気が変わつたのを感じていた。上手くは言えないけど、自然になった。

四人で一緒に居るのが当たり前のような空気。ずっと前からそうだったかのような。

それぞれの位置や役割のようなものが決まってきたのだ。大体、私がおかを言うアイリスとロレンスにからかわれる。それは前と変わらない。

でも、時々それがジェラルドにも飛び火するようになった。

初めの頃は心配したけれど、ジェラルドは全く怒る気配を見せなかった。逆に、ちょっと戸惑うような感じになる。

アイリスとロレンスが手を組んだら最強だった。私とジェラルドは困って顔を見合わせることでしかできなくなる。

そのお陰でジェラルドの表情の変化が少し分かるようになってき

た。すぐにいつもの表情に戻るけれど、微かに笑うこともあるのだ。

結局、オルディアには8日間も滞在した。

やっぱり、何かが見つかつたとは言われなかつた。

私たちは再び北に向かつて歩き出していた。しばらくは小さな村が続くらしい。

気づけば季節はもう夏の真っ只中だつた。

連日続く茹だるような暑さと強い日差し。森の中では木々で日差しが遮られることもあるけれど、暑さはあまり変わらない。倒れた木や岩などが転がる足元に注意しながら歩くのは結構大変だ。

その日、空気が変わったのは突然だつた。

「ロレンス」

ジェラルドの低い小声。アイリスと話をしていた私は話を止め、前に意識を向けた。

「ああ」

前の方から歩いてくるのは旅の格好をした男の人だつた。今まですれ違つた事のある旅の人はみんな私たちのように何人かのグループだつた。

今歩いてくるのは一人。それに、なんだか普通の様子じゃない。

私にも分かるくらいなのだ。手ぶらで、なんとなくふらふらと歩いているように見える。

「サーシャ、私の後ろに。目に気づかれないように注意して」

ロレンスが私を後ろに引き寄せながら、真面目な表情で言う。ジェラルドも様子を窺うように歩く速度を緩めた。突然の緊迫した空気にぎゅっと胸が締め付けられるような緊張が走つた。

一番前を歩くジェラルドは男の人とすれ違う前に足を止めた。そ

のまま私たちもお互いの距離をいつもより縮めて立ち止まる。

不規則な足音だけが近づいてくる。

ロレンスの後ろに隠れて、目を合わせないように俯いていた私は音で判断するしかない。

「いやあ、よいお天気ですな」

その声に衝撃が走った。

男の人らしくない甲高い声。私は飛び上がりそうになった。隣のアイリスまで一瞬体を強張らせたのが分かった。

誰も答えなかった。

他のグループとすれ違うときは、ちよつと立ち止まって話をするのが普通だった。どこから来たのかとか、次の町はどれくらい先かとか。余っていたら食料を分けてほしいと言われたりする事もあった。

「いやいや、賑やかそうでよろしいですなあ」

その人は返事がないことを気にしていないようだった。笑いを含んだような言い方で独り言のように続けた。

「お一人ですか？」

ようやく、ジェラルドが答える。こういう時にまず、話をするのはいつも彼だ。

「ええ、ええ。一人ですよ。気楽な旅ですからねえ」

「どちらまで？」

「この先は確か、オルディアでしたかな。ちよつと寄ってみようかと思ひましてね。どちらへ向かっておられるのですか？」

「コルトアナです」

ジェラルドは私が聞いたことのない地名を返した。

多分、適当に嘘を言ったのだ。

「ほうほう、いい所ですなあ」

言つて、何がおかしいのか不自然な甲高い声で笑い出した。形容のし難い不気味さだ。

なんなの、この人……。

その人はその後もしばらくジェラルドと取り留めのない話をし、最後に「ではこれで」と言って立ち去った。

私たちはその人の後姿が完全に見えなくなるまで、その場を動かなかった。

「なんだったの、さっきの人」

再び歩き出してから、私は誰に聞くともなく声を漏らした。これだけでいつも大抵、誰かが答えてくれるのだ。

前にいるジェラルドが私をちらと振り返った。答えてくれそうだと思います彼の横に並ぶ。

「旅人だ」

その答えに拍子抜けする。それは私にだって見れば分かる。

「どうして一人だったの？」

「よほど腕が立つか、」

ジェラルドは私を見て、何故か途中で言葉を遮った。不思議に思っ
て見返すと目が合う。

「腕が立つか、なに？」

「いや、何でもない」

ジェラルドは首を振って、口を噤み、視線を前に戻した。

その様子から、これ以上言うつもりはないらしいと分かった。言
いかけてやめるなんて珍しい。ううん、初めてかもしれない。

いつもはちゃんと答えてくれるのに……。

何を言いかけたのかすごく気になる。

でも、前を向いたままの横顔にしつこく聞くのは躊躇われて、私
はそれ以上聞くことを諦めた。

奇妙な出来事だった。

後ろを振り向くと、ロレンスとアイリスは何事もなかったかのよ
うに話を始めている。

心に残った小さな引っ掛かり。けれど、私はもう、それに触れる
事はできなかった。

第二章 フェアリー

変な男の人と出会ってから4日、昨日小さな村を通り過ぎた私たちは、道を逸れた大きな木の下で休憩していた。

それぞれが適当に木の根元に腰掛けて、水を飲んだりおやつを食べたりと寛いでいるところだった。

「あ、見て、フェアリー」

アイリスが突然声を上げた。

指差す方向に目をやった私は心の中で、げ、と女の子らしくない声を出す。

私はフェアリーにいい思い出がないのだ。

フェアリーは森の中に住んでいる、特に珍しくもない魔物。魔物って言っても別に襲ってくるわけじゃないし、害はない。こっちが向かって行かない限り、気にもされない。

そのはずなのに、私は何故か、家の周りの森に住んでいたフェアリーの目の敵にされていたのだ。

うっかり出遭ってしまう度にキンキンする声で騒ぎ立てられ、追いつけ回される。

私には理由が分からなくて、出遭ってしまったら逃げ出すか、こっそり気づかれないようにやり過ごすしかなかった。

でも、憎めないのだ。可愛くて。

大きさは手のひらくらいしかないのに、人間と変わらない見た目でそれぞれに顔も違うし、髪の色も違って個性がある。花びらを綴って作った薄い服を着て、共通するのは透き通った白い羽と真っ赤な夕日のような瞳の色。

その見た目に魅了された私は、なんとかお友達になりたくて近づく努力をしてみたけど、駄目だった。

追い掛け回されながらもイブに吹き飛ばしてもらわなかったのは、ひとえに可愛いからだ。

今だって、できるならお友達になりたいと思っている。

もしかしてこの森のフェアリーは違うかも……。

フワフワとこっちに近づいてくる彼女たちを見て少し期待する。

6、7匹のフェアリーたちは私たちを観察するように木の周りを飛び回った。まるで相談しているかのように顔を寄せ合って小声でキィキィ話し合っている。

「可愛い……」

今までゆっくり近くで眺めさせてもらえなかった私はもう うつとりだった。

アイリスが笑った。

「ねえ、知ってる？フェアリーって森に入った男を惑わす魔物なんだって」

「そうなの？」

無害だと思っていた私は驚きに声を上げる。

「今だってきつとロレンスかジェラルドを狙ってるのよ。……あ、ほら来た」

見るとフェアリーは二手に分かれてロレンスとジェラルドの周りを飛び回りだした。キィキィと小さな声を出しながら近くを飛ぶ様子は、確かに二人の気を引こうとしているように見える。肩に止まって髪を軽く引っ張ったりしてる子もいる。

ロレンスはこらこら、と言いながらも仕方なさそうな表情で相手をしているけれど、ジェラルドはかなりうつとおしそう。髪を引っ張られても無視だった。

「すごいわね。積極的で」

アイリスは笑いを堪えきれない様子だった。

「あんなに小さくて可愛いのに……」

なんだか、意外。

惑わしてどうするつもりなんだろう。ジェラルドなんて絶対惑わされそうにないけど……。

私も内心笑っていると、フェアリーたちが一斉にこっちを向いた。

「……え、なに？」

「サーシャ、言ったわね……」

アイリスが呆れたような顔で私を見た。

「何を？」

「フェアリーに小さいは禁句よ。知らないの？」

「うそ……」

そんなの知らなかった。

そう言えば、子供の頃にも言ったことあるような……。フェアリーたちに嫌われていた理由がやっと判明した。

アイリスが「私じゃないわよ」と飛んでくるフェアリーに向かって声をかける。

そう、彼女たちは私に向かって飛んできていた。

怒ったように耳障りな甲高い声を上げて。さっきの囁くような鳴き声とは全然違う。

「……冗談でしょ……？」

顔が強張った。これでは丸つきり今までと同じ状況じゃない。

飛んできた彼女たちに耳元でうるさく騒ぎ立てられた私は耐え切れずに立ち上がった。

「い、痛っ！いたたたっ！」

怒ったフェアリーは容赦がなかった。

顔を突かれ、髪を引っ張られた私は情けない声を上げて逃げ出した。走っても飛んでいるフェアリーは結構早い。

「もう、ごめんなさいってば！もう言わないから、か、顔はダメ！」
謝りながら、悲鳴を上げて逃げ回る。木々の間をジグザグに走った。

ここの森のフェアリーの方がしつこいかも……。

でもしばらく走っていて気づいた。ここは初めての森なのだ。みんなから逸れたら大変だ。

走りながら後ろを振り返ると、みんなの姿は木々に邪魔されて見

えなくなっていた。

戻らなくっちゃ……。

「きゃ……っ！」

体の向きを変えようとした時、足元を見ていなかった私は木の根に引っかかって転んでしまった。

……もう、やだ。どうして……。

チャンス到来とばかりにフェアリーたちは私を一齐に取り囲んだ。耳元でキイキイ騒ぎながらしつこく髪や服を引っ張ってくる。

「もう、ダメだってば。やめてよ……」

私は座り込んだまま半分泣きそうな状態で抵抗していた。片手を振って顔の周りのフェアリーを追い払い、空いている手で引っ張られている髪を押さえる。何匹かのフェアリーと髪を引っ張り合うような格好になった。

「お前達、いい加減にしろ……！」

森に低い声が響いた。

格闘を続ける私の側に、いつの間にかジェラルドが立っていた。

怒鳴ってはいないけれど迫力のある声。

自分の事で精一杯だった私はジェラルドが近くに来ていた事に全く気づかなかった。それはフェアリーたちも同じだったらしい。

引っ張り合いをしていた私たちはそのままの格好で同時に凍りついた。

見上げた彼の表情はいつもと変わらない。でも、今はそれが逆に怖かった。

するとジェラルドは空中で動きを止めた一匹の首の後ろをつまんで近くの繁みに放り投げた。

……あっ！

「お前たちもだ、向こうへ行け」

それを見た他のフェアリーたちは驚き、非難するように一齐に騒

ぎ立てる。耳に響くキンキンした声を上げて、慌てて私の側を離れていった。

「……………」

遠ざかっていくキイキイという鳴き声を聞きながら、私とジェラルドの間には妙な静けさが漂っていた。

私は地面に座り込んだまま、立っているジェラルドを見上げる事ができなかった。

……………恥ずかしい……………。

きつと、転んだことも知られているし、泣きそうになっていたのもばれている。

その事に気づいたのだ。

彼にはこんな姿を見せてばかり……………。

俯いている私の側にジェラルドも片膝をついてしゃがんだのが分かった。でも、そのまま何も言わない。不安に思ってそつと見上げると綺麗なブルーの瞳がすぐ近くにあった。

眼が合うとジェラルドはどこことなく困ったような表情で首を傾げた。

「……………大丈夫か？」

その静かで遠慮がちな言い方を聞いて、かつと顔が熱くなる。

きつと、私の情けない姿を見て呆れて……………。

すごく惨めな気分だった。赤くなつた顔を隠すために下を向いて、きゅつと唇を噛み締めた。

そしてそのまま何も言わないでいると、頭に何かが触れた。

なに……………？

その感触に驚いて顔を上げると、大きな手が引つ張り合いで縛れた髪を解くようにそつと髪をなでていた。

目を丸くしてぼかんとジェラルドの顔を見る。

するとしばらくして私の視線に気づいた彼は私をちらと見ると、すぐに顔を逸らし「髪が」とだけを呟くように言った。

そんなにくしゃくしゃになってるの……？

眼を合わせてくれない彼を不思議に思いながら、私は手ぐしで髪を整え、軽く一つに結びなおした。

ジェラルドは先に立ち上がると、何事もなかったかのように、まだ座り込んだままの私に手を差し出した。

「行くぞ」

「ありがとう」

その手に掴まって立ち上がる。大きくて硬い、でも温かい手。

二人の所へ戻る道。先に立って歩くジェラルドの後姿を見ながら頭に手をやった。

……どうしてなでてくれたの？

髪はそれほどくしゃくしゃにはなっていなかったのに……。

その日一日中、私は頭に残ったジェラルドの手の感触が気になって仕方がなかった。

第二章 突然の1

私たちは小さな村に着いていた。

やっぱり、こういう村の方が落ち着く……。

果実畑が広がる村を眺めながら思う。

今は一人ぶらぶらと畑の脇の小道を歩いているところだった。小さな村。みんなが一緒に畑仕事で生計を立てている家族のような温かい村だった。ここなら安全だろうと一人で宿の外に出るのを許されたのだ。それにまだ明るい。

宿を探すのも簡単だった。私たちの姿を見た村の子供が家々を駆け回って聞いてくれたのだ。

そして私はその子供たちのいる家に向かっていた。外から来た私たちが珍しいんだと思う。宿も探してくれたし、足に抱きつかれて「絶対に来てね!」と言われてしまった私は行かないわけにはいかなかった。

……ここよね……?

庭に鶏を飼っている家だって言ってた。裏庭に柵に囲まれた10羽ほどの鶏を見て確信を得た私は扉を叩いた。

「はい、いるよ」

いるよって言われても……私が勝手に入ってもいいの……?

迷っていると中から戸が開けられた。出てきたのは私と同年くらいの男の人だった。薄いアイビーグリーンの瞳に茶色の髪をした人の良さそうな印象の人。背はロレンスより少し低いくらい。

彼は私を見て戸惑った。

「あ、えーっと、家に何か用かな?この村の子じゃないから……さっき来た旅の子?」

彼の後ろに人の気配はない。

「えっと、さっきルークとリリーって子にここに来てって言われたんだけど……、この家じゃなかったかしら?」

「二人は僕の兄弟だけ……、今は外に出ているな。もしかして、遊びに来てって言われた？」

頷くと、彼は少し困った顔をした。

「あいつらよくやるんだよ。もうすぐ帰って来ると思っけど、……中で待つ？」

遊びに来てねと言ったのは単なる気まぐれだったのかも、と少し寂しい気分になった。本気だと思っていたのは私だけだったらなんだか複雑な気分だ。

「子供たちはいつもどこにいるの？私、探してみるわ」

「いつも同じ場所で遊んでるわけじゃないから……。入って待っているといい」

「でも、お邪魔になるでしょう？」

私が躊躇していると彼は軽く笑みを浮かべて大きく扉を開けた。入れということらしい。すつきりしない気分のまま、彼に続いて中に入る。

これで子供たちが帰ってこなかったらどうしよう。子供たちに放って置かれるなんてことになったら本当に恥ずかしい。

私は心の中で、早く帰ってきてくれますようにと祈った。

「あ、お姉ちゃんがいる！」

「本当だ」

彼らが帰ってきたのは私がすっかり諦めた頃だった。

それでもまだここに留まっていたのは思いの外、先ほどの彼と話が弾んでいたからだった。

エリックは私と同年だった。お互いの事を話しているうちになんとなく、畑仕事を手伝う事になり、そのままずると夕飯の支度まで手伝っている。

お陰で家のお母さんとお父さんとも仲良くなってしまった。二人

が帰ってきた頃には完全に本来の目的から遠のいていた。ううん、もう忘れかけていた。別に楽しかったからいいんだけど。

「お前達は本当に！誘ったのならどうして帰って来なかったんだ！」
エリックに怒鳴られた二人は一気に縮こまった。

「だって、今まで来てくれた人いなかったんだもん……」

私をちらちら見ながらそう答えたルーク。やっぱり本気じゃなかったんだと内心がつくりだ。

「ねえ、お姉ちゃん怒ってる？ごめんね、ごめんね」

でもそう言われて二人にまた足に抱きつかれてしまえば、怒る気にもなれなかった。

私は見上げている彼らの目線の高さまでしゃがんだ。

「怒ってないわよ。でも、一緒に遊べなくてちよつと残念だったわ」
泣きそうな顔のリリーのほっぺをちゃんと突くと彼女は涙を溜めた目でにこつと笑った。

……やっぱり可愛いもの。怒れない。

「ねえ、これから遊べる？」

ルークが期待に満ちた目で聞いてくる。それを見て、どうしようと思った。やっぱり彼らが戻ってくる前に帰るべきだったと少し後悔する。

外はもう薄暗い。宿に戻らないとみんな心配するだろうし、この家もそろそろ夕食の時間だ。私がこのまま留まっても邪魔なだけだ。

「遊びたいんだけど、ルーク、お姉ちゃんも もう戻らなくちゃいけないの」

そう言った私に声をかけてくれたのはお母さんだった。

「あら、夕飯食べてから行きなさいな」

「でも一緒に来た人たちが待ってるの。それに心配されるだろうし

……」

「今夜泊まるのってリンネルさんのところだった？」

聞いてきたエリックにそうだと答える。彼は少し考えてから言っ

た。

「サーシャは夕飯、こっちで一緒に食べるって伝えてくるよ」

「え、でも……！」

その意外な提案に驚く。

「大丈夫、後で送る」

お母さんもそれがいいわ、と喜んだ。

戸惑う私に笑みを残してからエリックは家を出て行った。

「やったあ！お姉ちゃんこっち来て！こっち！」

すっかり元気になった二人に引つ張られるように奥に連れて行かれながら、微かな不安が胸を過ぎる。

勝手な事をして怒られたりしないかな……。

やはりというか意外にもと言うべきか、頭に浮かんできたのはジエラルドの無表情だった。

戻ってきたエリックにどうだった、と聞くと彼は苦笑いして大丈夫だよと言った。

苦笑いがすぐ気になったけど私は結局そのまま夕飯を頂いた。

夜、村が完全に闇に包まれてから、また半泣きになってしまったルークとリリーに別れを告げて、エリックと私は家を出た。

少しの間だけど親切にしてもらって、本当に楽しかった。

私たちは畑の横を宿に向かって歩いていった。

「サーシャは結婚してるのか？」

その唐突な質問に目を丸くしてエリックを見上げる。彼は手に持ったランプを少し掲げて私の顔を窺っていた。私はそれに首を振ってみせた。

「ううん、どうして？」

「いや、さつきリンネルさんの家で君の仲間を見て、どういう間柄なのかって。……ほら、男女4人って珍しいじゃないか。みんな若かったし」

付け加えられたような理由を聞いて、やっぱり珍しいんだ、と思

ったけれど　どんな間柄かと聞かれて一言で答えるのは難しかった。
「理由があつて、一緒に旅をする事になったの。別に誰も夫婦とか
じゃないわ」

「その前は？君の住んでいた町には恋人はいなかったの？」

また驚いて横を見る。エリックは真面目な表情だった。色の薄い
グリーンの瞳が私をじつと見下ろしている。

それが何故かすごく恥ずかしいような気がして、私は口箆った。

「う、ううん。恋人はいなかったわ」

どうして突然こんな話になったんだろう。

そういえば、こんな話はまだアイリスともしたことがないかも、
と思いつく。

エリックはじつと私を見つめてから「そうか」と言った。

その後エリックは話をしようとはせず、私たちは無言で歩いた。

私は自分の足元に目を落として、歩く事に集中しようとした。昼
間はとりとめのない話で盛り上がったのに、今は全然そんな雰囲気
じゃない。隣で黙って前を向いて歩く横顔はなんとなく話しかけ辛
くて、私は変わってしまった空気にただ困惑していた。

第二章 突然の2

宿の前に着いて、お礼を言って扉に手をかけようとした時エリックが口を開いた。

「明日行ってしまうのか？」

さつきも話したはずだった。不思議に思って何気なく振り返る。でも、エリックの表情を見た私は言葉を失った。切ないような何かに耐えるような表情。そんな彼の眼を見て胸に湧いてきたのは何故か、罪悪感だった。

「え、ええ。明日の朝」

「どうしても行かないと駄目なのか？」

彼は追い討ちをかけるように一歩近づく。

そう、どうしても行かなくちゃいけない。私は一度だけ頷いた。するとエリックは一瞬目を閉じて息をついた。

「こんなこと、突然言っても信じられないかもしれないけど……、君が好きだ」

……すき……？

時が止まったような錯覚を覚えた。

口を開けたままの状態で言葉を搜す。でも、頭は真っ白だった。彼の真剣な目に囚われて目を合わせたまま、視線を動かすこともできなくなつた。

「え、……あ……、ど……」

何か言わなければ、と開いた口から出た言葉は意味を成さない。私の動転ぶりを見たエリックはふっと優しく笑つと「困らせてごめん」と言つた。

彼はそのまま宿の扉を開けて、戸惑う私の背を押して一緒に中に入った。

「サーシャ」

呼ばれてはつと向き直る。間近で見下ろされ、その近さに驚いている自分がいた。

「明日の朝、見送りに来てもいいかな」

言葉が喉に引っかかって出なくなった私は頷くのが精一杯だった。自分の心臓の音がびっくりするくらい大きく聞こえている。

エリックはもう一度優しく笑うと、少し背を屈めて私の頬に口付けた。

ぼけつと見返すことしかできない私に「おやすみ」と言う外に出て行った。

私はしばらく、キスされた頬に手を当てて呆然とその場に立っていた。

好きだつて……。

まだ心臓は激しく鼓動を刻んでいる。その意味を認識してしまった瞬間、顔も赤くなつていくのが分かった。

あまりにも突然すぎて夢の中の出来事みたい。誰かに好きだなんて言われたのは初めてで、どうしたらいいのか全然分からなかった。エリックは私の何を好きになつたんだろう……。

「ねえ、いつまでそこに突っ立ってるつもり？」

その声に肩を弾ませて振り返ると、なんとそこには三人がいた。

……う、そ……。

全員が興味津々といった様子で玄関から繋がるリビングのソファから私を見ている。今の出来事はばっちり見られていたらしかった。周りの見えてなかった私はすぐ近くにいたのに、気づかなかったのだ。

振り返って凍りついた私にアイリスが続けた。

「なるほど、そういうことだったのね」

にんまりと意味深に笑いながら。

私はそれを見て一瞬で現実に戻った。

「え、ち、違うわ。違うんだから！」

必死に否定しながらアイリスに駆け寄る。

何がそういうことなのか、何が違うのかは一先ず置いておいて、とにかく否定しなければと思ったのだ。さっきのを見てみんながどう思ったのかは分からないけど、少なくともアイリスはすごく勘違いしているような気がする。

「サーシャ、真っ赤だよ」

「なっ……！」

冷静な口調のロレンスに無表情で指摘されて、更に顔が熱を持つのを感じた。口をぱくぱくさせる私を見てロレンスはくつと笑う。どうやらからかわれたらしい。

それに気づいて少し冷静な思考が働くようになった。

そうだ、好きだって言われたのは見られていないはず……。

「ひどい。からかうなんて」

アイリスの隣に座り、恨めしい気持ちを込めて言う。

ロレンスは声を出さずに笑ったまま答えなかった。

遅くなった事を怒るかもしれない、と思っていたジェラルドはいつもの、私の少し苦手な感情の読めない表情。

怒ってるの……？

ジェラルドはじつと私を見据えたまま何も言ってくれない。その視線を息苦しく感じた時、隣のアイリスが突然立ち上がった。

本当に突然だったのでジェラルドまでなんだ、という顔をした。

「な、なに？」

彼女は立ち上がり、黙って私を見下ろしている。その無言の迫力に気圧された私は思わず聞いていた。

「さ、部屋に戻りましょう」

アイリスはにんまり笑った。自分の顔が引きつるのが分かった。アイリスの目的が何なのかは明らかだ。

「え、えつと、私もう少しここに居ようかな……」

するとアイリスはまたあっさり腰を下ろした。

「そう、いいのよ。サーシャがよければ。ここで始める？」

その言葉に今度は私が立ち上がった。

顔を見合わせている男性二人を見て、ここは絶対ダメと思う。

「……やっぱり、部屋に戻るわ」

その後、結局私はアイリスにすべてを語って聞かせることになった。

話を聞いたアイリスは少し切ない顔をして「困ったわね」と言った。

そう、困った……。

冷静になつてみれば、今の状況はその一言に集約されていた。

夜、ベッドの中に入っても全然眠れそうになかった。何度目ともしれない寝返りをうつ。

私は好きだと言われても何も出来ない自分に気づいたのだ。

恋してみたいとは思っている。けれど、そもそも、今の私には好きだという感情がよく分かっていない。

エリックの事は優しい人だとは思ったけど、それだけだった。出会ったその日に誰かを好きになれるものなんだろうか……。

明日見送りに来るって言ってたことを思い出すと困惑が募った。

どんな顔をして会えばいいんだろう。

私は明日ここを出て行くって知っているのに、どうして好きだなんて言っただろう。

まさかこんな事になるなんて……。

困り果てた私の深い溜息は暗い部屋に吸い込まれた。

第二章 苛立ち：ジェラルド

用を足しに一度外に出た俺は部屋に戻らず、そのままリビングで一人酒を飲んでいた。

なんとなく、今は眠れないだろうという気がしたのだ。

誰もいない暗いリビングには蝋燭と魔法で作った光だけが揺らめいている。その光を眺めながらさっきの出来事を冷静に思い返していた。

若い男と戻ってきた娘。

何があったのか、すぐ近くにいた俺たちの存在にも気づかないほど上の空だった。

惚けたように男を見ていた娘はいつにも増して綺麗だった。それを見て俺は強い苛立ちを感じたのだ。

帰りが遅かった事に苛立っているんだ、とあえてどうでもいい事を持ち出そうとする自分に自嘲的な笑いが漏れる。

……そんなわけあるか。

答えは明白だった。俺の知らない男と一緒にいたからだ。彼女はあの男に全く警戒心を抱いてはいなかった。オルディアであんな事があつたにも関わらず、だ。

しかし、少し警戒心がなさ過ぎるのに対しては苛立ちよりも心配が先に来る。

本当はとっくに出ている答えを認めたくないだけだった。

嫉妬だった。

男の嫉妬というこの世で最も醜い感情。そして自分とは無縁だと思っていたもの。

あの娘がもう子供ではないという事は分かっている。だがどこかで、あの娘は俺がいなければ何もできない子供だと思っていたがっている自分がいた。

何故か。

その答えを、今は深く考えたくないと思う自分がいた。できれば気づかなかったことにしてしまいたいと。

本当は気づいている。いや、もしかしたら、ずっと前からそこにあったのかもしれない。今まで見ようとしていなかっただけで。無意識のうちに押さえ込んでいただけで。

ただ、認めたくなかった。今まで誰も必要だとは思わなかったのだ。特別な存在などつくっては来なかった。そして、これからもそうだと思っていた。この感情を認めてしまえば、自分が自分でいられなくなるような気がした。

それにしても、何故あの娘なのか。

酒を煽る。やはり苛立ちは消えそうになかった。

この年になって自分の感情に説明がつかない時が来るなど思いもしなかった。

誰かの気配で二階へ続く廊下に目を向ける。

静かに入ってきたのは、頭を支配していた娘だった。

彼女は部屋の入り口で立ち止まった。手に小さなろうそくを持っているせいで逆に遠くの俺が誰だか確信が持てないらしかった。

「ジェラルド？」

返事をする彼女は側までやって来た。そのまま横の一人掛けのソファーに腰を下ろす。用を足しに外へ行くのかと思っていたが違うようだった。薄い水色の部屋着に今はガウンを羽織っている。蠟燭の光にぼんやりと照らされて、小さな顔の白さが際立っている。

「お酒？」

前のテーブルに置いてある瓶に目を留めて言う。

「ああ、何か飲むか？」

「じ、自分で……」

俺は頷いて立ち上がろうとする彼女を手で制して立ち上がった。そのまま先にカウンターを挟んだ台所まで行き、「暗いから」と声

をかけると彼女は渋々頷いた。

この娘は人に何かをしてもらう事に慣れていない。しかし、今日ここで食事をしなかった娘には何がどこにあるか分からないだろうと思っただ。ろうそくの明かりだけでうろうろするのは危ない。

俺の後ろからは魔法の光が後を追うようについてきていた。娘はそれに見とれているようだった。

「“お茶”でいいのか？」

「うん」

なんとなく声が上ずっている。それをおかしく思った。

娘は飲み物と言えば、“お茶”か“お水”だ。住んでいた所で飲んだことがあるのはその二種類と動物の乳、ハーブティー。しかし、後の二つは滅多に飲まないし、酒も飲んだことがない。

そして、“お茶”と言えば家の近くの畑で取れる紅茶しか知らなかった。しばらく旅を続けて紅茶にも様々な種類があると知った娘は納得したような表情をして説明を始めた。

城では毎回、食事をするたびに変わる“お茶”の味を疑問に思っていたらしい。

それを聞いて俺も納得した。カップに口をつける度に怪訝そうな表情になる娘が密かに気になっていたのだ。

今では町に行くたびに変わる“お茶”の味を楽しみにしていた。

俺はそのうち、茶色ではない“お茶”に出会ったら娘がどういう反応をするのか楽しみにしていた。北の方で日常的に飲まれる茶は発酵させていないままの薄緑色だ。

「まだ熱いぞ」

注意を促して、目の前にカップを置く。

「ありがとう」

俺を見上げてはにかむように答えた顔を見て、いつの間にか苛立ちが消えている事に気づいた。結局そうなのだ。苛立たせられるのもそれを解きほぐすのも全て彼女だ。

こうして俺が近くに座っていても娘はもう緊張しない。普段どおりの態度を向けられるようになっただけで喜ばしいなどと思うとは……どうかしている。

心の中で自分を呆れ笑うしかなかった。

「寝ないのか」

呑気^{のんき}に紅茶を飲んでいる娘に問いかける。もう後3時間ほどすれば朝日が昇るだろう。俺もだが、本来ならこんな事をしているべき時間ではない。

「なんだか、眠れなくて」

「明日も歩くぞ」

「うん……」

この娘はこれまで俺の予想以上に元気だった。しかし、暑い季節だ。体力の消耗も違うだろう。

「何かあったのか？」

彼女は俺を見ると、返事をしないまま首を傾げ微かに表情を曇らせた。

「あの男か？」

口にしてから何故こんな質問をしたのか、とどこか驚いている自分が見えた。

確認せずとも分かりきっているはずだった。

しかし、その原因にもすぐに気づいた。これも嫉妬だ。あの若い男がこの娘を眠れなくさせているのだと思うと無性に腹が立ったのだ。そして何故か目の前の娘も困らせてやりたいような気分になった。

ばれているとは思わなかったのか。純粹な娘は驚いたように目を見開き、それから口を開こうとしたが言葉にならないようだった。迷うように揺れる瞳。それを見るとますます困らせてやりたくなかった。

「想いでも告げられたか」

からかうように口の端を上げて見せると、娘は固まった。図星ら

しい。みるみるうちに耳まで朱に染まる。

分かりやすい反応だな、と苦笑する。これは共に過ごすうちに気づいたことだった。質問や声をかけたときに対する娘の反応は俺にも分かりすぎるほど分かりやすかった。この娘は言葉にして嘘をつくことが出来ないのだ。

「どうしたらいいの？」

しばらくして冷静さを取り戻したらしい彼女は意外な事を聞いてきた。不安げな声で、表情は深刻そのものだった。

「……俺に聞くな」

潤んだような目に見つめられて、思わず本音を返していた。

娘はそれにシヨックを受けたらしく俯いて黙り込んでしまった。気まずい沈黙だった。

勘弁してくれと思う。困らせてやろうと思ったのが逆に困らされるとは。

しかし、この質問に男の俺が答えるのは間違っているという確信があった。どうしたらいいのかはこっちが聞きたいくらいだ。それにこれは俺の専門外だ。聞くならロレンスに聞いてくれ。そう思ったが、このままだと朝までずっと下を向いていそうだった。

「ここに残りたいのか？」

心にもない質問だった。元より、ここに残れるはずがなかった。

俺たちは先に進まなければならぬ。そして娘もそのことをよく分かっているはずだ。

予想通り、彼女はとんでもないという顔ではつきりと首を横に振った。この表情を見る限り、あの若い男に気が行ったのではないらしかった。

そして、密かに安堵している自分には気づかない振りをする。

「なら、何を悩んでいる？ 明日出るのは元から決まっていたことだ。普通にしていればいいだろう」

「普通に……？」

娘はつぶやくと再び黙り込んだ。俺にはそれ以上何を悩むことがあるのか分からなかった。蠟燭と魔法の光に照らされる愁いを帯びた表情はいつもより数段大人びていて美しく、今にも消えてしまいうそに儚い。

俺はじつとその姿を見つめながら胸に湧き上がる感情と向き合っていた。

互いに何も言わないまま時間だけが過ぎていく。動きといえば、娘が時々思い出したように紅茶に口をつけるだけ。

結局、俺たちはそれ以上話をせず、娘は紅茶を飲み終わると「おやすみなさい」とだけ言って部屋に戻って行った。

翌朝、出発間際に若い男が子供を連れてやってきた。

俺は極力彼女から目を逸らし、醜い感情を押さえ込むことに集中していた。

第二章 小人

眠れなかった不安はルークとリリーと一緒に来ていたことで杞憂に終わったのだった。私は見送りに来てくれたエリックに驚くほど普通にお別れを言うことができた。彼も私を好きだと言ったことは触れなかった。

……はあ……。

疑問だけが残った。どうして、好きだって言ったの。すぐに離れ離れになると知っていたのに、どうして。それは日常のふとした瞬間に胸を過ぎった。気にする必要なんてないはずなのに何故か不意に思い出す。あの時のエリックの切なげな目とどこか悲しそうな表情を思い出すたびに、理由の分からないわずかな罪悪感が込み上げるのだった。

恋って難しい……。

私は夏草が勢いよく生い茂る足元を見て、密かにため息をついた。あれからもう二週間ほどが経ち、4つか5つの村を越えていた。

お昼前ごろ、森の奥の方で何かが動いたような気がして私は目を凝らした。そして、少し近寄ってその正体を知った私は興奮を抑え切れなかった。

……小人が……歩いてる……！！

三人の小人が一行に並んで森の奥へ入っていくところだった。

私は驚きと感動に目を丸くした。遠くからだからはっきりは言えないけど、背丈は私の膝ぐらいしかないと思う。お揃いの赤いズボンに茶色の上着を着て黄色い帽子をかぶっている。それぞれ手に籠のようなものを持っていた。

休憩しているみんなから離れて、こっそり追いかけようとした私は思ったとおり、ジェラルドに気付かれてしまった。

「どこへ行くんだ？」

近づいて来た彼は呆れたように半分目を伏せている。

「しー、小人がいるの」

指をさして、相手に気づかれぬように囁く。

「小人？それがどうした？」

私の横に立つたジェラルドは指差す先を見て怪訝そうな顔をした。それがどうしたって……。

彼は全然興味がなさそうだった。

「小人よ？」しつこく訴えてみる。「どこに行くのか気にならない？」

そう言っている間にも小人たちは森の奥へ入っていく。私の訴えを聞いたジェラルドはなんだかめんどくさそうな顔をした。

初めて本物の小人を見たのだ。子供の頃のおとぎ話の登場人物。まさか本当にいるなんて。彼らについて行ったら本物の小人のお家を見ることが出来るかもしれない。本当におとぎ話の通りなんだろうか。こんな機会はもう、ないかもしれない。

このままじゃ見失っちゃう……。

ジェラルドが何も言わないのをいいことに、私は小人たちの後にこっそり着いて後を追いつつ始めた。ジェラルドが後ろから渋々ついて来ているらしいのが分かった。

どれくらい進んだんだろう。

森に突如として現れたのはすごい大木だった。町の建物のように太くて大きな木。その木の洞に、小人は家を作っているみたいだった。上のほうには窓のようなものもある。

三人の小人は木の幹に取り付けられた赤い小さな扉を開いて、並んで中へ消えて行った。

……すごい。木の中に住んでいるんだ……。

疑問が解決した私は大満足だった。感心の溜息と共に彼らの家を目に焼き付ける。

おとぎ話の中では小人たちは木の家に住んでいた。そして私も小人はそういうものなんだと信じていた。こんな事、きっと誰も知らないはず。小さい頃、小人のお話をしてくれた牧師さんに言ったらどんな顔をするだろう。町みんなは？それを想像するだけでわくわくした。

「もういいか？」

さっきまでの呆れた様子は諦めに変わっていた。

これを見て何とも思わないなんて。

「すごいね？」

ジェラルドの顔を見上げて同意を求めてみると、彼はちよつと首を傾げて「ああ」と返事をした。

本当にそう思っているのか怪しい……。

私はその曖昧な返事に密かに眉をしかめた。

「いいな。二度と一人でうろろするな」

帰り道、私は諦めも通り越したジェラルドに無表情で注意されることになった。

「……はい。ごめんなさい……」

彼の言う通りだった。ぐうの音も出ない。

ジェラルドがついてきてくれて本当に良かったのだ。小人について行くのに必死で周りを見ていなかった私は、自分の位置が分からなくなっていたから。きっと、一人だったら完全な迷子になっていた。

「二人で居なくなつたと思つたらそんなことしてたの！？なーんだ、がっかりだわ」

二人の元に戻って興奮気味に今までの出来事を報告した私に、アイリスが期待はずれだという顔をした。アイリスも小人には興味がないみたいだった。

それにしても、がっかりだなんてひどい。

「ロレンスは知りたくない？小人よ？見たことある？」

何も言わないロレンスに同意を求めてみる。

「見たことはないけど……、何がそんなに楽しかったの？」

彼は明らかに笑いを堪えていた。

それが少し気になりながらも、やっと小人について聞かれた私は意気込んで答えた。

「すごく大きな木だったの！その中に住んでいるのよ。それに小人もすごく小さくて可愛い。これくらいしかないの」

言いながら、膝の高さくらいの手で示す。

すると隣で呆れたような声がした。

「ただの木の洞だろう。それに顔はじいさんだったじゃないか」

冷めた口調。やっぱり、さつきすこいって言ったのは嘘だったんだ！

「そんな言い方、あんまりだわ！」

わざわざ付き合ってくれたという事が頭から綺麗に消えた私は、思わず、キツとジェラルドを睨みつけて叫んでいた。すると突然、我慢できなくなったらしいロレンスが弾けるように笑い出した。アイリスも一緒に大笑いしている。

そして、睨みつけたはずのジェラルドにまでくつと笑われ、顔を背けられたのだ。後姿しか見えないけど、口元を手で押さえて笑いを堪えている様子。これが私に止めを刺した。

かつと顔が熱を持つ。

……ひ、ひどい……っ！

頭の中で、何かが音を立てて切れた。

第二章 小人（後書き）

どうでもいい後書き

サーシャ、キレル（笑

彼女の興味のツボや好奇心の対象として何を持ってくるのかは、なかなか悩まされます。

シリアスなはずなのにまったくのんびりになっている第二章。二章前編の終わりにくらくらいまではこんな感じになりそうです。

シリアスを期待されている方、ごめんなさい。でもきっとシリアスな時はどうしようもなくシリアスです。きっと。

第二章 仲直り：ロレンス

「ちょっとサーシャ、そんなに怒らなくてもいいじゃない」

「別に、怒ってないわ」

「笑ったのは君が面白かったからじゃないんだ」

「いいのよ、本当に」

「もういい加減に機嫌直して？謝ってるじゃない」

私とアイリスは歩きながら、サーシャをなだめるのに必死だった。彼女は完全に怒っていた。笑わないし、目を合わせようともしない。全員に笑われたがよっぽど堪えたらしい。笑いが治まらない私たちに向かって「そんなに笑わなくてもいいじゃない！」と怒ったように言ったのが最後だった。

あれが昼前だったからもう結構前になる。空はもう夕焼けから薄い闇色に変わろうとしていた。

本当にサーシャが面白くて笑ったわけではないのだ。あのジェラルドの発言だ。あれで、好奇心で目をきらきらさせたサーシャとその後を嫌々ついて行くジェラルドの姿が頭に浮かんだのだ。

この男が娘の言いなりとは、な……。

旅を始めるまではこの男のこんな一面を知ることになるとは夢にも思わなかった。軍の男たちがこれを知ったらどう思うだろうか、と考えればまた笑いが込み上げて来そうになる。

しかし、笑っている場合ではない。今はサーシャの機嫌を直す事が先だった。

サーシャが怒ったのは初めてだった。ずっと素っ気ない態度の彼女は見ていて楽しくない。4人の空気がどうしても沈んでしまうのだ。

それにどうも、彼女も怒ってしまった手前、引つ込みがつかなくなってしまうらしい。謝り続けている私たちがいけないのかもしれないが、許すタイミングを見失ってしまったようだった。やや困

惑しだしたのが窺える。

「今日はここで休む」

その言葉にとりあえず、私たちは野宿の準備を始める事にした。なんとなく決まったことだが、焚火の準備はジェラルドとアイリス。食事の準備はサーシャと私だった。これはチャンスだ。

「サーシャ、果物を集めに行くだろう？」

普通に問いかけた私に彼女は少しほっとしたような表情をみせた。
「ねえ、私も行くわ」

ジェラルドに焚火の準備を委ねたらしいアイリスが近づいて来る。彼女も許してもらおう機会を探しているらしい。

私たちはジェラルドを残しその場を離れた。探し始めてすぐにブラックベリーとグミを見つけ、しばらくの間、それぞれが目に見える距離に散らばって黙って実を集めていた。

私はそつとサーシャに近づき、後ろから声をかけた。

「サーシャ、そろそろ許してくれないか？」

振り向いた彼女は氣まずそうな顔をした。何を言おうか少し迷うように瞳を揺らしてから口を開く。

「……どうしてみんな笑ったの？」

「君の言葉とジェラルドの印象の違いが面白かったんだ。君が可笑しかったからじゃない。アイリスも同じだと思うよ」

「そう……。でも、本当に可愛かったのよ」

サーシャは真剣な表情で再び小人の可愛さを訴える。彼女は小人が好きで仕方がないらしい。その子供のような無邪気さに頬が緩んだ。

「見れなくて残念だったよ。今度出遭ったら教えてくれる？」

「うん」

嬉しそうにはにかんだ彼女を見て、君の方がよっぽど可愛いよ、と思う。

「サーシャ」

アイリスも珍しく神妙な顔をしている。

「ごめんね？」

サーシャはそれに首を振りながら答えた。

「もういいわよ。私も、ずっと怒っててごめんなさい」

「よかった」

近づいて来たアイリスとサーシャは軽く抱き合った。

「ねえ、じゃあどうしてジェラルドは笑ったの？」

帰り道、突然サーシャが思いついたように言った。

「さあ、どうしてだろうな」

私はあえてとぼけて見せた。もちろん、理由は分かっている。怒ったサーシャが可愛かったからだ。だが、彼は今まで一度も謝っていない。ずっと自分には関係ないという顔をして一番前を歩いていたのだ。

あの男が自分で蒔いた種だ。私が世話してやる必要はどこにもない。

私の言葉を聞いたサーシャは困惑した顔で考え出した。それを見て、私の意図に気づいたらしいアイリスが呆れたように見上げてくる。

私はそれに肩をすくめてみせた。生憎、男に優しくする精神は持ち合わせていない。

果たして、あの不器用な男がどのようにに謝るのか。これは見物だなと思った。

案の定、サーシャのジェラルドに対する態度はどこかぎこちなかった。彼もその事に気づいてはいるらしいが触れられないようだ。私たちに対する態度が元に戻っているせいでお更だろう。

さすがにこの空気では謝りにくいかな……。

少し気の毒な気分になっている自分に気付いて心の中で苦笑する。

どうも完全に高みの見物とはいかない性格らしい。

「このままでいいのか？」

ジェラルドに何気なく近寄り小声で話しかける。女性二人は焚火を挟んだ反対側にいた。薬草について熱心に話し合っている。

「いいわけあるか」

「謝らないと許してもらえないぞ」

「……………」

沈黙の後、森の闇に視線をやったジェラルドは大きな溜息をついた。

「悪かった」

考え込んだのかと思ったら、突然、焚火に向かって声をかけた。よく通る低い声が静かに響く。

もつとスマートな方法はなかったのか……。

一瞬呆れたがすぐに思い直した。

……いや、この方がこの男らしいか。

サーシャはぽかんとこちらを見て、しばらくしてからようやく自分に対しての言葉だと気づいたようだ。戸惑ったような表情でゆっくりと口を開いた。

「ジェラルドはどうして笑ったの？」

すると、サーシャの側のアイリスが笑いを堪えるような表情になった。ジェラルドには予想外の質問らしかった。僅かに目を見開いた後、口元に手を当てた。いつも冷静な受け答えのこの男が必死に言葉を探している。

……これは珍しい。

私も密かに笑っていた。

「サーシャが可愛かったからじゃない？」

しばらくの沈黙の後、アイリスが中途半端な救いの手を差し伸べた。まるつきり他人事のような口調。さすが、彼女だ。

「可愛いから笑うなんて、そんな事あるわけないでしょう！」

サーシャはそれはおかしいという横目でアイリスを見ている。確かに、なかなか説明し辛いかもしれないと思う。サーシャには分からないだろう。

「いいや、アイリスの言うとおりだ。可愛かったから笑った」

突然放たれた言葉に驚き、隣を見て更に愕然とする。彼の表情は真剣そのものだった。

四人の間を沈黙が支配した。ジェラルドが乗ってくるとは思っていなかったのだろう。アイリスまで驚いた表情のまま男を見て動きを止めた。

焚き木のはぜる音だけがやけに鮮明に聞こえている。

まさか、ここまではつきり口にするとは……。

開き直ったのか。焚火を挟んで顔を見合わせた私とアイリスは呆れるしかなかった。

「可愛かったから笑ったんだ。許してくれるか？」

何を思ったか、しばらく待っても返事がないと知ったジェラルドは再び可愛いを繰り返した。しかし、甘い言葉とは裏腹に言ってサーシャを見るその表情は真面目なまま。側で聞いているこちらの方が恥ずかしい気分になる。

全く、この男は……。

思わず息をついて髪をかき上げる。このきつかけを作り出した自分を呪いたいような気分だった。

追いつめられた可哀想なサーシャは赤い顔で頷くのがやっと。こんな言われ方をされて許さないと伝えるわけがない。だが、これでは想いを告げたのと同じようなものだった。

仲直りどころか、これで明日からも普通どおりやって行ける方がどうかしている……。

気まずい沈黙が支配する中、私は二人の明日を心配した。

第二章 仲直り・ロレンス（後書き）

第二章 小さな違和感

朝だ……。

そつと目を開けると燃え尽きた焚火が目に入ってきた。それを見た瞬間に昨日の夜の出来事が頭の中に蘇る。焚火の炎の向こう側で私を見ていたジェラルドの真剣な眼差し。

可愛いつて……言われた。

思い出した瞬間にまた顔が赤くなるのを感じて私は慌てて目を閉じた。誰にも気付かれないように眠っているふりをする。昨日も結局どう返したいのか分からなくてとりあえず膝を抱えて顔を隠すように下を向いていたらそのまま眠ってしまったらしかった。座ったままのはずだったのにいつの間にかちゃんと横になってローブに包まっている。

どうしてあんな事言っただろう……。

しばらくそのままの状態で、起きてからどんな顔をすればいいのかを考える。

誰かが遠ざかるような足音で再び目を開けた。このままずっと寝たふりをしてるわけにもいかない。体を起こして音の先に目をやるとロレンスの後姿が遠ざかっていくのが見えた。多分用を足しに行くのだと思つて目を戻す。するとジェラルドとばつちり目が合った。「……おはよう」

言ってから、普通に話しかけた自分に驚く。習慣つてありがたい。「ああ」

いつもどおりの素っ気ない返事が返ってきて、座っていた彼は立ち上がった。そのまま焚火のところへ行つて燃え跡を足で踏みつける。

その音でアイリスも目を覚ましたらしかった。もぞもぞと動いて

から体を起こすと立っているジェラルドを見上げてから私を見た。

「おはよう」

「うん、おはよう」

……いつもと同じだ……。

ほっとしているとロレンスが戻ってきた。

「すぐ向こうに小川があった。水を汲みに行くついでに朝食は向こうで取ろう」

その言葉に私とアイリスはのっそり起き上がり、ロープの汚れを払う。今日は珍しく曇り空だ。風も少し強め。厚い灰色の雲に覆われて空気もかなり湿っている。

雨が降りそう……。

先に立って歩き出したロレンスの後姿を見て、焚火の跡を消しているジェラルドを振り返った。私の視線を感じたらしい彼は顔を上げる。

「先に行つていいぞ」

それを聞いて私は歩き出した。

やっぱりいつも通りだ。きっと、可愛いつて言ったのは怒っていた私をなだめるためか冗談だったんだ。悩むことなんてなかったじゃない。それに気付いて急に気分が晴れた私は足取り軽くロレンスとアイリスを追って駆け出した。

久しぶりの雨だった。

歩き始めてしばらくしてぽつぽつと降り始めた雨はどんどん強くなつていった。風も強くなる一方だった。雨に降られると夏でも肌寒い。私とアイリスは頭からすっぽりローブを被っていた。髪が濡れるとややこしいからだ。

夕方には大雨になり、ちょうどその頃私たちは村に着いていた。小さな村だけれど一軒だけ宿屋があった。

「ひどい天気ね。大変だったでしょう？」

宿に入るとその娘さんらしい私と同じ年くらいの女の子が迎えてくれた。私たちは全身ずぶ濡れだった。

「ほんと、暑いのも困るけどこれも困るわ」

アイリスがローブのフードを脱ぎながら愚痴を言う。そんなアイリスの後ろに立ったロレンスは何も言わずにローブを外すのを手伝っている。当然のような慣れた手つき。

それを見て、やっぱりロレンスは王子様なのかもしれないと改めて思う。ロレンスはまだ顔も髪も雨に濡れたままだ。

「脱がないのか？」

私はその声で我に返った。私はまだフードも被って突っ立ったままだった。フードを脱いで前の革紐を解くと後ろからジェラルドがローブを取ってくれた。ずぶ濡れの外側が私の着ている中の服に当たらないように。彼も手馴れている。

……ジェラルドも王子様だったの……？

なんだか思考が混乱していると思った。自分でも何を考えているのかよく分からなくなってぼうつと見ているとジェラルドは手にした濡れたローブをそのまま器用に折り畳んで自分の腕にかけた。ジェラルドの短い黒髪もまだ雨に濡れていて落ちた水滴が頬や首筋を伝う。

「なんだか、いつもと違う人みたい……」。

「なんだ？」

怪訝そうな顔を向けられて、ジェラルドを見つめていた自分に気づいた私は慌てた。目を逸らして、なんでもないと首を振る。

「ありがとう」

「タオル使って」

宿の娘さんの差し出したタオルで顔と髪を軽く拭いたジェラルドとロレンスは自分でさつとマントを外した。

「部屋は二つでいいかしら？」

「ああ」

「こっちょ」

ジェラルドはいつものように先に立って歩き出す。

「ねえ、私のローブは？」

彼が持つて行ってしまったのだ。隣のアイリスに聞く。

「宿の人に預けるんでしょ」

アイリスもローブを持つていない。前を歩くロレンスが自分のマントと一緒に腕にかけていた。

……あ、そうか。乾かしてもらったため。

そこでようやくその事に気付く。いつも宿に泊まったらそこで洗濯等もしてもらっている。

「なによ？大丈夫？」

「うん……」

何かがおかしい。でも、どうおかしいのかはよく分からない。自分でも説明できない小さな違和感が胸の中に生まれていた。

「どうぞ」

目の前にお茶が置かれる。見ると宿の娘さんが笑顔で隣に座った。

「ありがとう」

私も微笑み返す。一度部屋に案内されてから私は一人食堂に下りてきていた。なんとなくだ。みんなはまだ部屋にいる。

「どこから来たの？」

同じ年くらいの彼女は私に興味を持ったらしかった。

「エルンよ」

もう何度も答えた答えだった。

「遠くから来たのね。南の方の大きな町よね？私はマリーヌよ。マリって呼んで。ここの一娘なの」

はきはきしたしゃべり方で親しみの持てる笑顔。仲良くなれそう。

「私はサーシャよ。短い間だけどよろしくね」

「ずっとここで色々な人を見ているけど、あなたみたいな人が来るのって珍しいわ。町の人でしょう？やっぱりどこか雰囲気が違うわ

ね。あなたも綺麗だけど、あなたの旦那さんもすごく素敵ね」

マリーは私を感心したように見ると納得したかのように何度か頷いた。

「えっ？私のなに？」

本当はエルンの生まれじゃないんだけど、と思いながら聞いていた私は最後の言葉に驚き、聞き違いかと確認した。

「あなたの旦那さんよ。素敵な人ね」

彼女は悪意のない笑顔でにっこりした。

「わ、私、結婚してないわよ！」

慌てて否定しながら、前にも言われたなと頭の隅で思う。

「そうなの？てつきり夫婦なんだと思っただわ。ごめんなさい」

「私と誰がそう見えたの？」

何故か怖いもの見たさの心境だった。恐る恐る聞いた私にマリーはあっさり答えた。

「あの背の高い黒髪の人よ」

ジェラルド……。

今、自分はどんな顔をしているんだろう。すごく複雑に思っている自分がいた。周りにはそんなふうに思われているなんて。

妙に恥ずかしいような、痒い^{かゆ}ような……？なんて言ったらいいの
か分からない。

「どうして？」

「そうね……、あの金髪の綺麗な人ともう一人の女の人の雰囲気
どこことなく似ているからかしら。四人だし、だったらあなたたちも
そうなのかなって思っただ」

それって、なんとなくって事？それを聞いてますます複雑な気分
になる。

でも、ロレンスが綺麗な人って言われた事がなんだか可笑的い。

「二人も夫婦じゃないわよ」

笑いながら言うマリーは驚いた顔をした。

「そうなの？じゃあ、みんな特に関係がないのに旅してるのね。」

ますます珍しいわ」

そう言われるとどう返していいのか分からない。でもマリーは返事がないことを気にしていないみたいだった。

「あの黒髪の人、なんていう名前なの？」

「ジェラルドよ」

「彼は結婚してるの？」

「……えっ？」

意外な質問にたじろぐ。

そうだ。私は結婚していないし、私とジェラルドも結婚していない。

でも、もしかしたらジェラルドは結婚しているかもしれない。それにロレンスも。

どうして今までその事に気付かなかったんだろう。お城には奥さんがいるかもしれないのだ。彼だつてとつくに結婚していてもおかしくはない年齢だ。

そしてそこまで考えてまた気付いた。

……年齢って……、ジェラルドって何歳……？

こんなにも一緒に居るのに私は彼の事を何も知らない……。

「ごめんなさい。知らないわ」

急に落ち込んだ私に驚いたのか、マリーは少し慌てた。

「嫌だ、私何かいけない事を聞いたかしら？」

それを聞いて私はますます落ち込んだ。自分が悪いのにマリーを慌てさせるなんて。

「ううん、ごめんなさい。なんでもないの。どうして気になるの？」

「あなたは気にならないの！？彼すごく素敵じゃない！」

マリーはきらきらした目だ。私はそれにびっくりして思わず聞いてしまっていた。

「素敵？怖くないの？」

聞いてしまつてから、ジェラルドに失礼だわと心の中で彼に謝った。なんだか今日の私はぼやっとし過ぎている。

「一緒に旅してるのに彼が怖いのか？私はいろいろな旅の人を見てきてるけど、もつと怖い人なんていくらでもいるわよ」

「い、今は怖いと思ってるわけじゃないけど……」

私はもごもご言い訳した。

「ねえ、どこが素敵なの？」

さつきからずつと気になっていたことだ。ジェラルドを見て素敵だと言い切るマリィはすごいと思う。

彼女は明るく笑った。

「あなたは全然そうは思っていないって感じね。ええっと、そうね……、落ち着いてて大人の男って感じがするわ。それに遅しいじゃない？腕とか胸とか。すごく強そう。あと、ちよつと鋭い目も男らしいし。鋭いけどすごく綺麗な青い目よね」

うつとりと話すマリィを私はぽかんと口を開けて見ていた。やっぱりマリィってすごい。彼女にしてみればジェラルドの目はちよつと鋭いだけなんだ。

でも確かに、ジェラルドの瞳はすごく綺麗な明るい青色だと思う。眼が合うたびにそう思っていた。今まで旅する中で多くの人を見てきたけど、彼ほど綺麗なブルーの目の人にはまだ会ったことがない……。そ、そうじゃなくて！

なんだか自分がとんでもなく恥ずかしい事を考えていたような気がして、思わず頭を振ってその考えを追い払う。

「まあ、お茶入れましょうか？」

マリィの明るい声でふと目を上げる。食堂に入ってきていたのはジェラルドだった。

……わ……っ……！！

気付けば、私は隣で立ち上がったマリィと一緒に立ち上がっていた。

「あら、どうしたの？」

マリィに不思議そうな目を向けられて、私はゆっくりと腰を下ろした。

私が立ち上がる必要なんてないじゃない……。

「うっん、何でも」

誤魔化すように言って笑うとマリーは「ふーん」と言っ
て軽く笑みを浮かべて二、三度頷いた。

第二章

小さな違和感（後書き）

第二章 お酒

「もうすぐ夕飯よ」とマリーに言われた私とジェラルドはそのまま食堂で待っていた。もうすぐと言われて部屋に戻るのもおかしいし……と考えると動けなかったのだ。

彼はマリーに入れてもらったお茶を静かに飲んでいた。私の前にもマリーが入れ直してくれたお茶が湯気を立てている。

なんとなく彼と目を合わせにくい気分の私は置いてあるカップに手をかけたままじっと中を見つめていた。

「気に入らないのか？」

えっ、と思つて顔を上げると向かいに座っていたジェラルドが私を見ている。

「ううん、どうして？」

「さっきからカップの中を睨んでいるだろう？」

「に、睨んでなんか……」

確かに、ずっと見ていたけどそんなに怖い顔してた？

私は自分の表情に自信が持てずに中途半端に返す。ジェラルドは軽く口元を上げると鼻を鳴らした。

それを見てまた胸に小さな違和感が生まれた私は何も言わずにお茶を口に運ぶ。さっきも飲んだ。初めての味だけどおいしいお茶だ。「おいしいよ」

つぶやくと彼は「そうか」と言った。そのまま少し気だるげにテーブルに頬杖をつく。視線は窓の外に向けられていた。

こんなふう二人きりでテーブルを挟んで座つたのは久しぶり……。

出遭つた頃はこれだけですごく緊張していた事を思い出す。初めては教会で。それからはお城の部屋で食事をした何度か。そのどちらの時も、ジェラルドは近寄りにくい雰囲気だった。

鋭い眼差しと真っ直ぐに伸びた背筋。私から話しかけるにはすごく
勇気が必要だった。

でも今は……？

そつと目を上げると目の前に肩の力を抜いて頬杖をついているジ
ェラルドがいる。旅を始めてからしばらくすると、彼はこういう姿
を見せるようになった。私ももう緊張しない。話しかけることだっ
てできる。そう思うと自然と頬が緩んだ。

近くでゆっくりジェラルドを見る機会なんてそうそうない。そう
考えた私は彼が外を見ているのをいいことにその横顔をすっかり盗
み見ていた。

ジェラルドははっきりした色をしている。綺麗なブルーの瞳に綺
麗な漆黒の髪。時々金髪にも見えるぼんやりした茶色の髪の私とは
大違い。色に迷いが無いのは性格の表れかもしれないと思っ
てしま
う自分が少し情けない。

そして今まで気付かなかったけれど、力が抜けて半分伏せられた
目の睫は意外と長い。睫とすっきりした眉も曇りのない黒だ。改め
て見ると、少し彫りの深い目鼻立ちは繊細ではないけれど、整って
いるのかもしれない。顎のラインから首にかけては鋭い印象。日に
焼けた肌としっかりした太い首は確かに、マリーの言っていた『遅
しい』の意味が分かる気がする。

そして顔を支えている手。思わず自分の手をテーブルの上に置い
て見比べる。太くて長い指、厚い手のひら、大きくて骨ばった手は
自分の手とは全然違う。爪の形まで違う。私の手だってアイリスの
手と比べるとそれほど綺麗じゃないけど、ジェラルドの手は明らか
に荒れた男の人の手だった。

こんなにも違う……。

そつ、落ち着いて見ればこんなにも違うのに、余裕のなかった私
は気づかなかった。

これから過ごす時間の中ではもっとたくさんの違いを見つかるん
だろう。それとも、似ているところが見つかるんだろうか……。

私は自分の両手をテーブルに並べて眺めたまま、ぼんやり考えていた。

ふっと息を漏らす音が聞こえて顔を上げるとジェラルドは私を見てなんとなく面白そうな顔をしていた。

「今度は手か？」

それを聞いて急に恥ずかしくなった私は慌てて両手を引っ込めた。
「今は睨んでなかったわ」

今度はしっかりと反論する。

でも、それはジェラルドに薄く笑みを浮かべるだけでかわされた。彼はテーブルについていた腕を元に戻して私に向き直った。

「明日もこの調子ならもう一日ここに泊まることにする」

それを聞いて窓の外に目を向ける。ガラスを叩く激しい雨は止みそうにないし、風もさつきから強くなる一方だった。時々、窓がたたたと音を立てる。

「ひどくなりそう？」

「ああ、おそらく。嵐だな」

「もうすぐ夏が終わるのかな。今日が野宿じゃなくて良かったね」
宿に入る時にも思っていたことだった。にっこりしてジェラルドを見ると彼は頷いた。相変わらず口数は少ない。でも、その眼はもう鋭くない。もう、怖いとも思わない。

いつかは慣れる

本当にアイリスの言っていた通りだったわ、と私は前の雨の夜の出来事を思い出していた。

それからすぐに食事になった。

この村ではワインが名産らしく、三人はゆっくりお酒を飲んでいく。私はもっぱら食べるだけだ。

「ねえ、明日もここにいるんだからサーシャも飲んでみる？」

聞かれて赤っぱい葡萄酒色の飲み物を凝視する。今まではお酒を試

して次の日動けなくなったら大変だからという理由で飲まなかったのだ。明日もここにいるのならその理由はなくなる。

でも、私はお酒にそれほど興味がなかった。

「うーん、どうしようかな……」

「サーシャが消極的なのは珍しいね」

ロレンスが食事の手を止めて私を見る。

「嫌いなのか？」

「嫌いじゃないわ。飲んだことないから分からないもの」

アイリスの手中的グラスで揺れる飲み物。何故か躊躇してしまふ。酔うってどんな感じなんだろう。アイリスもわりとお酒には強いらしく酔った状態を見たことがないのだ。

「やめておけ。お前もだ、子供に飲ませるな」

ジェラルドが私とアイリスを順番に見て言い放った。

子供って……。

そう思われているんだろうとは思っていたけど、目の前ではつきり言われるとやっぱりショックだ。

それにさっきジェラルドはアイリスにはお酒を注いでいたのに……

……。アイリスは違うのか？

「あら、サーシャはもう18よ。子供じゃないわよ。ねえ？」

アイリスが私の気持ちを代弁してくれた。それに力強く頷く。

「ねえ、ジェラルドは何歳？」

彼にしてみれば、何歳なら子供じゃないんだろう。そう考えてさっきのマリーとの会話を思い出したのだ。ジェラルドには話の流れが見えなかったらしく顔を上げて私に目を留めて、それでも普通に答えた。

「28だ」

10歳も違う……。

28歳と言われてみても私にはピンと来なかった。男の人の28歳が若いのかそうじゃないのか。女の人だったら分かるけれど。

でも、私と10歳違えば8歳だ。確かに子供かもしれないと

りあえず納得することにした。

「結婚してるの？」

ついでにもう一つの疑問も聞いてみる。

「……いいや、何か今の話と関係あるのか？」

彼は明らかに怪訝そうな顔をした。

「ううん、聞いてみただけよ。ロレンスは？何歳？」

ジェラルドの隣で不思議そうな表情のロレンスに目を向ける。

「26だ。結婚もしていないよ」

「そう」

……後でマリーに教えてあげなくちゃ。

みんなは私の突然の質問に不思議そうなままだった。

「ねえ、酔ったらどうなるの？」

空気を変えようと話を戻す。そう、お酒の話をしていただった。

私に顔を向けられたアイリスは手元のグラスに一度目をやった。

「え、私？私が酔ったらどうなるか？」

「なに？アイリスは特別なの？」

「ううん、そうじゃなくて。人によって酔うとどうなるかは違うと

思うのよ」

「そうなの？アイリスはどうなるの？」

アイリスは何故か言葉に詰まった。彼女は前の男性二人に目を向

ける。するとロレンスがにっこり笑った。

「私もぜひ知りたいな」

アイリスは少し眉をしかめて渋々口を開いた。

「……悲しくなるのよ。突然涙が止まらなくなるの」

それを聞いたロレンスが声を出さずに笑った。ジェラルドまで笑

いたような顔をしている。アイリスがジェラルドを見て眉を顰める

とジェラルドはあからさまに目を逸らした。

「もう、だから嫌だったのよ。笑わないでよ！」

私は驚いていた。お酒って楽しくなるものだと思っていたのだ。

怒ってしまったけど、こうなると分かっているきちんと答えてく

れるアイリスは優しい。

「ちよつと、アイリスに失礼だわ」

私が言うと、ロレンスは咳払いをしてアイリスを見た。

「確かにそうだ、悪かったよ。アイリス、怒った？」

アイリスはじとつとした目で見返した。

「あなたは？どうなるの？」

「記憶がなくなる。それにどうも気が短くなるらしい。殴り合いの喧嘩をしたこともあるみたいだ。私は覚えていないが」

ロレンスは肩をすくめてあつさり言った。

アイリスと私は思わず顔を見合わせた。ロレンスがそんな事をするなんて信じられない。

「お酒つてすごいのね」

しみじみと言うとロレンスがゆるく笑った。

「適度に飲めば大丈夫だよ」

「ねえ、あなたはどうなるの？」

アイリスがジェラルドに聞いた。

ジェラルドは口を開きかけて私を見ると何故か一度口を閉じた。

しばらくそのまま考えるような素振りをみせる。それから首を振って答えた。

「言えないな」

「ははあ、……なるほどな」

ロレンスが面白そうに言うときジェラルドは横目で彼を睨む。私の隣ではアイリスが静かに笑っていた。

「なに？何ができるほどのの？」

「言えないんだって」

アイリスが私を見て笑いながら言う。

「アイリスは分かったの？」

彼女は含み笑いをしたまま答えない。

「ロレンスも分かったの？」

ロレンスも私を見てにつこりしたけれど答えてくれない。

「どうして？どうなるの？」

みんなあれだけで分かるなんて。ジェラルドは知らん顔で食事を再開している。

「どうして教えてくれないの？」

思わず隣のアイリスの腕を揺する。彼女はまだ笑っている。

「サーシャも飲んでみれば分かるんじゃない？」

「……じゃあ、飲むわ」

「本当に？」

少し驚いた顔を向けられる。みんなだけ知ってるのに私だけ知らないなんて。半ば投げやりな気分だった。私も酔ってみれば分かるかもしれない。

「おい、やめておけ」

「じゃあ、教えてくれるの？」

期待を込めて聞くとジェラルドはまた口を閉ざした。それを見て今度こそ心を決めた。

「……教えてくれないジェラルドが悪いんだから。」

「私も飲むわ」

第二章 頭痛

ガタガタという音で目が覚めた。外はまだ嵐だ。光が入って来ない部屋は薄暗い。

今、何時くらいなんだろう……。

そう思っではっと飛び起きた。

「……痛っ……」

その瞬間、目の前が揺れるような気分とひどい頭痛がして私は再び枕に沈んだ。

……お酒だ……。

そうだった。昨日の夜は意地を張ってお酒を飲んだのだ。でも、それからどうなったの？

覚えてない……。

私は天井を見つめて真っ青になった。まさか喧嘩したりしてないわよねと不安になり、どこにそんな相手がいるのよ、と冷静に自分に言い聞かせる。服も着替えないまま寝てしまったみたいだ。恥ずかしい事をしていたらみんなに合わせる顔がない。私はしばらくの間、ぐずぐずとベッドの上で悩んでから、頭痛を堪えて下に降りた。「サーシャ！」

よろよろと階段を降りた途端、アイリスの声がキーンと頭に響いた。

「しー、頭が痛いの」

顔をしかめて情けなく小声で返す。私を見たアイリスははっと口を噤んだ。

「ごめんなさい。大丈夫？」

そのまま一番近いリビングのソファに腰を下ろした。そう言えば少し胸もむかむかする。

「はい、お水飲んで」

静かに渡された水を飲む。幸い、男性二人はリビングにいなかった。

た。

「サーシャ、おはよう！ご飯食べるでしょ？」

食堂に繋がるドアから明るく顔を覗かせたマリーの声がまた頭にキーンと響いた。

アイリスが苦笑いしたのが分かった。

「……ごめんなさい。いらないわ」

こめかみを押さえて弱弱しく答えた私を見たマリーがやって来た。
「飲みすぎたの？情けないわねえ」

その通りだった。答える元気もない。

「初めて飲んだのよ。私たちも調子に乗って飲ませすぎたわ」

代わりにアイリスが答えてくれた。マリーが呆れたように笑った。

「ご飯食べた方がいいわよ。食べやすいもの用意するわ」

去っていくマリーを見て今のうちに聞いておかなくちやと思う。

「ねえ、私どうなったの？変なことしなかった？」

「覚えてないの？」

アイリスが小声で驚いたように言う。

「全然。ねえ、大丈夫だった？」

それを聞いて何を思い出したのかアイリスがくすくす笑った。

「笑ってたわよ。何が面白かったのかしらないけど。で、それが落ち着いた後はその植木鉢としゃべっていたわ」

彼女は窓のふちに置いてある小さな植木鉢を指差した。

植木鉢……！？

アイリスは目を見開いた私を確認してから更に続ける。

「それを見たジェラルドがもう寝ろって言ったんだけど、嫌だって

駄々をこねて散々困らせた挙句、ソファで寝たの」

「本当？」

ああ、消えてしまいたい……。

私の悲痛な顔を見たアイリスは複雑な表情で頷いた。

「ジェラルドがベッドまで運んでくれたわよ」

どんな顔をしてジェラルドに会えばいいの……。

泣きそうになりながらアイリスに縋りつく。

「どうしよう……。アイリス、ジェラルド怒ってた？」

すると何故かアイリスは笑いを堪えるような顔になった。

「困っていたわ」

また迷惑をかけたんだ。私は本当に消えてしまいたいと思った。何があっても動揺しないジェラルドを困らせるなんてどんなに酷い事をしたのか。自分自身が恐ろしい。逆に覚えていなくてよかったのかもしれない。

ああ、今日、朝が来なければ良かったのに……。

私はお酒を飲んだことを心から後悔した。もう二度と飲まない。そのままソファにうずくまっているとマリーが呼びに来た。

「ちよつと、大丈夫？しつかりしなさいよ、早くご飯食べなさい」
まるでおばあちゃんのような口調のマリーに言われるがまま、なんとか出されたものを口に入れる。でも、不思議な事に食べ終わると胸のム力つきは収まった。そしてアイリスに薬湯をもらったおかげで頭痛も徐々に楽になった。

すると今度はますます昨日の失態が思い出された。まだ会っていない二人の反応を想像するのが怖い。

なんて言えはいいの……。

マリーによるとまだ二人は降りてきていないみたいだった。こんなに遅いなんて初めてだ。私は早く起きる方だけど、ジェラルドの方が私よりも早い。彼は夜も一番遅いののだ。

それがまだ起きてこないなんて。疲れたのは私のせい？

そう思うとまた消えてしまいたくなった。私は酔って騒いだにしろは早く目が覚めたらしかった。アイリスもお酒を飲んだ次の日は逆に早く目が覚めるらしい。

しばらくして落ち着いた私はリビングの窓際に立って植木鉢を見つめていた。

……昨日私とどんなお話をしたの？

心の中で聞いても小さな植木鉢は答えてくれない。

「サーシャ？」

その声にはつと振り向く。急に動いたせいでまた頭が微かに痛んだ。リビングの入り口にはいつの間にかロレンスが立っていた。ロレンスは軽く笑みを浮かべて近づいて来る。

「また話していたのか？」

からかうような言い方に顔が赤くなるのが分かった。

「あの、迷惑かけてごめんなさい……」

下を向いて謝る。恥ずかしくて合わせる顔がない。ロレンスはぽんと私の頭に手を置いた。

「調子に乗って飲ませた私たちも悪かったよ。頭痛くない？」

もう大分収まった。私は顔を上げて首を振ってみせた。すると目が合ったロレンスはくすりと笑った。

「酔ったサーシャはなかなか可愛かったよ」

「……ご、ごめんなさい……」

恥ずかしさのあまり涙目になった私はロレンスを直視できなくなり俯いた。そして何か言わなければと焦り、思わず謝ってしまったのだ。情けない私を見た彼は苦笑いして「ごめん、意地悪しすぎたね」と言って抱きしめてくれた。

「ジェラルドは？」

しばらくしてロレンスの前でも落ち着きを取り戻した私は一番気になることを聞いた。

恐ろしい事に、彼はまだ起きてこない。

「今日はゆっくりすると言ってたよ」

「起きているの？疲れているのは私のせい？」

ロレンスは僅かに複雑な表情をみせた。

「もう起きていたよ。部屋にいただけだ」

「ジェラルド、怒ってる？」

「何に？」

今度は不思議そうな顔をした。

「私に。昨日私、ジェラルドに一番迷惑かけたんでしょう？」

「ああ、そんな事を心配していたのか。怒ってないよ」

会って来たら、と言われ私は恐々ジェラルドのいる部屋こわくわに向かうことにした。

そう、いつだって謝るのは早い方がいいもの……。

「サーシャです。今いい？」

私はちゃんと謝る言葉を頭の中に準備して扉を叩いた。

すぐにベッドの軋む音と床板を踏みしめる音が聞こえて、扉が開いた。

「どうした？」

「……………っ！！」

「あ、ああ、あの……、その……」

ジェラルドの姿を見て、私は頭に用意していた言葉がすべて飛んでなくなった。視線が定まらない私は拳動不審そのものだ。分かっているにしても、恥ずかしくて顔を見上げられない。でも、目の前の胸も見れない。

彼はしばらくして私の動揺している理由に気づいたらしかった。

「ちょっと待っている」と言うと部屋の扉を閉めた。

……………は、裸……………。

正確には上着に袖を通しただけ、だ。でも、男の人の体なんて初めて見た……………。

赤くなっているはずの顔に手を当てて廊下の壁にもたれ掛かった。

自分の心臓がすごい速さで動いているのが分かる。

……見てもよかったの……？

ジェラルドは私に見られても平然としていた。結婚した男の人以外に裸を見られるのはダメだっておばあちゃんに言われていたのだ。私が見るのはいいの？

それにしても、私とは全然違う……。

その衝撃に今見てしまった体を忘れられそうになかった。硬そうに引き締まった胸とお腹。あれが、正しいってこと……？後でマリ―に聞いてみよう。きっと彼女なら教えてくれる。

がちやっという音がして扉が開く。私は慌てて姿勢を起こした。気づけばジェラルドの事ばかり考えている自分に気付いて、私は改めて恥ずかしくなった。

「悪かった」

出てきたジェラルドはもう上着のボタンをすべて閉じていた。

どうしてさつきは開いていたのよ……、と思うとなんだか泣きたい気分だった。

「なんだ？」

「あの、昨日の事で……」

私は辛うじて彼の喉元まで顔を上げて話していた。でもダメだった。今は気まずくって目を見て話すなんて無理だ。

「ああ……」

そこまで聞くと彼は私の言いたいことが分かったようだった。

「下で話そう」

さつと先に立って廊下を歩いていく。

とんでもない事になってしまった。

ジェラルドの後ろ姿を見て廊下を歩きながら、私はまだ落ち着かない胸を押さえて必死に落ち着くようにと言い聞かせた。

第二章 頭痛（後書き）

どうでもいい後書き

なんだかとんでもない事になってますね……（他人事）。

二人はどこに向かっているのやら（笑

それにしても、お酒 頭痛とくるサブタイトルのなんと捻りのない
ことか。本編読まなくても話の流れが分かるっていう……。

第二章 自覚：ジェラルド

気の毒な事をした。

俺は目の前でまだ落ち着かない様子の娘を見て密かに反省していた。

朝起きて上着に袖を通しただけの中途半端な格好で考え事を始めたのが悪かった。突然娘が尋ねてきたことに軽く驚いた俺は、そのまますぐに扉を開けた。自分はすっかり着替え終わったものだと思違いしたのだ。慌て出す娘を見るまで自分の状態に気付きもしなかった。

それにしても、まさかこれほどうろたえられるとは。

全裸だったわけではない。ただ上着の前を閉じ忘れて上半身が覗いていただけだ。だが、それでも初心な娘には刺激が強すぎたらしかった。彼女はずっと祖母と二人暮らしだった。男親か兄弟が居なければ男の体を見る機会はないだろう。それで、目の前にいる彼女はさっきから俺の顔を見られずに視線が定まらない。

……可愛らしいもんだ。

口元が緩みそうになるのを堪える。同じ部屋にはロレンスもいる。この男に気付かれたら厄介だ。

「サーシャ、ジェラルドに何か言われたのか？」

「……えっ、ううん。な、何も言われていないわ」

食堂に下りてきてから俺たちはまだ何も話していなかった。しかし、娘の様子は普段とは明らかに違う。それをロレンスは不思議に思っただけ。

「昨日の事がどうしたんだ？」

娘が何を言いたいのかは分かっていた。酒を飲んで酔った事を気にしているのだろう。しばらくためらった後、彼女はやっと俺の目

を見た。

「あ、あの、ごめんなさい。私、昨日ジェラルドにすごく迷惑かけたみたいで……」

申し訳なさそうにおずおずと見上げてくる揺れる瞳。こんな目で見られてはどんな怒りも吹き飛ぶ。それに俺は別に昨日の事を迷惑だとは思っていないかった。

「別に迷惑だったとは思っていない」

彼女は少し首を傾げて困ったような顔をした。

「あの、私何をしたの？全然、覚えていなくて……」

他の二人は何があつたか話さなかつたらしい。確かに、全てを知つたら卒倒してしまうかもしれないな、とさっきの動揺振りを思い出して心の中で笑う。

「一人で笑っていたな」

俺は昨夜の一部を選んで適当に返した。全てを知らない方がこの娘のためだ。

「それは聞いたの。それから……う、植木鉢とお話して、その後ジェラルドを困らせたって……。私、そんなにひどい事したの？」

言いながら恥ずかしくなったのか頬がほんのり色づく。昨夜もこんな顔だったなと思い出す。確かに、迷惑だとは思わなかつたが弱りはした。

娘は自分がどうやって俺を困らせたのかを知りたいらしいが、それを教えるのは無理だった。罪だ。

「いいや、もう寝ろと言つても聞かなかつただけだ」

ロレンスは隣で密かに笑っていた。この男は俺が弱っていた訳も知っている。

「ごめんなさい。もう二度と飲まないわ」

娘は肩を落として目を伏せる。心から悔いている様子が全身から伝わってきた。

「ああ、そうだな」

そんな彼女にそれも少し残念だと思つている事は言えない。する

と彼女は立ち上がった。

「あと、重かったでしょう。部屋まで運んでくれてありがとう」
もう一度申し分けなさそうに言うと、それに頷いた俺を見てから
食堂を出て行った。

前にも言われたような気がするな、と思った。抱き上げた体は軽
いくらいだった。そして同じ人間だとは信じられないほど柔らかく
しなやかだった。

それを思い出して小さく息を吐く。もう、自分の変化は疑いよう
がなかった。

本当にどうかしている……。

「もう二度と飲まないなんて残念だな」

娘の気配が消えた後、隣の男が笑いながら言った。やはり俺の心
は読まれているらしい。

俺はそれに鼻を鳴らすだけで答えた。

「あら、おはよう。朝食を用意しましょうか？」

宿の娘が奥から出てきた。それを聞いて時間を確認するともう昼
前だった。ロレンスも既に食事を終えている。

「いや、朝は遠慮しておく」

「そう、お昼を多めにするわね。お茶入れるわ」

「ああ、頼む」

はきはきした村の娘だった。夫婦は奥にいるらしいが出て来ない。
泊まっているのが俺たちだけなので彼女だけでも手が足りるのだろ
う。

静かな食事だった。

俺とロレンスとアイリスはほとんど会話らしき会話をせずに淡々と
昼食を取っていた。娘はあまり昼食を食べない。そういう生活だ
つたらしい。いつも軽くつまむ程度だ。今は「さっきたくさん食べ
させられたからいらない」と言って降りてきてはいなかった。

俺がちょうど食べ終えた頃、どたどたという階段を駆け下りる賑

やかな音がした。

「間違いなくサーシャね。何かあったんだか」

アイリスが呆れたように独り言を言った。俺は思わず笑っていた。これほど慌てるのは珍しい。フェアリーに追い掛け回されて以来か。普段はわりと大人しいのだ。

「アイリス！アイリス！大変っ！！」

彼女は声を上げて駆け込んできた。

「なによ。そんなに大声で騒いで」

「……これ、わ、わあっ！」

娘は食堂に入ってアイリスの側に駆け寄って何かを言い出そうとしたが、突然腰がくだけたようにがくつと床に崩れ落ちた。

「ちょ、ちよつと、大丈夫？」

アイリスが慌てて椅子を引いて立ち上がり、近寄ってしゃがみ込む。

「あれ？な、なんだか急に力が抜けて……」

今度の声は驚くほど生気がない。

ロレンスと俺は何事かと顔を見合わせた。テーブルの反対側に沈んでしまった彼女の姿はここからでは見えない。

「そう、そうよ、そんな事よりこれ見て」

「ええっ！ほんとに？嘘でしょう！？」

今度はアイリスが大声を上げた。

「……一体何だ？」

俺は思わず立ち上がった。ロレンスも立ち上がり俺とは逆から反対側へ回り込む。騒ぎに驚いた宿の娘まで奥から出てきた。

「ねえ、見て」

満面の笑みを浮かべた娘が力なく掲げたのは鮮やかな緑色の光を放つ本だった。あれはアイリスから借りて持っていた魔術書だ。

まさか、この娘に反応したのか？俺は驚きに目を見張った。

「信じられないわ……」アイリスは首を振りながら言う。

「ああ、でも上にはサーシャ以外にいなかったし、本が間違えるハ

ズがないし。でも、本当に反応するなんて。それにまさか緑だな
て……」

ぶつぶつと言葉を続けている。本当に信じられないらしい。

「ねえ、アイリス。なんだかすごく疲れたんだけど、どうして？」

娘の声にはやはり力がなかった。息も上がっている。

それを聞いた彼女は はっとした顔をする。

「そうよ、ここまで降りて来られた事に驚くわ。私なんて反応した
後すぐに倒れて丸一日寝込んだんだから。初めてはすごく力を使う
のよ」

「ふふふつ、光った事にびっくりしちゃって」

弱弱しく笑った娘を見て、俺はこの娘らしいなと内心呆れた。

「ジェラルド、上まで運んであげてくれる？」

そう言つて、振り返り俺を見上げる。すると娘が慌てだした。

「い、いいわよ。私自分で戻るわ」

「でも立てないでしょう？」

自分だけ立ち上がったアイリスが冷静に返す。確かに、娘は立ち
上がるうと椅子にしがみついているが力が入らないらしい。

「で、でも……っ！」

そこまで嫌がられると、逆に運びたくなるものだ。それをこの娘
は分かっている。俺は俯いてしまった娘に近づいてしゃがみ込ん
だ。

「立てないんだろう。ほら」

言つと彼女は泣き出しそんな顔で俺を下から覗き込んだ。

「でも……」

まだ躊躇しているらしい。潤んだ瞳と不安げな様子が何とも言え
ない。俺は口元を上げて見せた。

「迷惑だとは思っていない。早く掴まれ」

それを聞いて観念したらしくおずおずと両手を伸ばし、俺の肩に手
を置いた。

「掴まっていないと落ちるぞ」

「……きゃっ…！」

耳元で囁いてから細い腰を引き寄せて横抱きにして立ち上がると、短い悲鳴が上がった。その瞬間、肩に置かれていた小さな手にぎゅっと力がこもる。俺はそれに満足感を覚えて娘を見下ろした。さつき風呂に入ったらしくまだ少し湿っている髪からは甘い香りがする。彼女は恥ずかしさのためか体を硬くして顔を隠すように俯いていた。長い睫が微かに震えている。

「あら、サーシャ、良かったわねえ」

様子を見に出てきていた宿の娘が悪戯っぽい笑みを浮かべて娘に声をかけた。

「よ、良くないわ！」

真っ赤になつて怒ったような顔をそちらに向けて言い返した娘を見て、いじめてやりたい気が起こった。

「なんだ、そんなに嫌か」

彼女の耳元で敢えて低い声で囁いてやると娘は思いつきりうろたえた。

「ち、違うの。あの、そうじゃないのよ。今は……」

狙い通り、さっきの否定で俺が傷ついたと勘違いしたらしい。全く、からかい甲斐がある。

言い訳の途中で口の端を上げて見せると、彼女はからかわれたと気付いたらしい。口を閉ざして弱り果てた表情で俺を見る。もう言い返す気も起こらないようだった。そのまま力なくうな垂れると顔を伏せた。

苛めすぎたか……。

俺は娘を抱く腕に力を込めるとさつきからずっと呆れたように笑っているロレンスに一瞥をくれて、食堂を後にした。

第二章 自覚：ジェラルド（後書き）

どうでもいい後書き

サーシャの失態（笑）はそのうちサイドストーリーでもアップしようと思っています。

もう、書けているんですけどね。本編に入れるのは恥ずかしすぎる（？）ので……。

第二章 鼓動1

死んじやうかもしれない……。

私は息苦しさすら感じてぎゅっと目を閉じた。本が光って体の力が一気に抜けたからじゃない。心臓が壊れてしまいそうだからだ。私の胸は今までにないくらい激しく鼓動を刻んでいる。この激しさは今朝とは比べ物にならない。

その一方で、私がもたれ掛かっているジェラルドの胸の鼓動は静かなままだった。

ときどきしている事に気付かれていたらどうしよう。ときどきしている私がおかしいの？

そう思って目を上げるとジェラルドのがっしりした首と横顔が目に入った。

……ものすごく近い。

それに気付いて、どんな表情を作ればいいのか分からなくなった私はまた俯いた。

重くないのかな……。

膝の裏と背中に戻された腕は驚くほど硬く、力強かった。そして手を置いている肩も、頬を預けている胸も。硬く張り詰めていて、でも温かい。ジェラルドは私を抱えたまま階段を上って行くところだった。全く危なげなく、楽々と。

なんて安心するんだろう。私はこんな状況にも関わらずそんな事を思ってしまった。男の人ってみんなこうなの？思わず、力を肩の力を抜いて全てを委ねたくなってしまふ……。

「あの、もう大丈夫だから下ろして……」

部屋の前でジェラルドに訴えてみても、返事は返って来なかった。ちらと見下ろされて、その無言の迫力に気圧された私はそれ以上何

も言えなくなる。

両手が塞がったままだと部屋に入れないだろうと思ったのに、彼は私を抱えたまま器用に手と足で扉を開け、そのまま部屋に入りシ―ツまでめくると、ようやくベッドに下ろしてくれた。

体を離して彼に見下ろされると、私は改めて恥ずかしくなった。みんなの前でへたり込んだ拳句、抱きかかえて運んでもらうなんて安心して居る場合じゃなかった。

「あ、ありがとう」

私はそんな思いを誤魔化すように曖昧に笑って見せてから、緩慢な動きで片方ずつ靴を脱いでいく。胸の鼓動は少しましになっている。でもまだ力の抜けた体はすぐくだるい。

ジェラルドは何も言わずにベッドに入る私を手伝ってくれた。もぞもぞと仰向けに寝ると、小さな子供にするみたいに肩までシーツをかけられる。その後、彼はそのまま私の横に腰を下ろした。

ギシツとベッドが軋む音がした。

すると何故か突然、今朝のジェラルドの裸が頭に蘇った。

……な、なに考えてるの……っ!?

せつかく落ち着いたのに、また顔が熱を持っていくのが分かった。そんな私の考えなんて知る由もないジェラルドは寝転んだ私を見下ろして軽く首を傾げた。

「良くやったな」

「……!!」

本が光った事を言われているんだと気付き、嬉しさが胸に広がる。褒めてくれるなんて思わなかった……。

放って置いたらにやけてしまいそうな口元を結んで頷いた。

「魔法、教えてくれる?」

「ああ、治癒魔法以外ならな」

ジェラルドはふつと笑って目を細めた。それは初めて見るような優しい顔だった。そんな顔が見れたことがすごく嬉しくて、私にもっこり微笑み返した。

すると一瞬だけ私から視線を逸らしたジェラルドは、少し身を乗り出して私の肩の横に片手をついた。再びギシッという音が響くと共に影が落ちる。

大きな体に覆い被さるように真上から見下ろされて、私は動けなくなつた。すぐそこには誰よりも綺麗なブルーの瞳。それを意識した途端、私は魔法にでもかけられてしまったかのようにジェラルドの瞳から目が離せなくなつた。

不意に、彼の空いているほうの手が伸びてきて、指がそつと私の頬に触れた。そのまま横髪を撫でるように梳かれる。荒れた手が私の耳元で優しく髪をなぞるように動いている。

……ジェラルドに髪を撫でられてる……。

あまりの事に、私の頭の中は動きを止めてしまったらしかった。何も考えられなくなつて、全神経がジェラルドの手の動きに集中する。

……え……。

突然、顔が近づいてきたことに気づいて、ぎゅっと目を閉じる。

柔らかなものが頬に触れた。そして、ちゅっという小さな音。

離れた気配に恐る恐る目を開けると、またジェラルドと眼が合った。いつもの無表情のようだけど、どこか優しい眼差し。

……い、息が……。

お互いの顔の距離が近すぎて、私は息を止めたまま吐くことも吸うこともできなくなつていた。息を吐いたらジェラルドにかかつてしまう、とその事がすごく気になって、私は深い青色の瞳を見つめ返したまま身じろぎもせず固まっていた。

すつと目を伏せたジェラルドは姿勢を戻すと軽く笑みを浮かべた。「ゆっくり休め」

またギシッという音をさせて立ち上がるとそのまま部屋を出て行った。

……びっくりした……。

一人になった薄暗い部屋の中、私はやっとまともな呼吸を再開させた。安心して天井を見上げる。胸が苦しい。

ジェラルドにおやすみのキスをされるなんて……。

嫌だったわけじゃない。そう、別に珍しい事でもない。ただ、失礼な話だけど、おやすみのキスとジェラルドが結びつかないのだ。あまりにも意外で信じられない。

ただのおやすみのキスのはず。なのに、どうしてこんなにも胸がときどきするの……。

や、やだ……。

私は思わずシーツを頭まで被ってベッドにうずくまった。寝ようとして目を閉じて、ジェラルドの優しい眼差しと青い瞳が瞼の裏に浮かんでくるのだ。それがとてつもなく恥ずかしいような気がして別のことを考えようと努力してみたけど、ダメだった。それから私は眠りにつくまでのかなりの間、なかなか消えてくれない映像に悩まされ続けた。

お腹空いた……。

目が覚めてまず思ったのはこれだった。外はまだ雨が降っている。薄暗い部屋の隣のベッドではまだアイリスが眠っていた。このお腹の空き具合からすると、私はどうやら夕飯に起きなかったらしい。

着替えて下に降りると食堂にはいつも通り、早起きのジェラルドがいた。彼の姿を見て昨日の事を鮮明に思い出した私は一瞬、食堂の入り口で足を止めた。

おやすみのキス……。

考えてみれば、男の人にされるなんて初めてだったのだ。でも、おやすみキスはおやすみのキス、だ。あまり意識するのも変な気がして、私は深く考えないことにした。

「おはよう」

ジェラルドは私を見て頷いた。

「体は？」

「もう大丈夫よ。今日出発するんでしょ？」

「ああ、雨だが風は止んだ。しばらくすれば晴れるだろう」

「おはよう、サーシャ。もう大丈夫なの？」

マリーが台所の奥から出てきた。悪戯っぽい笑みを浮かべている。それを見て、昨日からかわれた事を思い出した。どうも私はからかわれ易い性格らしい。旅を始めてから分かった事だ。今までは全然そんな事ないと思っていたのに。

「大丈夫よ。ねえ、すぐくお腹空いてるの」

ジェラルドに聞かれてしまわないように台所に近づいて小声で言う、マリーは笑った。

「夜食べなかったものね。なに？ 恥ずかしすぎて降りて来られなかったの？」

「ち、違うわよ！ 寝ていただけよ」

「ふーん、でも、彼やっぱり素敵じゃない。お姫様抱っこだなんて」マリーは私を意味ありげに見るとくすくす笑い出した。

ああ、思い出したらまた恥ずかしくなってくる。私は思わず額に手を当てて俯いた。

「もう、やめてよ……」

「ふふっ、いいじゃない。彼、結婚してないんですよ。お似合いよ」マリーはにつこり笑ってそれだけ言うところっと思返し、台所の奥へ入って行った。

……お似合い？ 私とジェラルドが？

呆然として言われたことの意味を考えると、大変なことに気付いた。

私たちこんな所でなんて話をしているんだろう！ 後ろではジェラルドがまだ朝食を取っているのに。

聞かれてなかったかな……。

勇気を出して恐々振り向くと、彼は黙々と食事をしていた。

……よかった……。

何気ないふりをして彼から一番遠い席に座る。今はなんとなく、近づきにくい。食堂のテーブルは大きな楕円形で10脚も椅子があるのだ。私たちしかないし、どこに座っても大丈夫だ。

「なによ、喧嘩したの？」

食堂に降りてくるなり、アイリスは私とジェラルドを交互に見て言った。まだおはようも言っていない。アイリスの後ろにはロレンスもいる。

「どうして？」

私はすっかり落ち着いていつもより多めの朝食を食べていた。私とジェラルドが喧嘩になるはずがないじゃない。絶対勝てないもの。「なんでそんなに離れて座っているのよ？」

「ああ……」

自分が不自然な座り方をしていた事をすっかり忘れていた。でも、説明できない。自分でも近づきにくかった理由はよく分からないのだ。

「なんとなくよ」

私は食べながら適当に返した。

「本当か？彼女が嫌がるような事をしたんじゃないだろうな」

……えっ？

静かなロレンスの声は驚くほど冷たかった。それに胸が跳ね上がり、顔を上げる。部屋に入ってきてジェラルドの側に立ったロレンスはジェラルドを見下げるような冷徹な眼差しだった。いつもの優しい彼じゃない。

……怒ってるの……？

突然、胸がぎゅっと締め付けられて、背筋を冷たいものが走った。ジェラルドはロレンスを見返して不機嫌な顔になった。

どうして……？

よく分からない展開に真っ青になった私は慌ててお皿を持って立ち上がった。

「ジェラルドはなにもしてないわ」

言いながらジェラルドの向かいに座っていたアイリスの隣に座る。「本当に？」

ロレンスは私を見て硬い表情で聞いた。私に向けられた声はいつもの穏やかな声に戻っている。けれど、雰囲気は鋭いままだった。

「うん、本当に……」

私はぎこちなく頷いた。すると彼は無表情のまま黙り込んだ。

ロレンスはいつもとは別人みたい。そして嫌そうな顔をしたジェラルド。あんなに露骨に嫌な顔をしたのを見たのは初めてだった。離れて座っただけでこんな事になるなんて……。

食堂はいつもとは違う、異様な空気だった。誰も話さないぴりぴりした空気。

みんなに合わせてとりあえずフォークを持っていた私はそれを置いた。何も喉を通りそうにない。食欲なんてすっかりなくなってしまった。

この空気を作り出したのは間違いなく私だった。ロレンスが何を思ったのかは分からないけど、何かを勘違いさせる事をしてしまった私が悪い。

私はずっと、胸が締め付けられるような緊張を感じていた。

……嫌だ……。

食事をする音だけが響く状態にいたたまれなくなった私はついに口を開いた。

「……ごめんなさい……」

口をついで出たのは震えた声で、自分でも泣き出しそうな声だと思った。

それを聞いたロレンスは驚いたように顔を上げた。そして私の顔を見ると慌てた様子で立ち上がってテーブルを回って側にやってきた。

「ごめん、サーシャ。驚かせたね」

私の座っていた椅子ごと向きを変えさせると、彼は私の前に膝をついた。すると椅子に座っている私とほとんど同じ目線の高さになる。ロレンスは私が膝に置いていた手をぎゅっと握った。

俯いた私を下から覗き込んだ彼はいつもの穏やかな眼差しだった。「本当に、なんとなくだったの。こんな事になるなんて思わなくて……」

いつも通りのロレンスに対する安堵からか、それとも自分に対する後悔からか、涙が滲むのが分かった。

「悪かった。怖かっただろう」

優しく言われて緊張の糸が切れる。

……怖かった。

涙が溢れそうになって、私は慌てて目を拭った。

ロレンスは私を見て気遣うような表情になった。私はそのままそっと彼に抱き寄せられた。抱き締められる温もりに、ようやく肩の力が抜ける気がした。

本当に怖かった。いつもは優しい彼が怒るとこんなに怖いだなんて。静かなのにすごい迫力だった。宿めるように抱き締められた私はそのまましばらく、ロレンスの肩に顔を埋めてじっと溢れ出しそうになる涙を堪えていた。

「本当に泣いたり笑ったり忙しい子ねえ。どうしたらこう育つのかしらね」

「ほんと、私も知りたいくらいだわ」

「世話が焼けるでしょう？あなたも大変ねえ」

「まあ結構楽しんでるわ。飽きなくていいわよ」

出発の時、すべてを知っている呆れ果てた様子のマリーがアイリスと笑い合っていた。二人もいつの間にか仲良くなっていたらしい。

私は二人の横で密かに頬を膨らませていた。

なんだか言いたい放題だ。別に普通に育ってきたもの……。

「でも、楽しかったわ。また会えるといいわね」

「ありがとう。私もすごく楽しかったわ」

マリーと抱き合って別れを告げる。旅の間は色々な出会いがあった別れがある。けれど、お別れの時、それを悲しむ人はいなかったみんな、また会いましょうって笑顔で別れるのだ。言葉にしたことはないけど、私はそれが少し苦手だった。理解はしていても、せっかく仲良くなれたのにとと思うと、この別れの瞬間を寂しいと感じてしまう。

「サーシャ、行くよ」

「うん」

呼ばれて慌ててロレンスの背中を追いかける。

まだ降り続く雨の中、私たちは様々な出来事があった村を後にした。

第二章　力：アイリス

夜、いつもなら朝まで起きないのに、不意に目が覚めた。すぐにいつもと何かが違う事に気づく。少し離れたところで、すでに起きていたロレンスとジェラルドが方膝について姿勢を低くしたまま剣を構えているのだ。

なにかいる……？

私は気配を感じて体を起こした。

「静かに」

ロレンスが私を見て囁いた。サーシャはまだ眠ったままだった。でも、二人とも声をかけようとはしない。

もしかして私も起きなければ、起こさないつもりだったの？それってどうなのよ、と呆れ半分でそう思いながら私は一応、サーシャを起こすことにした。

「ん……まだ……暗いよ？」

寝起きのサーシャは目を瞬いてぼそぼそとしゃべった。

「しっ……なにかに囲まれているの」

言つとサーシャの顔が引きつった。一度に覚醒したらしかった。

彼女も慌てて体を起こす。

闇に目を凝らすと確かに何かがいる。赤く光る眼らしきものが動くのだ。

徐々に近づいてきて、姿を現した相手は狼のような見た目だった。20匹くらいいる群れのみだった。暗いせいで魔物なのかそうじゃないのかはまだ分からない。まあ、明るい所で見ても姿を見ただけでは魔物かどうか分からない事もあるから、暗いところで見て分からないのは仕方がないことだ。

その中の一匹が飛び掛ってきたと思った瞬間、ジェラルドが結界を張った。私たちを覆う半球状の光の膜に勢いよく弾かれた魔物が

地面に転がり、そのまま灰のようなものになる。それを見たジェラルドは立ち上がった。

「魔物ね」

私も彼に続いて立ち上がりながら、地面の灰を見て呟いた。

「大したことはないな」

余裕な口調のジェラルドの言葉に思わずふつと笑ってしまう。頼もしい限りだ。まあ確かに、この程度の結界で勢いよく弾かれる魔物なら大したことはない、と私も思っていたけど。これはごく弱い結界で、それほど強い力があるわけじゃない。結界にも色々な種類があるのだ。

私は呪文を唱えてジェラルドの結界のより少し外側に同じ結界を張った。あえて、一回り大きくした。そして私を見た彼に『どうぞ』という顔をして見せるとふんと鼻で笑ったジェラルドは自分の結界を消した。

絶好の機会だと思っていた。今まで魔法を使うジェラルドを見た事がない。強いと言われているこの男の力がどれほどのものなのかやっとな確認できる。結界をあえて外側に張ったのには軽い挑発と彼の度量を見る意味があった。

ジェラルドは一人、結界の外に出た。

「えっ!?!」

サーシャが驚きの声を上げる。さっきからこの魔物に怯えているのはサーシャだけだ。

「寝ててもいいよ」

ロレンスがのんびりした口調で言う。彼は完全にジェラルドに任せようだった。あくびでもしそうな雰囲気だ。

「そんなこと……!」

サーシャはジェラルドが心配で彼から目が離せないようだった。ちらつとロレンスを見て中途半端に答えると、すぐにジェラルドに視線を戻した。

でも、サーシャの心配は杞憂に終わった。ジェラルドは一人であ

つという間に20匹ほどの魔物を無に帰した。

私はそれを冷静に観察していた。

無駄のない身のこなしだった。使った魔法は彼の属性の水の魔法。基本的な水の放出に変形とスピードを加える初級といえる程度の魔術だった。次々と襲い掛かってくる魔物を剣で交わしつつ、的確に魔法で攻撃する。水にだって物を切る力がある。使いようによっては殺傷能力の高い武器になるのだ。

ジェラルドは大きな魔法を使わずに基本的な魔法使った。これは戦う上で大事なことだった。いかに自分の体力を使わずに相手を倒すか。魔術師は先に体力を失った方が負けるのだ。

でも、私だったら自分を結界で守りながら大きな魔法を使って一度に攻撃するしかなかった。私には彼のように魔物の攻撃を避けるだけの剣の腕と、俊敏さがないから。

……やっぱりかなり強いのかも……。

魔術師には剣術の訓練を怠ける者が多い。魔術に比べると地味だからだろう。それら両方の腕を磨いてきたジェラルドが、他の者より飛び抜けて強いのは当たり前なのかもしれない。私はそう思いながら結界を消した。

「大丈夫？怪我してない？」

戻ってきたジェラルドにサーシャが心配そうに寄って行く。

女の子はこうあるべきよね。こんなふうに客観的に分析している私ってなんて可愛くないんだろう、と私は内心、苦笑した。

でも、これは私の癖だった。男社会の軍の中で上手くやっていくために身に着けた自分を守る術だ。

軍で集団生活をしていると女であるという事は不便な事が多かった。女であるだけで見くびられる、馬鹿にされる。そんな事は日常茶飯事だった。初めは驚いて悲しんだり、必死に食って掛かったりもした。今もう慣れたし今更何とも思わない。逆に、心の中でその男を軽蔑する余裕がある。そんな男に限って魔術の力で女である私

に負けたりなんかすれば、嫌がらせをしてきたりするのだ。

だから私は出会ったらなるべく早いうちに相手の性格と力を見極める力をつけた。どの男なら頼りになるか、全力でぶつかっても後腐れがないか、何をすればプライドが傷つくのか。訓練の時に相手を負かしたりして面倒な事になるのはごめんだった。変な噂を立てられたりすればもっと困る。私は反対する親、兄弟を説き伏せてやつとの思いで軍の魔術師になったのだ。問題を起こしたら家に連れ戻されるに決まっている。

そんな面倒な事になるくらいなら自分の力を偽って相手を勝たせる事なんてなんともないことだった。そんな些細な事で私のプライドは傷ついたりしない。心の中では思いつき相手を馬鹿にしてはいるけれど。

本当はお世辞やおべっか、上辺だけの作り笑いが誰よりも苦手な子供だった。そのせいで社交界にも馴染めなかった。だからできるだけ社交界から遠ざかりたくて軍に入ったのだ。

でも、可笑しなことに、何よりも苦手だと感じていたポーカフェイスやお世辞、遠まわしな言い方に皮肉。それらを同じ魔術師らと付き合うようになって学ぶことになった。魔術師には貴族の出身の者が多いのだ。

人生ってなにがあるか分からない。今では相手の心を読み取って自分の胸の内を隠すことが日常になってしまっているのだから。

人付き合いをひどく苦手としていた小さな私はもういない。

「アイリス、どうした？」

「うつん、なんでもないわ」

気付けばみんなは焚火の周りに腰を下ろそうとしていた。私も適当に座る。眠気はすっかり飛んで行ってしまっていた。サーシャも同じらしかった。ジェラルドの無事を確認して安心した彼女は魔法について熱心に質問している。

村を出てから、サーシャは魔法の練習を始めていた。と言ってもまずは文字を覚えることを始めたに過ぎないのだけれど。

サーシャに魔法の才能があるなんて、本当に驚きだった。町の人にもそれなりに魔法の才能は備わっているのかもしれないと言う事なのだ。ただ、その事を知らないだけで。

それにしても、魔術師でもあまり数が多くない治癒の属性。サーシャには驚かされてばかりよね……。

そんな事を思いながら、私はぼうつと焚火を見つめていた。私にはこの四人の空気が心地よかった。お互い変に気を遣いすぎるという事がない。ここでは作り笑いをしたりお世辞を言う必要がないのだ。サーシャとはもう遠慮の必要ない仲だし、男二人は頼りになる。ジェラルドはどちらかと言えば顔や態度に出るほうだと思う。さつき確認したことだけど、彼より大きな結界を張っても鼻で笑っただけで嫌な感じはしなかった。どうしようもない男の中にはそれに腹を立てたり、余計な事をするなど憤る者もいる。

ジェラルドがどんな環境で育ち、どんな教育を受けてきたのかは分からない。貴族以外の者が子供の頃にどんな教育を受けるのかは私も知らないし。でもこれで、少なくとも、ジェラルドが女を見下すような男ではないということだけははっきりと分かった。

ロレンスのことは昔から知っている。彼は誰とでも上手くやっ*うわて*ていける人だ。そういう意味では、彼は私よりもずっと上手だった。ロレンスだけは、あの笑顔の裏で何を考えているのか読めないのだ。昔からずっと誰よりも完璧な『貴族』をしている彼には私のここ数年の努力なんかじゃ到底、太刀打ちできない。

「疲れなかったか？」

「うっん、私結界魔法は得意なの。平気よ」

私は攻撃魔法より防御の魔法の方が得意なのだ。

「それは頼もしいな」

ロレンスは軽く笑った。

「ねえ」

私はさつきロレンスがジェラルドに全く力を貸そうとしなかったのを少し不思議に思っていた。ロレンスなら手を貸そうか、くらい言うはずだと思っていたのに。たとえ断られると分かっていたとしても。

「あなたとジェラルドって知り合ってどれくらいになるの？」

「やっと私たちに興味を持ってくれるようになったか。アイリス、遅すぎるよ」

いつもの調子だった。

でも、こんな事を言いながら自分の事をほとんど語ろうとしないのはロレンスの方なのだ。だから私も今まで聞こうとしなかった。

「冗談言ってないで。教えてくれないの？」

「いいや、知り合ったのは私が18の時だ」

8年も前だ。

「結構昔なのね。ジェラルドは昔から一人で戦うのが好きなの？」

これでロレンスは私の聞きたいことが分かったらしかった。なるほど、という顔をしてから首を横に振った。

「私は軍を指揮している姿しか見たことがないから本当のところは分からないが。ジェラルドは昔から誰よりも強かった。さっきの魔物くらいなら剣でも倒せたが、わざわざ私が出て行かなくても十分だろうと思って任せたんだ」

ロレンスが誰よりも強いというのなら、ジェラルドの力は相当なものだ、と私は改めて思った。ロレンスは冗談で大げさな言い方をするけど、大事な事は誤魔化したりしない。

「そう。ジェラルドは昔からずっとあんな感じなの？」

私は焚火の反対側で、何が分からないのかぼかんとした顔をしたサーシャに本を指差して説明しているジェラルドを顔で示した。

「いや、出会った頃は私がよくからかわれていたよ」

「本当？今とは逆だったの？」

「ああ、18の時だろう。私はまだ世間知らずなお坊ちゃんだったんだ。だが、彼はもう軍の指揮官で多くの部下がいた。……彼は女

性の扱いも下手ではなかったはずだよ」

そう言つとロレンスは内緒話を打ち明ける子供のような目つきで私を見た。

なんだか意外すぎて信じられない。

「嘘でしょう？じゃあ、今はどうなってるの？」
するとロレンスは笑い顔になった。

「さあね、少し調子が狂っているんじゃないか」

私は、ああ、サーシャってすごいわと心の中で感心してしまった。
私が答えないと分かつたらしいロレンスは続ける。

「あの男が元の調子を取り戻したら厄介だぞ」

そのロレンスの本気で嫌そうに^{しか}顰められた顔を見て、私は呆れ笑つた。

「おい、人の前で堂々と噂するのは止めたらどうだ」

笑つていた私たちをジェラルドがいい加減にしろという顔をして見ていた。

「聞こえてたの？」

「自分の名前は嫌でも聞こえてくる」

「褒めてたんだよ」

ロレンスが適当に丸め込もうとする。

「そうよ」

「どうだかな……」

ジェラルドは続けて何かを言おうとして、横のサーシャが持つていた本で口元を隠しあくびをかみ殺しているのに気付き、言つのを止めた。そして、サーシャを覗き込んだ。

「もう寝ろ。続きは明日だ」

「えっ、私まだ大丈夫よ」

「いつもならとつくに寝ている時間だろう。明日に響くぞ」

「でも……」

「でも、じゃない」

なんだか子供とそれを寝かそうとする父親のような会話だ。でも、

私も笑っている場合じゃないと気づく。今が夜中だという事をすっかり忘れかけていた。

ジェラルドに逆らえないサーシャは渋々といった様子で本を袋にしまい込んでいる。

「おやすみなさい」

そう言ってから、彼女はローブに包まって横になった。

「私も寝るわ」

ロレンスに告げて少し距離を取る。

別に特別に意識しているわけじゃないけれど、寝顔を見られるのは恥ずかしい。

「おやすみ」

静かに言ったロレンスに返事をしてから私もローブに包まって横になった。ローブの中に隠れるように小さくなる。大きく揺らいだ炎の影を見て、背を向けた焚火にどちらかが薪をくべたのが分かった。

野宿の時、ロレンスとジェラルドが座ったまま寝ているのを知っている。きつと、他の男と旅をしていたなら、私も座って寝る事を選んだだろう。でも、この二人なら大丈夫。私は何故か初めから根拠もなくそう信じられた。

この四人なら、何があっても大丈夫だ。

そう思い目を閉じると、じんわりとした暖かさが胸に広がっていくような気がした。

第二章 カ・アイリス（後書き）

第二章　冗談：アイリス

魔物に囲まれてから5日の夕方、私たちは村に着いていた。泊めてもらう事になったのは普通の民家だ。

「大変よ、アイリス。お茶が緑なの」

食堂に入るなり、先に席に着いていたサーシャが信じられないわという顔を私に向ける。それに思わず笑ってしまう。隣に座ってカップを覗き込むと、確かにお茶は緑だった。

「緑茶よね？」

「ああ、そうだ」

答えたジェラルドも半分笑っているような声だった。

「もう少し北のコルトアナ地方で飲まれているお茶よ」

この辺りではあまり飲まれないはずだった。この家の人がその辺りの出身か個人的に好きで使っているのだろう。私も昔何度か飲んだことがあるくらいだ。

「コルトアナ地方って本当にあつたの？」

サーシャは驚いた顔でジェラルドを見る。

「ああ。この大陸の一番北だ」

「そう……」

彼女は何故かすつきりしない顔で返事をした。コルトアナという地名に何か引つかかるものがあるらしい。

何が気になるんだろう。一言言葉を交わしている私にも、サーシャの思考回路は時々よく分からない。聞いてみようと思ったけど「食事にしよう」というジェラルドの言葉でその考えは中断された。それぞれが食前の祈りを唱えて夕食が始まった。

「ああ……なんだか甘くておいしい」

ゆつくりとカップに口をつけたサーシャが溜息混じりの声と共に満面の笑みを浮かべる。

こっちまでつられて笑ってしまうような笑顔だ。

もし、この旅にサーシャが居なくて、ジェラルドとロレンスと私だけだったらきっと私はとつくの昔にリタイアしていたと思う。私たちは四人だから上手く成り立っているのだ。

食事後、私はリビングで本を膝に広げたままぼんやりしていた。部屋に戻らずにここに居るのはなんとなく、だった。ここから見える食堂のテーブルではサーシャがジェラルドに魔術書の文字を教えてもらっている。

二人はなんだかい雰囲気だ。私がここにいるのは二人を見ていたいような気がするからかもしれない。ジェラルドは相変わらず口数は少ないけれど、サーシャと話す時は声とか表情がちよつとだけ優しくなる。それに、前よりずっと雰囲気が柔らかくなった。二人を見ているとすごく微笑ましい。

「座っても？」

さっきお風呂に入ると言っていなくなっていたロレンスだった。さっきここを横切って台所の方へ向かって行ったのに、また戻ってきたのだ。手にはカップと小さなお皿を持っていた。

「ええ」

返事をするロレンスは小皿を前のテーブルに置き、私の隣に座った。

「なにこれ？」

「今宿の人にもらったんだ。カムクワットを蜂蜜で煮た物だとか言っていた。良かったらどうぞ」

小皿に載っているのは小さくて丸い鮮やかな黄色の果物だった。

「これもコルトアナ地方の果実かしらね」

「さあな。私も見たことがない。サーシャはすごく甘いと言っていたよ」

私は呆れて笑った。だって、甘くて当然なのだ。蜂蜜で煮てあるんだから。

「食べないの？」

「今は甘いものはいいい」

あまり興味がなさそうなロレンスを横目で見ながら私はそれをつ口に入れた。

喉にひつつくような濃い甘みが口の中に広がった。サーシャのすごく甘いというのは間違っではないなかった。でも、強烈な甘さの後に少し癖のある柑橘系のさわやかな風味が残る。結構好きかもしれない。

「君はサーシャに教えなくていいのか？同じ属性なんだろう？」

ロレンスが向こうの二人を目で示しながら言う。

「別に文字を教えるのはジェラルドでもできるわ。それに、わざわざ私が行って二人の邪魔しなくてもいいでしょう？」

冗談めかせた口調で言うと、ロレンスは呆れたように小さく笑った。

「それにしても、二人は本当に自然になったな」

「そうね」

「初めの頃が嘘みたいだ」

私もそれを思い出して笑ってみせる。ジェラルドの慣れない気遣いとサーシャの思い込み。あの頃の二人のすれ違いは今では笑い話だった。

するとロレンスは私に目を向けた。

「君は旅を始めてから変わらないな」

珍しいわ、と思った。ロレンスが私の話を振ってくるなんて。

私たちはわりとよく話をしている方だと思う。でも、いつも二人で話すのは、共通の知人の事や面倒な貴族の作法や習慣について。何気ない、当たり障りのない世間話ばかりで自分たちの話はあまりして来なかった。

「そうかしら」

私はとりあえず、曖昧に返した。

「君は全然ぶれないね。いつも落ち着いているし、冷静だ」

ロレンスの顔は真面目そのものだ。私には急にこんなことを言い出した彼の意図がよく分からなかった。

「あなたこそ。あなたは子供の頃から全く変わってないわ」

「それは……、喜んでいいのかどうか分からないな」

苦笑するロレンスに明るく告げる。

「いい意味で言ったのよ」

これは本心だ。ロレンスは昔から今と全然変わらない。話が上手くて、誰とでもすぐに仲良くなれた。いつもみんなの中心で誰からも好かれていた。私とは正反対だった。

笑って見せると彼はまた、真面目な顔になった。

「君は、子供の頃からは少し変わったね。笑ってくれるようになった」

今度は私が苦笑いした。

「人見知りだったのよ」

ロレンスは子供の頃何度も家へ遊びに来ている。でも、私は彼に上手く笑顔を作ることができなかった。緊張してしまって。

小さい頃の私は家ではよくしゃべる子供だったけど、家の人以外がいると全くダメだった。ロレンスはそんな私にも見かけるたびにっこり笑ってくれた。私はそれを見るたびに逃げ出したものだった。

すると、ロレンスは真面目な顔のまま静かに首を振った。

「それだけじゃない。ずっと魅力的になった」

真摯な眼差しを見て、くすぐったいような気分になる。

これだからロレンスは分からないのよ、と私は心の中でため息をついた。

この顔でこんな事を恥ずかしげもなく言うから、女の子たちはみんな騙されてしまうのだ。本気にしていたら身が持たない。

「ありがとう」

私はわざとらしい笑顔を作ってロレンスを見返した。

ロレンスは信じてないだろうという顔をしている。

「心からそう思っているよ」

私は返事の代わりに肩をすくめた。そして少し恥ずかしくなったのを誤魔化そうとカムクワットに手を伸ばしもう一つ口に放り込んだ。

お互いそれ以上は話さなかった。私はやっぱり、本を膝に置いたままぼんやりと向こうの二人を眺めていた。時々お茶を飲み、小さな果実を口に放り込みながら。

ロレンスもお茶を飲みながら、ただ座っているだけのようだった。そのまましばらく過ごしていると突然、ロレンスが今まで全く興味を示さなかったカムクワットに手を伸ばした。

それを見て、もしかして……と思った私はロレンスを軽く睨んだ。「甘いものはいらなんじゃなかったの？私が食べて大丈夫だって分かったから？」

初めて見る食べ物だし、サーシャのすごく甘いつて感想だけじゃ信用できないからだ。

村ではあまり砂糖を使わない。砂糖は高価なのだ。だから、私たちにとってはちよつと甘いだけでも、サーシャにはすごく甘いになってしまう。

口に入れた実を心なしに慌てた様子で飲み込んだロレンスは目を見開いた。

「……違う！アイリス、私が君にそんなことさせるわけがないだろう！？」

「え……っ」

ロレンスらしからぬ大きな声。

あっけに取られた私は呆然となった。

何かいけなかった……？

いつものように軽い冗談のつもりだったのだ。こんなに真剣に返されるなんて思ってもみなかった。

奥を見るとジェラルドとサーシャも何事かという顔でこっちを見ている。

「あ、あの」

「いや、……ええと、悪い。……冗談だったんだろう？」

途中で私の言葉をさえぎると、気まずそうな顔をしたロレンスは口元を押さえて私から顔を逸らした。こんなに歯切れの悪いロレンスを見るのは初めてだった。

「ええ……」

つられて私までぎこちなくなってしまう。

彼はあれを私が本気で言ったと勘違いしたのだろう。そして焦って大声を上げてしまったのだ、多分。

「本当にどうかしてたな。すまない、大声上げて」

心底後悔しているというふうに言いながら少し乱暴に髪をかきあげる。

そんなロレンスを見てしまった私は焦りを感じた。

「ううん。私こそごめんなさい。あの、なにか気に障ること言ったのなら謝るわ……」

ロレンスは前を向いたまま首を横に振る。目は果実の載った小皿を見据えていた。

「君は悪くない。……これを食べたのは君が気に入ったみたいだから、どんな味なのか興味が湧いたからだ。嫌な思いをさせて悪かったよ」

「そんなことないけど……」

冗談だったと分かったはずなのに、私から見えるロレンスの横顔は浮かない表情のままだった。その理由が分からない私は続ける言葉が見つけれなかった。勘違いだったと笑い飛ばせばすっきり終われることなのだ。

二人とも黙り込んだまま時間だけが過ぎてゆく。さっきの沈黙とは違って、どこか気まずい。

それでも、私はしばらくして落ち着いてみると、いつもと明らか

に様子が違うロレンスを見ることができてなんとなく得をしたような気分になっていた。ロレンスでも取り乱す事があるんだわと思うと親近感がわくような気がしてしまう。

でも、このままじゃダメよね……。

私はこの空気を変えようと口を開いた。

「で、感想は？食べてみてどうだった？」

聞くとロレンスはやっと私の方を見た。その表情はどことなく諦めが滲んでいるように思えた。

「ああ、本当にすごく甘いな」

顔を見合わせた私たちは二人揃って苦笑した。

第二章　冗談：アイリス（後書き）

どうでもいい後書き

いつの間にか、こんなに時間が経ってしまっていました……。夏休みの方が逆に忙しいなんて……。お待たせしてしまってすみません。

で、今回の隠れた主役（？）カムクワット。実在します。

は？聞いたことないよって方、kumquat（またはcumquat）で調べてみてください。英語です。

別に気にならないって方はスルーしてください。

なんせ、どうでもいい後書きですから（笑

第二章 過去と：ジェラルド

「……で、魔の世界の力が……聞いているのか？」

「……えっ？あ、う、うん」

娘は俺と目が合うなり視線を泳がせた。聞いていなかったらしい。俺がため息をつくと、彼女は目に見えて慌て出した。

「あ、あの、ごめんなさい。途中までは聞いてたのよ……だけど、もう一度言って……？」

「気になるなら向こうへ行けばいいだろう？」

さっきロレンスが声を上げてから娘の関心はそっちへ行ってしまったらしかった。手元ではなく向こうに意識を向けているのが丸分かりだ。彼女は一度集中が途切れるともう駄目なのは経験から分かっていた。逆に集中している間は感心してしまうほどだが。

「そんなことないわ。……だって……、そんなの無理よ。……喧嘩したのかしら？」

支離滅裂だ。

「気になるんじゃないか。今日はここまでだ」

不安そうに向こうを見る彼女を横目に本を閉じる。そして、その本を彼女の方へ押しやった。軍での指導中に部下がこんな調子であれば殴り飛ばすが、この娘にはそういうわけにはいかない。

「でも、私が行ってもいいの？二人が喧嘩してたら私が行ってもどうにもならないでしょう？」

ちゃんと分かっているらしい。俺は思わず鼻を鳴らす。

確かにロレンスが声を上げるのは珍しいが、俺はあの二人が喧嘩になるとは思っていなかった。万が一、喧嘩だとすればお互い黙り込むだろう。

「行ってみないと分からないだろう？」

「ほんとに？ジェラルドも一緒に来てくれる？」

「ああ」

上目で不安そうに見上げられると嫌だとは言えない。無意識だとしても、たちが悪いなと思いながら、俺は彼女の後に続いて立ち上がった。

「サーシャ」

どこことなく安堵した様子のアイリスが呼びかける。娘はその隣に腰を下ろした。俺も空いている席に座る。

「どうしたの？」

娘は恐る恐ると言った様子で問いかけた。

「なんでもないわよ。ちよつと行き違いがあっただけよ」

「ほんと？よかった。喧嘩じゃなかったのね」

「私とロレンスが喧嘩するわけないでしょ……。あ、ねえ、でももし喧嘩したらどっちが勝つと思う？」

何を思ったかアイリスは笑いながら問いかけた。それを聞いて娘は真剣な表情で考え出す。ちらと表情を窺うと、俺の向かいに座る男は複雑な表情をしていた。

「……アイリス」

娘がぽつりと口を開く。

「ほんとに？」

「うん、絶対にロレンスが先に謝るわ。ね、そうでしょう？」

「ああ、たとえアイリスが100パーセント悪くても私が謝るよ」
「ほら！」

「なんだか私がすごく悪いみたいじゃない？でも、それ覚えておいてよ。私は今後何があってもロレンスには謝らなくっていいってことよね」

「大変よ、ロレンス。もう怒っちゃったわ」

娘は心から楽しそうに冗談を言って笑いあっている。

その笑顔に心が安らぐ気がした。

俺は四人で過ごすこの旅のことを時々、夢かもしれないと思う。

今までは毎日ががむしやらだった。必死に腕を磨き戦争で生き残る事だけを考えてきた。戦争が終わってから地位も上がり、また執務に追われる毎日だった。

それが今はどうだ。

彼女たちに合わせて、俺にはゆっくりと感じられる速度で歩き、途中に村があれば必ず立ち寄る。昼間に村に着くような時は、寝るまで特にすることもなく、自由な時間を持ったことのなかった俺は暇な時間を持て余している状態だった。

一年、か……。

俺は何気ない会話を繰り広げる三人を見渡しながら、ぼんやりと考えた。

一年もの期間を与えられたときは長いと思ったが、思い返せばこの20年はあつという間だった。おそらく、後で思い返す時、この一年もあつという間だったと感じるのだろう。

俺は今までずっと一人で生きているのだと思っていた。

周りに目を向ける余裕もなかったし、強くなるためにはその必要もないと考えていた。余計な事をしている暇はないと。

だが、最近、俺は自分は間違っていたのかもしれないと思い始めていた。俺は一人で生きてきたわけではなかったのだ。養父母、王軍の男たち。気づけばいつの間にか多くの人に囲まれていた。

俺は自分でも無意識のうちにその誰とも距離を取って生きてきた。親を知らず、何事も一人で対処する癖がついていた俺には、軍の間、部下や上司という存在は居ても親しい友と呼べる者はいなかった。ロレンスにしても例外ではなかった。旅に出る前から何度か行き来はあった。共に酒を飲んだこともある。しかし、俺が胸の内を明かす事はなかったし、俺の生まれを語ったこともない。

そして、7歳で引き取ってもらった養父母とも上手い付き合い方が分からなかった。幼かったせいもあるが、突然出来た親という存在に戸惑った俺は、結局ぎこちない時間を共に過ごしたただだった。

12で城に住むようになってからは滅多に家に戻らず、今ではすっかり疎遠になってしまっている。

何にせよ、これほど誰かに目を向けるというのは初めてだった。そして、その努力をするのも。たった四人だ。互いに目も届きやすい。毎日顔を合わせていれば、どんな性格なのか、何を考えているのかが自然と分かるようになってくる。

常に誰かの目に曝されている状態に、初めは戸惑いもした。だが、思っていたよりも人と関わるのは悪くはなかった。これほどの時間を一緒に過ごしていても、煩わしいとは思わない。

彼らのお陰で、俺は変わったのだろうと思う。少なくとも、この旅から戻った暁には、養父母のところに顔を見せに行こうと思う自分がいるくらいに。

「君はどうだ？」

突然、ロレンスに話を振られて、まったく聞いていなかった俺は返事に窮した。

「……何がだ？」

「聞いてなかったの？ せつかくのチャンスなのに」

「いいってば、やめてよ。もう、二人とも！」

何の話題かは知らないが、笑い顔のロレンスとアイリス、頬を染めて憤慨している娘を見ると、いつものごとくからかわれているんだらうと分かった。

素直に感情を表す彼女は本当に見ていて飽きない。そしてくるくると変わるその表情の全てが愛らしかった。

「何の話だ？」

「だ、ダメ。聞いてなかったんだから、内緒！」

必死に言い張る娘を見て、まあ、今聞かなくてもいいかと思い直した俺はそうか、とだけ返す。すると追求されないことに安堵したらしい彼女は目を細めて満足そうに微笑んだ。

「で、何の話だったんだ？」

部屋でロレンスと二人きりになった俺は気になっていたことを聞いた。

「気になるか？」

思わせぶりな口調だった。分かっているくせに一々言わせたがるのがこの男の面倒なところだ。

だが、うんざりしつつも今はそれに付き合うしか方法がなかった。

「お前が俺に振ったんだろう」

「怖いものだよ。サーシャの怖いものは何かって言う話だ」

寝台に腰掛けたロレンスが面白そうに笑う。それでようやく俺も理解した。思わず苦笑する。

「なるほどな」

「ああ。彼女はまだ知らないんだよ。もう全員が知っているって事をね。それが可愛くてアイリスと遊んでたんだ」

「あまり過ぎるなよ」

「分かっているさ。もう泣かれるのは御免だからな」

その事を思い出したのかロレンスはわずかに顔をしかめた。

この男は男に対する態度と女に対する態度をあからさまに使い分ける。娘に対してもからかいはあるが、基本的には貴族の女に対する扱いと同じ扱いを貫いている。ロレンスにとって女を泣かせるような男は最も軽蔑に値する人間だった。

それが先日、意図していなかったにせよ、この男は娘を泣くませてしまった。それを彼は後で心底悔やんでいたようだった。だが、ロレンスが少し睨んだだけで泣くむとは俺も驚いた。あの程度で泣くようであれば、軍の訓練時の俺を見れば彼女は二度と近づいてきてはくれないだろうと思う。そして、一方で、次の瞬間には恐ろしいはずの男の胸で安堵する彼女の心理は、俺には理解できそうになった。

それに、娘は何もなかったとは言ったがこの男の推測もあながち

外れてはいなかったのだ。寝台で無防備に微笑まれ、込み上げる衝動を抑え切れなくなった俺が娘の頬に口付けたのは事実だった。それで少しは男として意識されるかという期待もあったが、彼女には通用しなかったらしい。娘の態度に以前と変わるところは見られない。

……手強いな……。

そう思い密かに笑う。

それから俺は、寝台に仰向けに寝転んでいる男に目を向けた。

「そう言えば、さっき声を上げたのは何だったんだ？」

「ああ……、ちよつとした誤解だよ。大したことじゃない」

「お前にしては珍しいな」

ロレンスが首を振ってため息をついた。

「別の事に気を取られてたんだ。アイリスの冗談を本気だと思って驚いたんだよ。……彼女はなかなか手強い」

そう言って自嘲的に笑う。ロレンスがそのような取り違いをする事自体珍しいことだった。が、俺にはそれよりも気になることがあった。

……手強い、か……。

独り言のように付け加えられた言葉。

なんとなくではあるが、俺には冷静な男を動揺させた理由が分かるような気がした。

第二章 過去と：ジェラルド（後書き）

どうでもいい後書き

えっと、サーシャの怖いものは何か。そして何故みんながもうそれを知っているのか。

その理由は既に書き終えているサイドストーリーに登場するんですが、なかなかアップするタイミングが見つからず……。

いずれ話の区切れのいいところで入れたいと思っています。

それまではご想像にお任せします。……なんて言いますが、大した話でもないんですけどね（笑

8月17日追加

新しく、グーテンベルクの歌【Side Story】の連載を始めました！

上で言っている話も、そちらの方にアップすることになります。

これで話の区切れを考慮しなくてもよくなった！！ので、近いうちに仕上げます。一週間以内には……！

第二章 鼓動2

「降って来たな」

その言葉に空を仰ぐ。

どんよりとした濃い灰色の空。また、雨だ。最近雨続き。夏から秋に変わる頃は雨が多くなる。私たちは立ち止まってローブを被ったりマントを着けたりした。

しとしと降る雨の中、私はジェラルドの後ろ頭を見ながら歩いていた。彼はもうずぶ濡れだった。

……どうして、フードをかぶらないんだろう。ロレンスも。

ロレンスは濡れてしまった髪を全て後ろに流している。

「何だい？」

見ていたことがばれた私は慌てて視線を外す。雨に濡れたロレンスはなんとなく恥ずかしくて直視できないのだ。横に近づいて来たロレンスをちらちら見上げながら、言葉を搜していると、彼は私を見下ろして、くつと笑った。

「なによ？ 今、なんで笑ったの？」

まだ、なにも言っていないのに笑うなんて！と思った私は強気に聞き返した。

「いいや、何でも」

でもロレンスはくつくつ笑うのを止めない。

「でも笑ってるじゃない！」

「いや、その格好があんまり、似合っていてついね」

「ローブ？」

「ああ、すっぽり帽子まで被っていると小さな子供みたいだな」

そう言ってまた、可笑しそうに笑う。

「な、ひどい……っ！ 私だけ？ アイリスだって被ってるでしょ！？」
私は真っ赤になって反論した。

「嫌だ、サーシャ。巻き込まないでよ」

振り返って私たちを見たアイリスが冷たく言う。

アイリスはいつもロレンスの冗談をあっさりかわしてしまう。ロレンスが完璧な笑顔で「今日も可愛いね」と言っても「ありがとう」と笑い返してしまえる。だから結局は私だけがロレンスの標的になるのだ。アイリスみたいになっことり笑ってありがとうって言えばいいのは分かっている。けれど、王子様みたいなロレンスに可愛いなんて言われてしまうと無理だと思う。

そんな事を出来るアイリスが特別なのだ。

やっぱり、アイリスとロレンスが喧嘩をしたらアイリスが勝つんじゃないくて、元から喧嘩になんてならないかもと考え直した。

だって、どう考えてもアイリスが強い。

「可愛いって言ったんだよ」

ロレンスはまだ笑っている。

「……し、信じられないわ!」

予想通り、可愛いと言われてしまった私は恥ずかしくなって逃げ出した。冗談だと分かっているても慣れていない私には軽くあしらうなんて無理な話なのだ。

ばしゃばしゃと水音を立てて走り、ジェラルドの前に出る。

これで誰にも顔を見られない。

密かに満足していると、後ろから声が飛んだ。

「おい、危ないから俺より前に入るな」

ジェラルドにも敵わない。私は仕方がなく、彼が隣に並ぶまで少し立ち止まった。並んで歩き出してちらっと見上げると、その瞬間、ジェラルドは前を向いたままくつと小さく笑った。

……な……!

また、顔が熱を持つ。あまりの事に声も出なかった。すると彼は私の方を向いた。

「すまん、分かっている。子供じゃないな」

……え……。

意外にもあつさり謝られて、拍子抜けした私は更に何を言っているのか分からなくなつた。謝られると、困ってしまう。

「……ねえ、ジェラルドは……どんな食べ物が好き？」

しばらくの沈黙の後、困り果てた私は全く違う話題を振ってみることにした。

我ながらすごい飛躍だ。でも、いい質問かもしれない。

そう思いながら、ジェラルドを見上げていると彼はじつと私を見つめ返した。そのまま口を開こうとしない。

「な、なに？」

答えにくい質問だつた？

少し戸惑いながら聞くと彼はようやく口を開いた。

「いいや、……特に好きなものはないな」

好きなものがないなんて。私はその答えにがっかりだつた。もし、好きなものがあれば今度料理する機会に作ってあげられるかもしれない、と少し期待したのに。

「そうなの？じゃあ、嫌いなものは？」

これもないのかな、と思っていた。彼は出されたものは何でも淡々と食べるのだ。

「ロマネスコだな」

「えっ！？どうして？」

「あの形と匂いが……」

なんとなく気まずそうに言う。私は思わず笑ってしまった。でも、すぐに気付く。

「あれ？前に食べていなかった？」

別に珍しくない野菜なのだ。スープやサラダにされて宿でも何度か出てきていたはずだつた。

「そうだな。別に食べられない事はない」

「でも、嫌いなもの？」

「ああ」

「できれば食べたくない？」

「ああ」

なんだか、ジェラルドの弱みを知った気分だ。ロマネスコが嫌いだなんて、ちょっと意外。地面を見てにやけてしまっていると、ジェラルドは私を覗き込むように少し顔を近づけた。

「後ろの二人には言うなよ」

「……秘密？」

ジェラルドにつられて小声で聞き返す。するとジェラルドは小さく笑った。

「ああ、秘密だ」

森での夜、雨は止まないままだった。

湿気った焚き木がやけに大きな音を響かせながら燃えている。私たちの上ではいつものように、ジェラルドの張った光の膜が静かに雨を弾いていた。

私は昼間の会話を思い出すたびに、にやけてしまうのを押さえるのに大変だった。

二人だけの秘密だって。今度ロマネスコが出てきたら私が食べてあげよう。

そう思いながらまた笑ってしまいそうになって口元を手で覆う。

……ダメダメ。あんまりその事ばかり考えているとみんなにバレてしまう。

そう思った私は手元の本に意識を集中させようとした。きゅっと口元を結んで頬が緩むのを堪えていた。

「サーシャ、美人が台無しだよ」

自分でも一人で変な顔をしている自覚があった私は、内心大きく動揺した。

でもロレンスはその理由を誤解したらしかった。彼の目は私の手元の本に向けられている。

「そんなに難しいのか？」

「う、うん、まあ……」

私は適当に言葉を濁した。

手元にある魔術の基本書。本当は大して難しくない。

本に使われている古代ピョーテル文字は現在使われているコナール文字の原型だった。ピョーテル文字を簡素化したのがコナール文字なのだ。だから文章全体としてみるとすぐ複雑に見えるだけでコナール文字と単語の綴りは全く変わらないし、変化の規則をいくつか覚えて自分で簡素化できるようになれば、実はすぐに読めるようになる。

私もたどたどしいけど、自力で読めるところまで辿り着いていた。本を読み込んで魔法の原理や呪文に込められた意味を理解すれば、次は呪文を使って実際に魔法の練習を始める事ができる。私が魔法を使えるようになるなんて夢みたいだ。

「そうかしら。そんなに難しくないでしょう？」

アイリスから指摘されて動揺がぶり返す。彼女は知っているから偽れない。

「え、うん……」

気づけばどつちつかずな返事をしていた。

これはまずいわ……。

「なんだか上の空ね」

「えっ、そんなことないけど……」

「ふーん、怪しい」

そう言ったアイリスは目を細めて私の顔をじつと見る。考えていることを見透かされてしまいそうな眼差し。

私は思わず、持っていた本で顔を隠した。

「そ、そんなに見なくてもいいでしょう。照れるじゃない」

情けないことに、これが私の精一杯の抵抗なのだ。

「なにが照れるよ」

アイリスが呆れたように笑う。でも、呆れられたせいか、それ以

上の追求はされなかった。

ほっと一人胸を撫で下ろす。秘密って言われたのに今日のうちにみんなに知られてしまったらどうしようもない。

もう寝よう……。

自分ではらしてしまう前に。

私は本を手持ち袋にしまい込んで、みんなにおやすみなさいと告げた。最近村と村との距離が離れている。雨で野宿だと横になつて休めない。そんな日が続くと、眠っても体の疲れが取れないような気がするのだ。そんな時はいつもより早く休むようにしているから、今日私がさっさと寝てしまっても疑われる事はないはずだ。

寝る姿勢をとる前に何気なくジェラルドを見ると思いがけず目が合った。

その瞬間、少し口の端を上げて仕方がないなという顔をされた私は頬が熱くなるのを感じて、それを意識した瞬間にぱっと目を逸らしていた。

や、やだ……。

笑われた。私は何を考えていたか、きつと彼にはお見通しなのだ。思いつきり目を逸らしてしまったけど、恥ずかしくてもうジェラルドの方を見るなんてできそうになかった。

俯いたまま、今日は顔を上げられないと思った。そのまま膝を抱えて顔を埋める。

どうしよう……。

私は逃げ出したいような衝動と戦っていた。なんだかすごくときどきする。

ジェラルドが小さく笑った瞬間に胸がぎゅっと締め付けられたのだ。

まだその余韻は続いていた。私はみんなに気づかれてしまわないように、目を閉じてそっと深く息を吐いた。

第二章 鼓動2（後書き）

どうでもいい後書き

今回はロマネスコです。珍しい野菜と言う事で思いつきました。日本では見たことがないので。一応、実在するよ、と言いたかっただけです。

ご存知の方はスルーしてください。

カリフラワーの一種です。

私は初めて見た時、これ、食べられるのかっ！？（失礼）と驚愕しました。大丈夫。ちゃんと食べられました。味もほとんどカリフラワーだったと記憶しています。もう結構前のことですが……。

日本でも探せば買えると思います（多分です）。

話は変わりますが、『グーテンベルクの歌【Side Story】』というのを新しく作りました。（グーテンベルクの歌の表紙ペー
ジから飛べます）

名前の通り、本編に入れなかった小話、エピソード等をアップするつもりです。

これで話の区切りを考慮しなくても良くなりました

今回、すでに新しく一話更新しています。

向こうの更新情報はこんな風に後書きでお知らせしていくつもりです。

覗いていただけると嬉しいです。

第二章 信用

宿の造りにしては食事が簡素な気がする。パンと野菜や薄いハムが入ったスープだけだ。

私は普段からこういう食事だったから別にいいんだけど、ロレンスとかアイリスはどう思っているんだろう。

私はそんな事を考えながらパンをちぎって口に入れた。

少し前に食べ終わったジェラルド、続いてロレンスがまるで合図でもあったかのようにほぼ同時に立ち上がった。今日はいつにも増して早い。おかわりしなかったのだ。

これだけで足りるの……？

気づけば、ジェラルドと目が合っていた。

「なんだ？」

「えっ？ うっん、なんでもないわよ？」

……また、だ……。

首を横に振って見せると彼とロレンスはそのまま向こうの部屋に行ってしまった、私はアイリスと二人食堂に残された。

またやってしまったと密かに反省しながら、私は自分の食事に視線を戻した。

あの日から、私は無意識のうちにジェラルドを目で追ってしまっている。困った事に、ジェラルドは鋭い。視線に気づかれて振り返られると簡単に目が合ってしまう。私はその時になって初めて、自分がジェラルドを見ていたことに気づくのだ。彼とは逆に私は鈍^{にぶ}すぎるみたいだった。

ジェラルドに「なんだ？」聞かれると返事に困る。さっきみたいに口に出して聞かれることは滅多になくて、いつもはなんだ？という顔をされるだけなんだけど、それでも十分に困る。

別に話したくて見ていたわけじゃないから焦ってしまっって、どう

返せばいいのか分からないのだ。何でもないと云うか、返事の代わりになに？という風に首を傾げて誤魔化してみせることになる。見ていたのは私なのに。

そんなことをもう何度繰り返したか……。今日も もう三回目……うっん、四回目かもしれない。私はすっかり数えないことにしていた。はつきりさせてしまつと落ち込む気がするから。

あの胸が締め付けられるような感覚は何だつたんだろう。きつと、それが知りたくて私は彼を目で追つてしまふのだ。

「お腹いっぱいなの？」

横を見ると、アイリスも食べ終えていた。椅子に背をもたせ掛けて深く座っている。もう完全に食事をする姿勢ではなくなっていた。「うっん……食べる」

彼女の言葉に口と手の動きを再開する。温かったはずのスープは冷めかけていた。

「最近ぼけつとしているわね」

「ぼけつとつて……なんだか嫌だわ」

「あなたの様子そのままを言っただけだ。なにかあるの？」

「うっん」

ジェラルドを目で追つてしまふんだけど、どうすればいいの？なんて聞けるわけがない。

「……そう」

言つとアイリスは立ち上がった。それを見た私は跳ねるように顔を上げた。

「行っちゃうの？」

「夜は魔法の練習に付き合つて約束したでしょ？その前に少しやつておきたいことがあるの」

「あ、そうなの……」

それなら引き止められない。

「サーシャなら一人で部屋まで戻って来られるでしょ？」

アイリスはちよつと笑いながら私を試すように言う。

冗談だと思うけど、明らかに子供に対して言うような口調だ。

「もちろんよ」

「真つ直ぐ部屋に戻って来るのよ。寄り道しないでね。知らない人に着いて行つちや駄目よ。お菓子あげるって言われても」

「分かつてるわよ」

わざとうんざりよという顔をして見せると、彼女は笑いながら食堂を出て行った。

早く食べよう……。

なんとなくため息を漏らす。

「あら、あなた一人？」

「はい」

アイリスと入れ違いに宿のおばさんが出てきて、驚いたように言われた私は苦笑を返した。

言われてみれば、こうして一人残されるのも珍しい。みんないつもは大体待っていてくれるのに。

しばらくしてようやく食べ終わった私も立ち上がった。

「お手伝いしましょうか？」

「あらそう？悪いわね。じゃあ少しお願いしてもいいかしら」

私は洗い物を手伝ってから部屋に戻る事にした。真つ直ぐ戻るように言われたけど、これくらいならいつものことだし、大丈夫よねと考えて。

部屋に戻ろうとした私は階段へ続く廊下の途中で男の人と出くわした。

今日は民家じゃなくて宿に泊まっているから、他にも宿泊客が居るのだ。確か彼は男の人ばかりの4人組のうちの一人だった。食事の前にジェラルドとロレンスが話をしているのをちらっと見たのだ。お互い顔は知っているし、同じ客同士。全く素通りするのもどうか

と思った私は軽く会釈して通り過ぎようとした。

「やあ」

につこり笑いながら片手を軽く上げて声をかけられた私は思わず、立ち止まっていた。

やあなんて軽い調子で男の人に声をかけられたのは初めてだ。私はどう反応するのが正しいのか分からずに戸惑った。

「こんばんは」

とりあえず、挨拶を返す。

すると彼は気さくな笑みを浮かべた。

「お嬢さんは遠くから来たんだろう？」

「はい……」

私はおつとりと返事をしながら、頭の中で素早く考えた。

旅の人は村から出ない人たちよりも、当然、物知りな事が多い。

グーテンベルクについてだって知っているかもしれない。

だからジェラルドやロレンスは同じ宿に泊まっている人がいれば、進んで話をする。私の瞳を見られて騒がれないように、彼らにどれくらいの知識があるのか探りを入れるのだ。貴族がお忍びで旅をしている場合もありうるらしいから、私も相手の身なりには特に注意するように言われている。

もし、ジェラルドやロレンスが、同じ宿に泊まっている人が紫の瞳とグーテンベルクを結びつける事ができると判断すれば、私は目を合わせないように気をつけることになる。食事も部屋で取る事になし、部屋からも出られなくなるのだ。前に一度だけそういうことがあった。あの時は本当に緊張した。

今日の人たちについては、ジェラルドもロレンスも何も言わなかった。だから心配は要らないだろう。それに、身なりもそれほど立派だとは言えない。私の方がいい服を着ていると言えるくらいだ。そう考えた私は少し緊張しながら慎重にその人と言葉を交わしていた。

「サーシャ、何をしているんだ？」

振り向くと、二階から降りてきたらしいロレンスが近づいてきていた。

「少しお話していたの」

彼は硬い表情で男の人の側をすり抜けてやって来ると、私の横で立ち止まった。

「彼女に何か？」

男の人はロレンスの冷ややかな視線を受けると少し表情を引きつらせた。

「いいや、何も。お嬢さん、引き止めて悪かったね」

そう言った彼はどこかきこちなく私に笑いかけた。

「いえ……」

まだそれほど大した話もしていない。

「行こう」

男の人に笑みを返した私はロレンスに肩を抱くようにして引き寄せられ、そのまま背を押されて歩き始めさせられていた。なされるがままだった。

静かだけに有無を言わせない口調。私はその時になってようやく、ロレンスが怒っている、という事に気づいた。階段の下で私から手を離れたロレンスは振り返らないまま先に上って行く。

「どこまで行くの？」

歩みを緩めない後姿を追いかけながら問いかける。私は少し焦っていた。

「部屋まで送るよ」

「でも、なにか用があって降りてきたんじゃないの？」

「後でいい」

あっさり言われてしまうと、それ以上は何も言えなくなる。

「ねえ……？」

ロレンスは部屋の手前で立ち止まって、私に向き直った。

「サーシャ、前にも言ったね。君は少し警戒心がなさすぎる。もう

少し警戒してほしい」

その冷静な眼差しに息を呑んだ。そうだ、私は前にもロレンスにやんわりと咎められた事がある。知らない人をすぐに信用してしまわないようにって。

でも、今回は私なりにちゃんと考えたつもりだった。

「ロレンスとジェラルドが話しているのを見たから……大丈夫だと思ってる」

恐る恐る見上げると、彼は首を横に振った。

「男に対する態度と女に対する態度が豹変する男もいる。私たちが大丈夫だったからと言って、君に危険がないという理由にはならない。こんな事は言いたくはないが、君が口を塞がれて部屋に連れ込まれでもしたら力では絶対に敵わないんだ」

オルディアでの出来事を思い出して唇を噛む。けど、あの時の人と今日の人は明らかに違った。

「悪い人には見えなかったわ」

「見た目ですぐに判断するんじゃない。君はジェラルドの時も見た目で判断していただろう？」

「あ……」

……その通りだ。

彼はほら見る、という顔をした。

「でも、初めから疑うの？」

それは失礼じゃないの？という意味を込めて、私は顔をしかめて見せた。

「それくらい用心してもし過ぎることはないよ。君なら知らない男には近づかないくらいでもちょうどいい」

確かに瞳のことはあるし、私は人より注意しないといけないって分かっているけど、そこまでするのはやりすぎだ、と思った。知らない人に近づくなと言われると、私はこれから知り合いを増やせなくなる。

「分かったね？」

「……はい」

言ってしまったてから、うな垂れた。念を押されて、思わずはいと返事をしてしまったというのが正直なところだった。

私の判断だけじゃ不十分って事？

これから男の人と話している所を見られたら、また今日みたいに怒られるの……？

そう考えている内に、ロレンスは部屋をノックしてアイリスに扉を開けてもらっていた。

私は思考がまとまらないまま部屋に入った。

「あら、二人一緒だったの？」

事情を知らないアイリスは私とロレンスを見て不思議そうな顔をした。

「少しいいか」

ロレンスに呼ばれたアイリスは私とロレンスを交互に見ると怪訝な表情で部屋を出て行った。二人が出て行くと扉が閉められて、私は一人ぽつんと部屋に残された。

とりあえず、ベッドに座ってみる。

納得できたような、できないような複雑な心境だった。

どうしてロレンスがあんなにも強硬な態度に出たのか、私はいまいちよく分っていなかった。

男の人と話すのはダメだけど、女の人とならいいの？

それとも、他の旅人はみんなダメなの？

どっちにしても、私は私なりに十分に注意していたつもりだった。そこが一番納得いかない。ロレンスは初めから決め付けるように私の注意なんてあてにならないというような言い方をした。

……男の人って分らない。

私は今初めて、笑顔じゃないロレンスは近寄り難い雰囲気を持つんだと気づいた。さっき旅の人に向けていた冷ややかな眼差しと牽制を含んだ口調はいつもの彼には見られないものだ。

親しみやすいロレンスにも私が知らない一面がまだまだあるのだ。

うつん、親しみやすいと思っていたからこそかもしれない。私は今まで彼の見えない側面に気を配った事なんてなかった。

見た目だけで判断するなって言われたのは、何も他の人に対してだけじゃないのかもしれない……。

そんな事を考えた私は俯き、それを追い払おうと頭を振った。

こう考え出すと皆をありのまま見ることができなくなってしまう。誰もが思っていることをそのまま顔に出すわけじゃないってことくらい、私にも分かっている。けれど、それはいつまで『そう』なんだろう。仲良くなっても、信頼していてもありのままを隠して振舞うことがあるんだろうか。

私に精霊の秘密があるように、人にはどうしても知られたくないことがあるのは仕方がないことだとしても、だからといって、日常の些細な動作の一つ一つを全て疑うような真似はしたくない。

適度に疑って、適度に信じる。こう言うのは簡単だ。でも、その線引きをどこで判断すればいいの。

私はため息をついた。

心から信じられる人がいないのは寂しい。この広い大陸で自分は一人ぼっちだと思うたびに、私は途方もない不安に押し潰されそうになる。おばあちゃんが居ない今、私が信じていると言える人は誰なんだろう……。

こう考えた私は落ち込んだ。分かっていた事でも、意識すると暗い気分になる。今の私には、私の事を一番に心配してくれる人がいないのだ。

私は戻ってきたアイリスに問いかけた。

「何の話だったの？」

「別に大したことじゃないわ」

「ねえ、もしかして私のこと？ ロレンス、なにか言ってた？」

「いいえ、違うわ」

私はその答えに違和感を覚えた。

「うそ」

そう言つと、アイリスがかすかに笑つた。

「あら、鋭いじゃない」

私が見抜けたのはアイリスに隠す気がなかったからだ。その通り、彼女はロレンスに何か言われたとあっさり認めた。

「なにを言われたの？」

「サーシャが男に話しかけられていたからもつと気をつけるようにつて」

「……私、……ロレンスに信用されてないの？」

私だけじゃなくてアイリスまで注意するなんて。私は今度からもつと気をつけると約束したのに。

驚きと悲しみで、裏切られたような気分になった。

「信用とかそんな話じゃなくて。心配しているのよ」

「それは分かっているけど、でも……」

私の顔を見て納得していないと分かつたらしいアイリスは私の目を覗き込んだ。

「この中ではサーシャが一番年下で力の弱い女の子だからよ。私たちはみんなサーシャを守らないといけないの」

情けないけれど、それは事実だ。

「アイリスだつて女の子なのに」

「私は魔術師なんだから、いざとなつたらそこら辺の男より強いわよ。だから、私とサーシャが二人でいたら私があなたを守らなくっちゃいけないの。でも、さっきはあなたを一人にしてみました。私はロレンスに怒られても当たり前なの。分かつた？」

「……うん」

返事をしてから、思い出した。そういえば、オルディアで皆から逸れた時、ジェラルドもロレンスも私に謝つた。私が危険な目にあえば、それだけ皆は自分を責めることになるのだ。私が弱くて、守るべき対象だから。

このままじゃ、いけない……。

必要以上に心配をかけたくない。精霊の力を大っぴらにすることはできないから、せめて、魔法が使えれば少しは違うはず。まるで私の心を読んだかのように、アイリスは私に笑いかけた。

「魔法の練習するんでしょ？」

「うん」

私は胸騒ぎを閉じ込めて微笑んだ。

とりあえず今、私はアイリスのこととロレンスのこともジェラルドのことと信じていると言える。彼らだってそうだと思いたい。

それで、十分でしょう……？

そう自分に言い聞かせた私はまた、いつものように込み上げてくる不安に目をつぶった。

第二章 信用（後書き）

どうでもいい後書き

遅くなつて本当に申し訳ありません……！

どうしても忙しく、九月中もかなりゆっくりペースになりそうです。毎回読んで下さっている方、本当にありがとうございます！感謝、感謝です。

この場でのお知らせが遅くなりましたが、少し前にSide Storyも更新済みです。目を通していただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1788e/>

ゲーテンベルクの歌

2010年10月14日13時15分発行